

せん だい の み い せき  
千代・能美遺跡

2003.3

石川県小松市教育委員会



## 例　　言

1. 本書は、市道能美小杉線改良工事に伴って、平成 13 年度に実施した千代・能美遺跡（せんだい・のみいせき）発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査・出土品整理および報告書の作成・刊行は、小松市（都市建設部道路課）の委託を受け、小松市教育委員会（文化課埋蔵文化財調査室）が実施した。なお、経費については「特定防衛施設周辺整備調整交付金」を経費とした。
3. 発掘調査の調査地、調査面積、調査期間、調査担当者は次のとおりである。  
【調査地】石川県小松市能美町ハ 127・111・93・67・50・10・ロ 66～81  
【調査面積】約 1,400 m<sup>2</sup>  
【調査期間】平成 13 年 10 月 2 日～平成 14 年 1 月 29 日  
【調査担当者】橋本正博、福海貴子
4. 出土品整理・報告書作成については、洗浄・注記・接合・復元・実測・トレース・図版作成作業を平成 13 年度・14 年度において以下の 5 名を雇用して実施した。なお、平成 13 年度は福海が、平成 14 年度は津田隆志が担当した。  
平成 13 年度：山田由布子  
平成 14 年度：柿田康子、国本久美子、谷口佳代、山崎千春
5. 出土木製品の一部については、(株) 東都文化財保存研究所に保存処理・樹種同定を委託した。
6. 本書の執筆は、第 5 章「出土木製品の樹種同定結果」については、樹種同定の委託先である(株)東都文化財保存研究所から提出された樹種同定結果報告書に基づき、津田が本書用に執筆したものである。また、その中にある解剖学的特徴は、その樹種同定結果報告書から転載した。その他の執筆および編集は津田が行なった。
7. 写真撮影は、遺構を橋本・福海が、遺物を津田が行ない、樹種同定を行なった木製品の顕微鏡写真については(株) 東都文化財保存研究所から提出されたものを転載した。
8. 本書で示す方位については、第 1 章～第 3 章においては真北、第 4 章においては磁北を示す。また、水平基準については海拔高 (m) で示してある。
9. 本書中の土層註にある、土色および色相・明度・彩度を示した記号（例えば 10YR4/1）は、「新版標準土色帖」に基づいたものである。また、埴土とは、粘土分を 50 % 以上含む土のことをいい、ほとんど砂を感じないで、粘り気が強い土をさす。
10. 本調査で出土した遺物をはじめ、遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。
11. 本書の作成にあたり、(財) 石川県埋蔵文化財センターの林 大智氏から、鉄製品・木製品等についてご教示を賜った。ここに記して深く感謝申し上げる。

# 目 次

第1章 遺跡の位置と環境 .....	1
第1節 遺跡の立地と自然環境.....	1
第2節 遺跡周辺の歴史的環境.....	2
第2章 調査の経緯と発掘調査の経過.....	6
第1節 調査に至るまでの経緯.....	6
第2節 発掘調査の経過.....	6
第3章 遺跡の概要と発掘調査の概要.....	8
第1節 遺跡の概要.....	8
第2節 発掘調査の概要.....	10
第4章 遺構と遺物 .....	12
第1節 調査区域内における遺跡の概要 .....	12
第2節 平地式建物跡.....	25
第3節 掘立柱建物跡.....	25
第4節 ミヅ.....	28
第5節 大溝.....	40
第6節 旧河川 .....	63
第7節 土器・木製品以外の出土遺物 .....	66
第5章 出土木製品の樹種同定結果 .....	70
第6章 まとめ .....	73
報告書抄録	
写真図版	

# 第1章 遺跡の位置と環境

## 第1節 遺跡の立地と自然環境

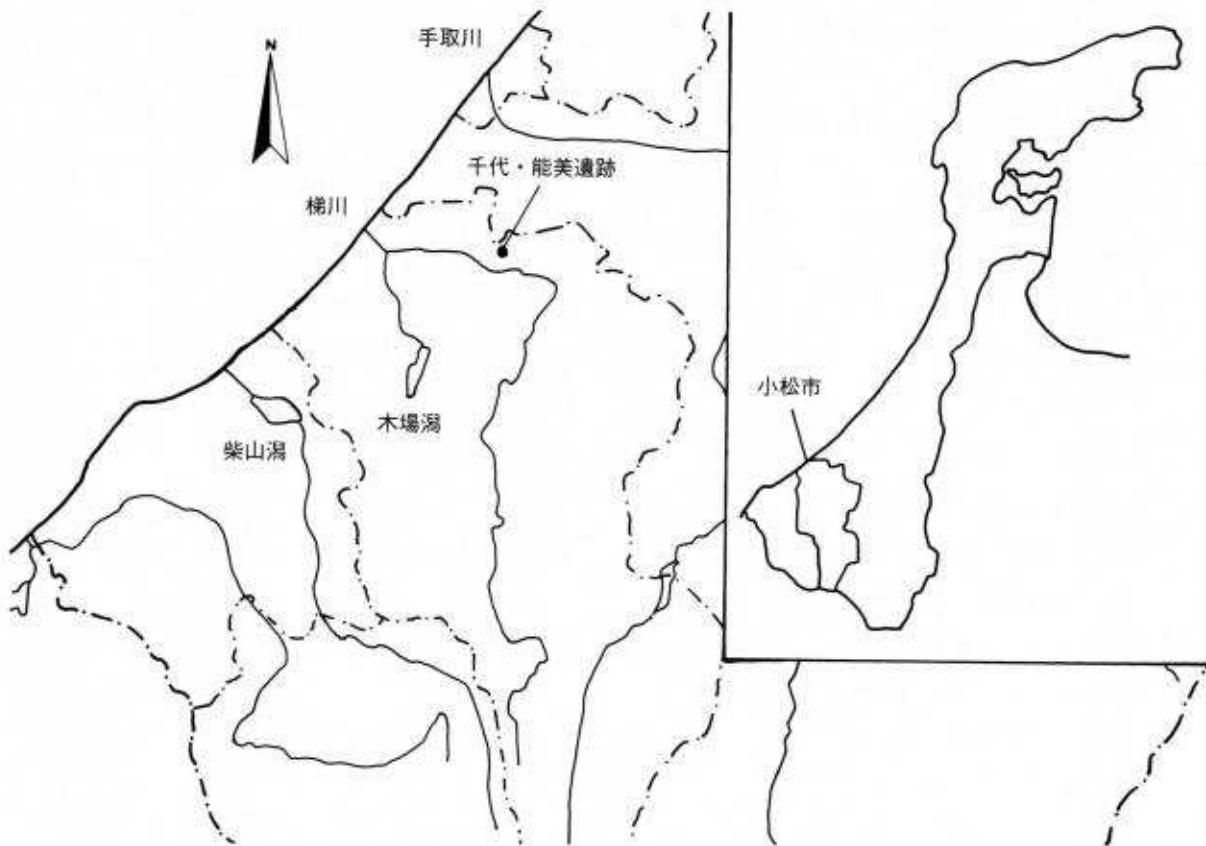
千代・能美遺跡は、石川県南加賀地方の小松市にあり、小松市の市街地から東へ約2.5km離れた小松市能美町地内に所在する。

小松市は、北西側で日本海に面し、南東部では白山連峰に連なる能美山地と能美・江沼丘陵地に囲まれ、山地・丘陵地が市内のほぼ3分の2を占める。一方、市内の北西部には、加賀平野の一部をなす小松・江沼平野があり、この平野は、南加賀最大級の河川である梯川により形成された沖積平野と、加賀三湖（木場潟・今江潟・柴山潟）の周辺部から埋積してできた低湿地に概ね分けられる。そして、日本海に面したところには小松砂丘がある。

千代・能美遺跡は、こうした自然環境のなかでも、梯川中流域の北側、梯川から約1.5km離れた沖積平野に位置し、梯川と支流の鍋谷川によって形成された自然堤防状の微高地上に立地する。

梯川は、南加賀最大級の一級河川であり、全長約42km、流域面積約271km<sup>2</sup>を測る。大日山のふもとの鈴ヶ丘に源を発し、山地・丘陵地の中を小規模な河岸段丘を形成しながら北流。その後、中流域に至ると、西へ大きく蛇行するとともに流速を急激に落とし、沖積平野を形成しながら下流に至る。

梯川中流域一帯に広がる沖積平野は、水田耕作の適地として豊かな穀倉地を形成しているが、梯川の緩流と蛇行による氾濫の記録も多く、一帯の旧地形は、氾濫による土砂堆積、浸食、自然堤防の形成等の繰り返しによって複雑な様相を呈していると考えられている。当遺跡は、こうした梯川中流域に広がる沖積平野の中に位置している。



第1図 千代・能美遺跡の位置

## 第2節 遺跡周辺の歴史的環境

千代・能美遺跡が立地している梯川中流域の沖積平野は、石川県内でも特に遺跡が集中している地域である。これは、農耕適地であることと、弛緩な流れとなった梯川の水運によるものと考えられている。

当遺跡周辺の主な縄文時代の遺跡には、一針遺跡、横地遺跡、軽海西芳寺遺跡、千木野遺跡がある。一針遺跡からは磨製石斧、横地遺跡からは後期の縄文土器が出土したことであるが、詳細は不明である。軽海西芳寺遺跡では、昭和59年の石川県立埋蔵文化財センターの調査により、山裾部の斜面で

第1表 千代・能美遺跡周辺の遺跡地名表

No.	遺跡名／種別／時代	No.	遺跡名／種別／時代
1	中ノ江遺跡／散布地／古墳	26	佐々木アサバタケ遺跡／集落跡／弥生後期～中世
2	長田遺跡／散布地／弥生・古墳	27	佐々木ノテウラ遺跡／集落跡／弥生後期～中世
3	高堂遺跡／集落跡／弥生～中世	28	古府シマ遺跡／散布地／平安・中世
4	大長野A遺跡／集落跡／弥生～中世	29	南野台遺跡／散布地／縄文・古墳
5	千代デジロA遺跡／集落跡／弥生・古墳・中世	30	古府横穴／横穴墓／
6	千代デジロB遺跡／集落跡／弥生・古墳・平安	31	十九堂山中世墓群／墳墓／中世
7	千代デジロC遺跡／集落跡／古墳・平安	32	十九堂山遺跡／寺院跡／平安・中世
8	下出地割遺跡／散布地／	33	小野遺跡／散布地／平安
9	古府しのまち遺跡／集落跡／古墳～平安	34	小野スギノキ遺跡／散布地／平安・中世
10	千代オオキダ遺跡／集落跡／弥生後期～中世	35	埴田ミヤケノ遺跡／散布地／
11	千代・能美遺跡／集落跡／弥生後期～中世	36	埴田ウラムキ遺跡／散布地／平安・中世
12	一針B遺跡／集落跡／弥生～中世	37	荒木田遺跡／集落跡／弥生後期～中世
13	一針C遺跡／集落跡／弥生～中世	38	軽海西芳寺遺跡／集落跡／縄文中期・弥生末～中世
14	一針遺跡／散布地／縄文	39	西芳寺遺跡／寺院跡／平安・中世
15	白江梯川遺跡／集落跡／弥生～中世	40	軽海廃寺／寺院跡／平安
16	平面梯川遺跡／集落跡／弥生後期	41	軽海中世墓群／墳墓／中世
17	漆町遺跡／集落跡／弥生後期～中世	42	龜山玉造遺跡／集落跡／古墳
18	打越遺跡／集落跡／弥生～中世	43	軽海遺跡／散布地／弥生～近世
19	佐々木遺跡／集落跡／奈良・平安	44	大谷口遺跡／散布地／弥生
20	千代本村遺跡／散布地／古墳	45	八幡遺跡／集落跡・古墳・窯跡／縄文～近世
21	横地遺跡／散布地／縄文	46	吉竹遺跡／集落跡・散布地／弥生後期～中世
22	千代城跡／城跡／室町	47	千木野遺跡／集落跡・墓／縄文・古墳
23	千代小野町遺跡／散布地／古墳	48	浄水寺跡／寺院跡／平安・中世
24	古府遺跡／集落跡／平安	49	昌隆寺跡／寺院跡／
25	古府フドンド遺跡／散布地／平安		



第2図 千代・能美遺跡と周辺の遺跡 ( $S = 1 / 25,000$ )

縄文時代中期末の炉址、土壙群が検出された。また、千木野遺跡では、平成5年に小松市教育委員会によって調査が行なわれ、落とし穴4基が確認されている。

弥生時代前・中期においては、当遺跡周辺での遺跡の立地は希薄であるが、中期の遺跡として、当遺跡の南西約3km、現在のJR小松駅の東側に所在する八日市地方遺跡が挙げられる。この遺跡は、以前から弥生時代中期の「小松式土器」の標識遺跡として知られていたが、平成5年度から12年度にかけて小松市教育委員会が調査を行ない、井戸跡、住居跡、方形周溝墓、河川跡等が確認され、さらに多量かつ多種多様な遺物が出土し、当時の北陸における中核的な集落跡として知られるようになった。

弥生時代後期になると、白江梯川遺跡、平面梯川遺跡、漆町遺跡など、梯川中流域の沖積平野を中心に多数の集落遺跡が出現。古墳時代前期には他地域からの土器群の流入とともに飛躍的な発展を遂げ、梯川中流域の沖積平野における集落遺跡は、4世紀前半から6世紀前半にかけて隆盛を誇る。

古墳時代を象徴する古墳について見ると、当遺跡の南方約1.8kmに八幡古墳群（八幡遺跡）があり、平成2年度から7年度にかけて、石川県埋蔵文化財保存協会により、後期古墳7基が発掘調査されている。また、当遺跡の東方約2.5kmに河田山古墳群があり、前方後方墳の河田山1号墳を代表として前期から中期初めの古墳群が主体をなしている。7世紀後半に位置付けられている河田山12号墳は全国的に例のないアーチ型石室をもつもので、これは朝鮮半島南部の王墓に類似が見られるものである。このほか、古墳ではないが、当遺跡の南方約3kmの千木野遺跡では、古墳時代前期の方形周溝墓が確認されている。

4世紀から6世紀前半にかけて隆盛を誇っていた梯川中流域の沖積平野における集落遺跡は、6世紀後半に入ると、衰退傾向となり、漆町遺跡の金屋サンバンワリ地区、金屋ヤシキダ地区と佐々木ノテウラ地区でのみ遺構が確認される程度となる。

その後、7・8世紀においても、梯川中流域の沖積平野ではあまり目立った動きは見られないようであったが、8世紀後半、加賀地方では少数ながら初期荘園の開発が興る。当遺跡の周辺では西大寺本堀荘が挙げられる。宝亀11年（780年）に実在が確認され、当遺跡の南西約4kmに所在する小松市本折町付近が荘域と推定されている。また、当遺跡の南東約12kmに所在する小松市佐々木町周辺と、当遺跡西方の古府台地から北方に広がる平地には条里制の跡が確認されている。この条里制の施行時期は不明であるが、8世紀後半以降に施行されていたものと考えられている。このほか、当遺跡の南方約1kmのところに佐々木遺跡が立地しているが、この遺跡では、平成9・10年度の小松市教育委員会の発掘調査により、柵と溝で囲まれた区画のなかに整然と並ぶ8世紀中頃の掘立柱建物群が確認され、さらに、「野身郷」「財部寺」と記された墨書き土器が出土した。この遺跡については、公的な施設または有力者の居館等、一般的な集落とは異なる性格をもつ施設ではないかと考えられている。

9世紀に入ると、823年（弘仁14年）、それまで越前国に属していた江沼郡・加賀郡が分離し、加賀国が立国。江沼郡から能美郡を、加賀郡から石川郡を分出して加賀国は4郡となり、当遺跡が所在する地は能美郡に属した。加賀国府の所在地については諸説あるが、当遺跡の西方の古府台地周辺が有力視されている。また、古府台地上に立地する十九堂山遺跡は、国分寺跡である可能性が考えられているが、積極的な資料に乏しく確証はない。

9世紀後半～10世紀には、梯川中流域の沖積平野における集落遺跡は再び活発化し始め、古府しのまち遺跡、古府遺跡、佐々木ノテウラ遺跡、漆町遺跡等が活発化していた遺跡として挙げられる。また、当遺跡の南方約3kmに浄水寺跡が立地しており、この寺院跡は10世紀前半に創建され、15世紀後半まで営続していたとされている。昭和59年度に石川県立埋蔵文化財センターにより調査され、10世紀前半から11世紀前半の墨書き土器が多量に出土している。

中世に至っても、梯川中流域の沖積平野における集落の活発さは見られ、佐々木アサバタケ遺跡、佐々木ノテウラ遺跡、漆町遺跡、白江梯川遺跡などが中世集落遺跡として挙げられる。当遺跡の南東約1kmに佐々木アサバタケ遺跡、佐々木ノテウラ遺跡が立地しているが、これらの遺跡は昭和59年に石川県立埋蔵文化財センターにより調査されており、佐々木アサバタケ遺跡では、掘立柱建物跡や多数の井戸が検出され、13世紀～15世紀頃の加賀地方を代表する中世集落遺跡とされている。佐々木ノテウラ遺跡では、掘立柱建物跡、井戸のほか、建物群を囲む区画溝が検出され、12世紀頃に位置付けられている。また、当遺跡の西方約1.5kmに白江梯川遺跡が立地しているが、この遺跡は、確認されただけでも約50,000m<sup>2</sup>に達する大規模な集落遺跡であったと見られ、遺跡の所在する小松市白江町付近で、水運に用いられた梯川と北国街道が交差していたという地理的環境が、この集落が発展する要因の1つであったと考えられている。なお、白江梯川遺跡は12～16世紀の時期幅をもつが、盛期は13～15世紀頃と見られている。

#### 引用参考文献

- 吉岡康暢 1959 「加賀における条里制をめぐる問題」『北陸史学』第8号  
浅香年木他編 1981 『角川日本地名大辞典17 石川県』 角川書店  
吉岡康暢 1985 「莊園遺跡 加賀・能登の初期莊園と横江莊遺跡」「加能資料研究」創刊号  
石川県立埋蔵文化財センター 1986 『漆町遺跡Ⅰ』  
石川県立埋蔵文化財センター 1986 『佐々木ノテウラ遺跡』  
小松市教育委員会 1986 『河田山古墳群発掘調査現地説明資料』  
小松市教育委員会 1987 『河田山古墳群発掘調査現地説明資料Ⅱ』  
北陸古瓦研究会 1987 『北陸の古代寺院』  
石川県立埋蔵文化財センター 1988 『佐々木アサバタケ遺跡Ⅰ』  
石川県立埋蔵文化財センター 1988 『白江梯川遺跡Ⅰ』  
石川県立埋蔵文化財センター 1989 『浄水寺墨書き資料集』  
石川県教育委員会 1992 『石川県遺跡地図』  
浅香年木 1993 「加賀国」「講座日本莊園史」6 吉川弘文館  
石川県立埋蔵文化財センター 1994 「軽海西芳寺遺跡」  
小松市教育委員会 1994・1998・1999 「小松市埋蔵文化財調査だより」第4号・第8号・第9号  
(社)石川県埋蔵文化財保存協会 1998 「八幡遺跡Ⅰ」  
林 大智 2001 「発掘調査略報 千代・能美遺跡」「石川県埋蔵文化財情報」第6号 (財)石川県埋蔵文化財センター

## 第2章 調査の経緯と発掘調査の経過

### 第1節 調査に至るまでの経緯

平成12年8月9日、小松市道路課（以下「道路課」）から、小松市教育委員会埋蔵文化財調査室（以下「調査室」）に、市道能美小杉線改良工事に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出された。

その当時、対象地の隣接地で、（財）石川県埋蔵文化財センターが、一般国道8号線小松バイパス改築工事に伴い、千代・能美遺跡の発掘調査を実施しており、バイパス改築工事に伴う分布調査の結果から、対象地の一部が千代・能美遺跡内にあることは確実であった。そこで、調査室は対象地内の状況確認のため試掘調査が必要と判断。平成12年10月16・17日、対象地2,600m<sup>2</sup>において試掘調査を実施した。その結果、対象地の北側約1,400m<sup>2</sup>が千代・能美遺跡内にあることを確認した。

平成12年10月24日、調査室は道路課に対し、試掘調査の結果を報告するとともに、対象地の北側約1,400m<sup>2</sup>における埋蔵文化財に対する発掘調査等の保護措置の必要を伝える。

平成13年8月22日、道路課は調査室に埋蔵文化財発掘調査を依頼。同月31日、調査室は道路課に調査実施の旨を回答。同年10月2日、調査室は発掘調査に着手した。

### 第2節 発掘調査の経過

**平成13年10月2日** 発掘調査着手。調査区域南側から重機による表土除去を開始（表土除去は10月12日完了）。調査区域南端から北へと調査を進めていく。

**10月6日** 調査区域東側壁面の土層断面図作成開始（以後、隨時作成）。

**10月15日** ミゾ1～5を検出。ミゾ1～3掘削開始（10月16日完掘）。全体平面図作成開始（以後、隨時作成）。

**10月16日** ミゾ4・5掘削開始。ミゾ5より多量の木製品出土。（11月1日完掘）

**10月23日** 旧河川掘削開始（旧河川（古）は10月26日、旧河川（新）は11月15日完掘）。

**11月8日～13日** 調査区域南側半分完了により、南側半分を重機によって埋め戻す（調査区域壁面の崩壊が著しく、埋め戻さないと、隣接する水田に悪影響を及ぼすため）。

**11月12日** 大溝掘削開始。

**11月13日** ミゾ6・7・8および平地式建物跡を検出。

**11月15日** 大溝より、鉄製の鍬・鋤先、柄付の鍬（木製品）が出土。

**11月16日** 大溝遺物出土状況図作成開始（以後、掘削と遺物出土状況図作成を繰り返して、大溝の調査を続ける）。ミゾ6・7・8掘削開始（11月19日完掘）。

**11月21日** 平地式建物跡および掘立柱建物跡のピット掘削（11月22日完掘）。

**11月22日** ミゾ9・10検出。

**11月29日** ミゾ10掘削（12月3日完掘）。

**12月7日** ミゾ9掘削・完掘。

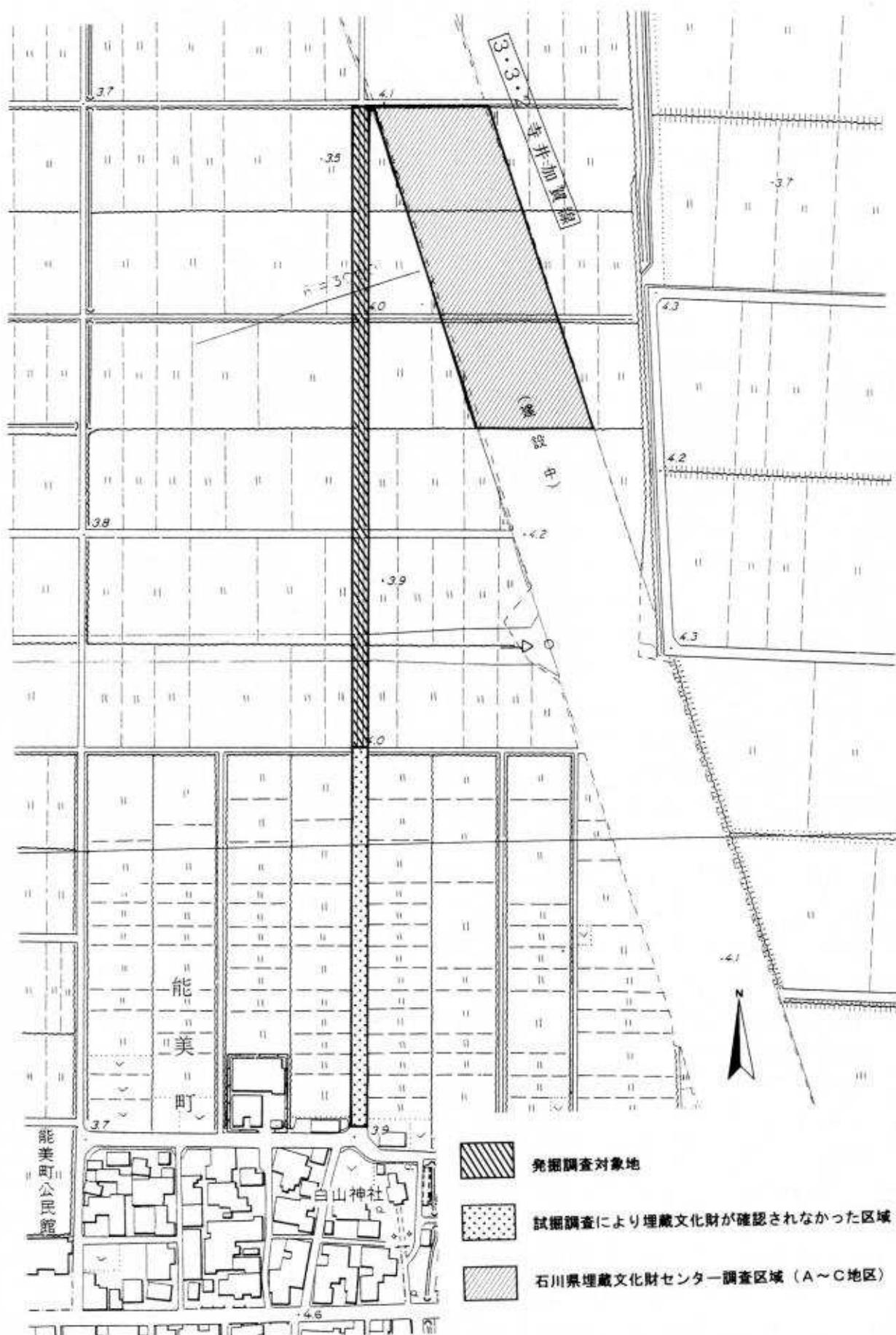
**12月20日** 大溝より環頭柄（木製品）・剣形木製品が出土。

**12月18日** 大溝の出土木製品の取り上げを終え、大溝完掘。

**12月19日・20日・26日** 調査区域内の一部器材を撤収。以後、調査区域埋め戻しまで作業中断。

**平成14年1月17日～22日** 調査区域北側半分を重機により埋め戻す。

**1月28日・29日** 調査区域内にあるすべての器材を撤収。現地における発掘調査作業完了。



第3図 調査対象地等の位置図 (S = 1 / 2,500)

# 第3章 遺跡の概要と発掘調査の概要

## 第1節 遺跡の概要

千代・能美遺跡は、南加賀最大級の河川である梯川の中流域北側、梯川より約1.5km離れた沖積平野に位置し、梯川と支流の鍋谷川とによって形成された自然堤防状の微高地上に立地している。

当遺跡は、奈良時代～中世の遺跡（散布地）として以前から知られていたが、今回的小松市教育委員会による調査、および（財）石川県埋蔵文化財センター（以下「石川県埋文センター」）が今回の調査地の隣接地で平成12・13年度に実施した9,000m<sup>2</sup>の調査により、主として弥生時代後期～古墳時代前期の集落遺跡であることが確認された。今回的小松市教育委員会による調査では、古代・中世の遺物も出土したが、土器片数点、土錘1点とごくわずかで、その時期に位置付けられる可能性のある遺構は、今回の調査区域の北端にあるミゾ10だけである（土錘1点のみによる判断である）。出土遺物のほとんどは弥生時代後期～古墳時代前期のもので、とくに古墳時代前期のものが多かった。

今回的小松市教育委員会の調査は、幅約5m、長さ約280mという、いわばトレンチ（溝）状の調査であり、遺跡を面として把握することができず、今回の調査のみで、当遺跡の概要を述べるには限界がある。今回の調査地の隣接地で行なわれた石川県埋文センターの調査は、9,000m<sup>2</sup>という大きな面積で、面として調査を行なっており、当遺跡の概要を知るには、非常に大きな意味を持った調査である。そこで、石川県埋文センターが調査の大半を終えた段階で行なった現地説明会の資料、さらに平成13・14年に発行された『石川県埋蔵文化財情報』第6号・第7号に、その調査成果が記されてあるので、その内容をここで簡単に紹介しておきたい。

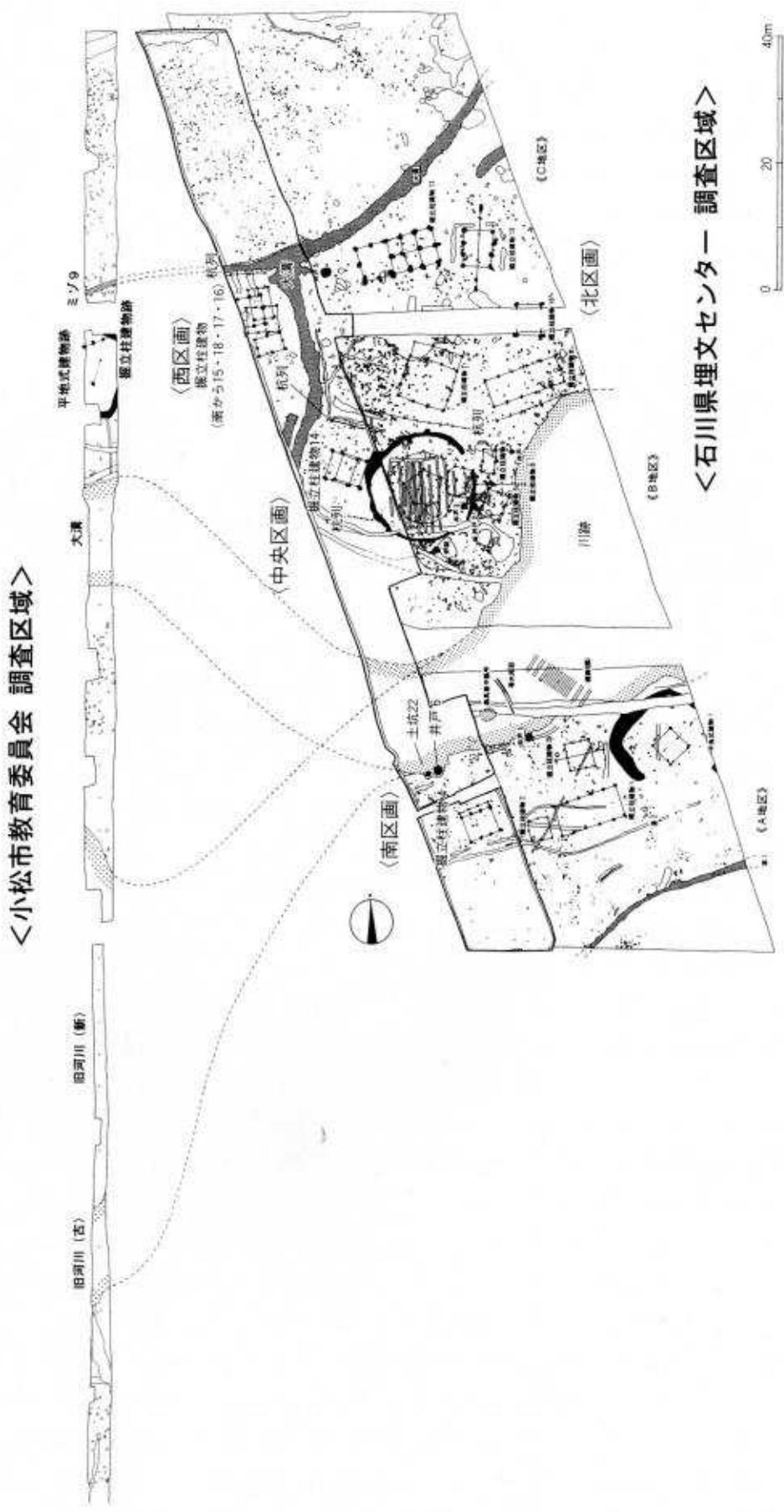
石川県埋文センターの調査は調査区域をA～Dの4地区に分けて行なわれたが、そのうちのA～C地区において古墳時代前期（3世紀後半～4世紀前半）頃の首長居館と考えられる施設群が確認され、平地式建物跡2棟（1棟は弥生時代終末期）、掘立柱建物跡18棟以上、井戸6基、土坑2基、炉跡、橋脚状遺構、導水施設などの施設が検出された。居館を構成する施設群は北東から南西方向に流れる川跡の両側に広がっており、居館の内部は川跡や杭列によって4つの区画（南区画・中央区画・北区画・西区画）に区分されている。そして、居館域の南・北端では、周りを取り囲んでいたと考えられる溝が検出された。

南区画では、平地式建物跡1棟、掘立柱建物跡4棟、井戸2基、土坑2基、溝5条などが検出されている。導水施設の近くにある井戸と川跡とが接する箇所には断面V字形の切り込みがあり、この切り込みは、井戸から溢れ出る净水を、川跡にある導水施設に流すために設けられたものと考えられており、净水を利用した祭祀が行なわれていたと推測されている。また、導水施設の周囲からは、剣形・舟形木製品、木製高壙などの祭祀的色彩の強い遺物が多く出土した。以上のことから、南区画は祭祀的な要素の強い区画と推定されている。

中央区画では、掘立柱建物跡5棟、井戸3基、炉跡1基、杭列、大溝、溝のほか、先行する時期（弥生時代終末期）の遺構として平地式建物跡1棟が検出されている。炉跡については、わずかながら微細な鉄片が覆土から確認されており、鍛冶炉である可能性が高いとされている。この鍛冶炉の存在や、川跡から出土した農具未製品により判明した居館内における木製品製作の存在から、中央区画は生産の機能を担っていた区画であったと考えられている。

北区画では、掘立柱建物跡5棟以上、井戸1基、溝2条が検出されている。他の区画と比較して卓越した規模の掘立柱建物跡や井戸をもつことなどから、北区画は首長の居住空間と想定できるとされてい

第4図 石川県埋文センターと小松市教育委員会の調査区域における遺構概略図 ( $S = 1 / 1,000$ ) (林 2002掲載図に加筆)



る。

西区画では、掘立柱建物跡4棟などが検出されており、掘立柱建物跡はいずれも比較的小規模で、位置を若干ずらしながら重複して設営されているとのことである。また、西区画北側にある大溝の両脇には、柵列と考えられる杭列が確認されている。

以上の南・中央・北・西の各区画の調査成果により、「千代・能美遺跡は「首長の居住空間」の周辺に「生産」、「祭祀」という各種機能を担う区画が付随し、それらが川跡、柵列、大溝などによって明瞭に区分された首長居館」（林2001）であったと考えられている。

今回的小松市教育委員会が調査した区域には、その首長居館の一部が存在しており、今回の調査で検出された大溝、旧河川（古）、旧河川（新）は、石川県埋文センター調査区域の川跡に、ミゾ9は、居館域北端を流れる大溝につながるものと想定される。

## 第2節 発掘調査の概要

今回の発掘調査は、幅約5m、長さ約280mのほぼ南北方向に伸びるトレンチ（溝）状の調査区域で実施しており、調査区域の南端から調査を開始し、北へ向かって進めていった。

まず、重機によって表土除去を実施。おおむね、調査区域東側壁面の土層断面図（第8～12図）にある4層土の直上まで重機によって掘削した。

その後、北端から5m単位にグリッドを設定。グリッド番号は北から順に4～59のグリッド番号を付けた。

グリッド設定後、人力により遺構検出作業を隨時実施。遺構検出作業の際に出土した遺物は、グリッドごとに取り上げた。また、検出された遺構の遺構名については、遺構の種類ごとに南から順に番号を付けた（結果的には、平地式建物跡、掘立柱建物跡、ミゾ1～6、大溝、旧河川と遺構名を付け、旧河川については、調査区域東側壁面の土層断面によって2本の旧河川の新旧関係が分かったので、旧河川（古）、旧河川（新）と遺構名を付けた）。

遺構検出後、遺構検出状況写真を撮影。撮影後、平地式建物跡の周溝、ミゾ3・5～8・10、旧河川（古）については、それらの向きに概ね直交するようにして、土層断面観察用のセクションベルト（アゼ）を設定して掘り下げ、大溝と旧河川（新）については、調査区域東側壁面の土層断面図をそれら遺構の土層断面図の代わりとし、セクションベルトを設定せずに掘り下げた。なお、旧河川（古）の中央部については、調査区域の幅が約5mと狭く、深く掘削して完掘するのは非常に危険であったため、完掘を断念した。ミゾ1・2・4・9については、検出面から底までの深さが非常に浅く、土層断面図の作成ができなかつたため、覆土を観察するのみに留めて掘り下げた（ミゾ1・2・9については、調査区域東側壁面の土層断面図が、それら遺構の土層断面図の代わりとなった）。また、平地式建物跡の柱穴、掘立柱建物跡の柱穴（P1～3）については、半載後、土層断面図を作成して完掘した（掘立柱建物跡のP4については、調査区域西壁に設けた排水溝の中にあったため、土層断面図の作成ができなかつた）。その他のピットについては、ほとんどが浅いもので、遺物が出土したり、柱穴と判断されたりするものがなかつたため、半載後、土層断面の観察等は行なわずに完掘した。

遺構掘削時に出土した遺物は、出土した地点に極力残すようにして掘り下げ、出土状況写真を撮影した（セクションベルトを設定した遺構については、セクションベルト除去後に撮影した）。そして、ミゾ5と大溝の出土遺物については、グリッド設定の際に設けた杭を基準に1/20縮尺の遺物出土状況図を、平地式住居跡のP1出土遺物については、土層断面図作成の際に設けたポイントを基準に1/10縮尺の遺物出土状況図を作成した（その他の遺構については、出土遺物が少なかつたため、遺物出土状

況図を作成しなかった)。

土層断面図の作成、遺物出土状況写真の撮影、遺物出土状況図の作成および遺物の取り上げを終えたのち、遺構を完掘。完掘したのち、平板測量によって1/40縮尺の全体平面図を隨時作成した。また、調査区域東側壁面の土層断面図も隨時作成。さらに、平地式建物跡と掘立柱建物跡の柱穴については、完掘状態の断面図を作成した。

以上の作業をすべて終えて、現地における発掘調査を完了した。

#### 引用参考文献

- (財)石川県埋蔵文化財センター 2000 「小松市千代・能美遺跡 平成12年度現地説明会資料」  
林 大智 2001 「千代・能美遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第6号 (財)石川県埋蔵文化財センター  
林 大智 2002 「千代・能美遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第7号 (財)石川県埋蔵文化財センター

## 第4章 遺構と遺物

### 第1節 調査区域内における遺跡の概要

今回の調査では、前章第1節のところでも述べたとおり、(財)石川県埋蔵文化財センター(以下「石川県埋文センター」)の調査で確認された古墳時代前期頃の首長居館の一部を調査しており、平地式建物跡1棟、掘立柱建物跡1棟、溝10本、大溝1本、旧河川2本が確認された。

出土遺物については、土器が遺物ケース(55cm×40cm×14cmの規格のもの)で5箱分、木製品が水漬けケース(145cm×85cm×20cmの規格のもの)で4箱分、石製品数点があり、その他、土錘1点、鉄製品として鍔・鍔先が1点出土している。出土遺物の大半は大溝出土のもので、ミゾ5で比較的多量の木製品と定量の土器が出土し、その他の遺構では、ごく少量の遺物が出土する程度であった。

確認された遺構の時期については、時期決定の決め手となる遺物がないために時期を決められない遺構もあるが、概ね弥生時代後期から古墳時代前期頃の間に位置付けられるのではないかと思われる。(調査区域北端に位置するミゾ10については、出土した土錘1点から判断して、古代に位置付けられる可能性が考えられる。)

今回の調査区域の全体平面図を第5図～第7図に掲載しておいたが、北(第4グリッド)から順に調査区域内の大まかな状況を述べておきたい。

まず、調査区域北端(第4グリッド)のミゾ10では、土錘1点が出土しており、その形状から判断して、ミゾ10は古代に位置付けられる可能性が考えられる。第11・12グリッドに至るとミゾ9がある。このミゾ9は、石川県埋文センターの調査で確認された居館域北端を流れる大溝につながると想定されるものである。石川県埋文センターの調査では居館域北端を流れる大溝の両脇に杭列が見られたが、ミゾ9の周囲にピットがいくつか存在しており、明確に杭列として把握できなかったが、これらのピットは杭列になるのではないかと思われる。なお、ミゾ10からミゾ9の間(第5～第10グリッド)においては、浅くて遺物が出土しないピットだけが点在しており、とくに目立った状況はなかった。

第13～15グリッドでは平地式建物跡の一部と掘立柱建物跡の一部が重複して検出された。平地式建物跡の時期については、土器細片がごく少量出土したのみで、明確な時期を決められない。ただし、第8図の下から2段目にある調査区域東側壁面の土層断面図に見られるように、平地式建物跡の周溝の覆土(15層)が、当調査区域内における大溝などの覆土の上に堆積する4～4層土を切っており、平地式建物跡の時期は、今回の調査で確認された遺構の中でも比較的新しい時期に位置付けられる可能性が考えられる。また、平地式建物跡と掘立柱建物跡との時期的な前後関係については、明確な切り合い関係を確認できなかったが、掘立柱建物跡P1(平地式建物跡の周溝内に位置する柱穴)の覆土上に平地式建物跡の周溝の覆土が堆積しているのが確認されており(掘立柱建物跡P1の土層断面については第14図の土層断面図を参照)、掘立柱建物跡が平地式建物跡より古いと思われる。

第16・17グリッドにおいては、ミゾ6・7・8が検出された。これらミゾの時期的な前後関係については、ミゾ7が最も新しく、次いでミゾ8、そしてミゾ6が最も古い(ミゾ7については、出土した高壙脚部から判断して、田嶋明人氏の漆町編年11群期以降に位置付けられる。ミゾ6・8については、土器細片がごく少量出土しているのみで、時期不明である)。ミゾ8は、平地式住居跡の周溝から大溝の北側肩部のところへ南北方向にのびており、平地式住居跡の周溝内に溜まった水を大溝へ流すための排水施設的なものではないかとも考えられた。しかし、先述のとおり、平地式住居跡の周溝覆土が、大溝の覆土の上に堆積する層(4～4層)を切っており、平地式建物跡と大溝との同時並存が考えられ難

く、平地式住居跡の周溝内の水を大溝に流していたとは即断できない。ただし、ミゾ8が平地式住居跡と関連性をもっていたということは、大いに考えられるであろう。なお、ミゾ6が埋没した後に、ミゾ8が掘削されたということが、遺構検出時の状況から確認された。

第18～21グリッドに至ると、今回の調査における出土遺物の大半が出土した大溝が検出された。この大溝は、石川県埋文センター調査区域の川跡につながると想定される。また、第29～43グリッドでは、旧河川（新）、旧河川（古）が確認されており、これらについても、石川県埋文センター調査区域の川跡につながると想定される。旧河川（新）と旧河川（古）との間では、その名のとおり新旧関係が見られ、その切り合いについては、第10図の下から1段目にある調査区域東側壁面の土層断面図に見られるとおりである。25-1層と25-2層が旧河川（新）、26～29層が旧河川（古）の覆土で、25-1・25-2層が26・28層を切っているのであった。なお、旧河川（新）の南北両側の肩部は、非常になだらかに落ち込んでいく肩部で、明確な落ち込みは見られなかった。大溝と旧河川（新）との間（第22～第28グリッド）の状況については、浅くて遺物の出土しないピットのみが点在しているだけで、とくに目立った状況はなかった。

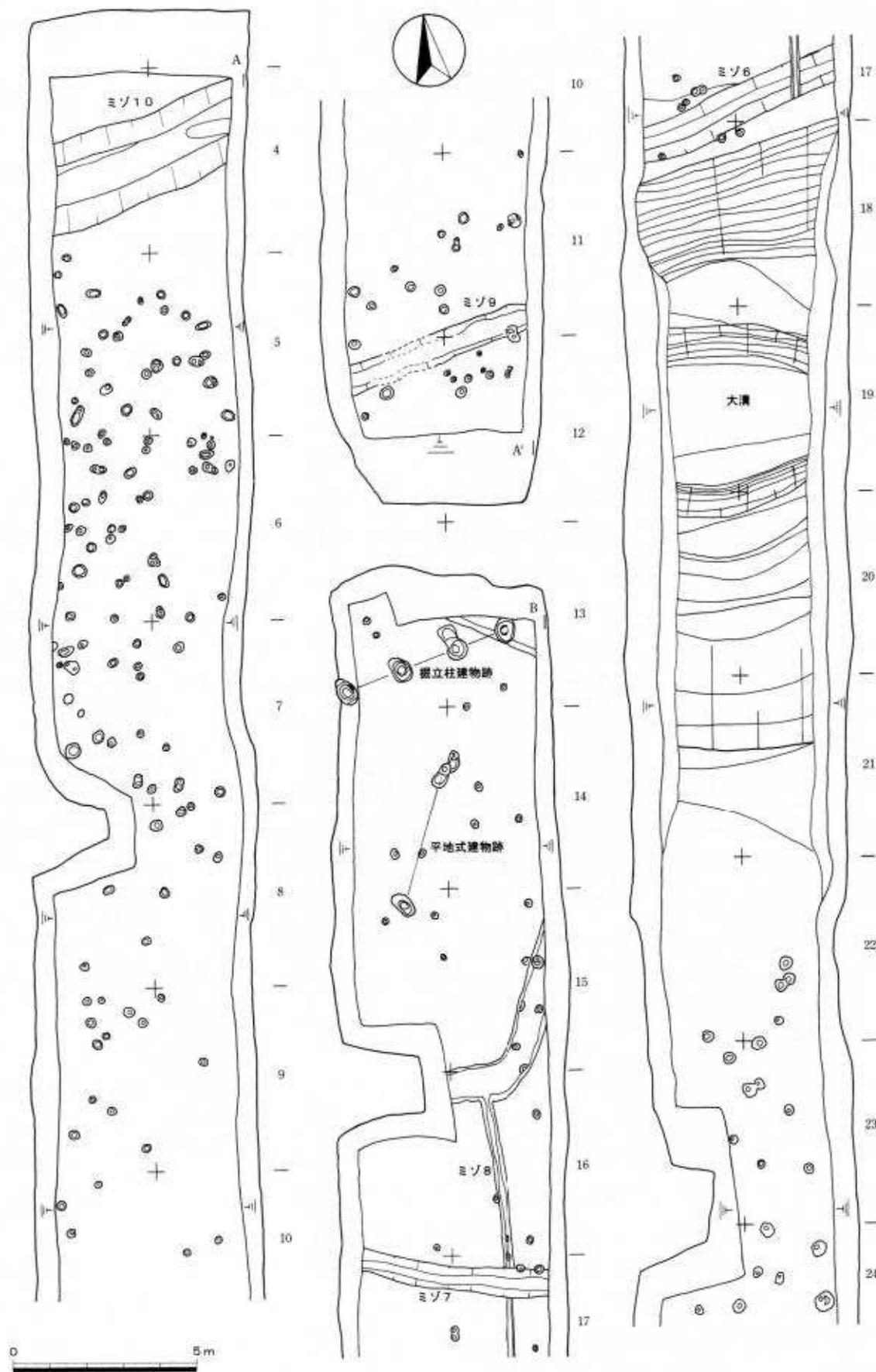
第44～46グリッドでは、ミゾ4・5が検出された。ミゾ4はミゾ5に切られ、ミゾ5のほうがミゾ4より新しい時期に位置付けられる。ミゾ5では、定量の土器とともに多量の木製品が出土しており、出土土器から判断して、ミゾ5は田嶋明人氏の漆町編年5・6群期頃に位置付けられるものと思われる。ミゾ4は、出土遺物がなく、時期不明である。

ミゾ4・5より南側については、第50グリッドでミゾ3、第53グリッドでミゾ1、第55グリッドでミゾ2が検出された。ミゾ2・3については、土器細片がごく少量出土しているのみで、時期不明。ミゾ1については、くの字口縁をもつ甕の口縁部片と山陰系壺の頸部片が出土しており、それらから判断して、概ね田嶋明人氏の漆町編年12群期頃に位置付けられると思われる。

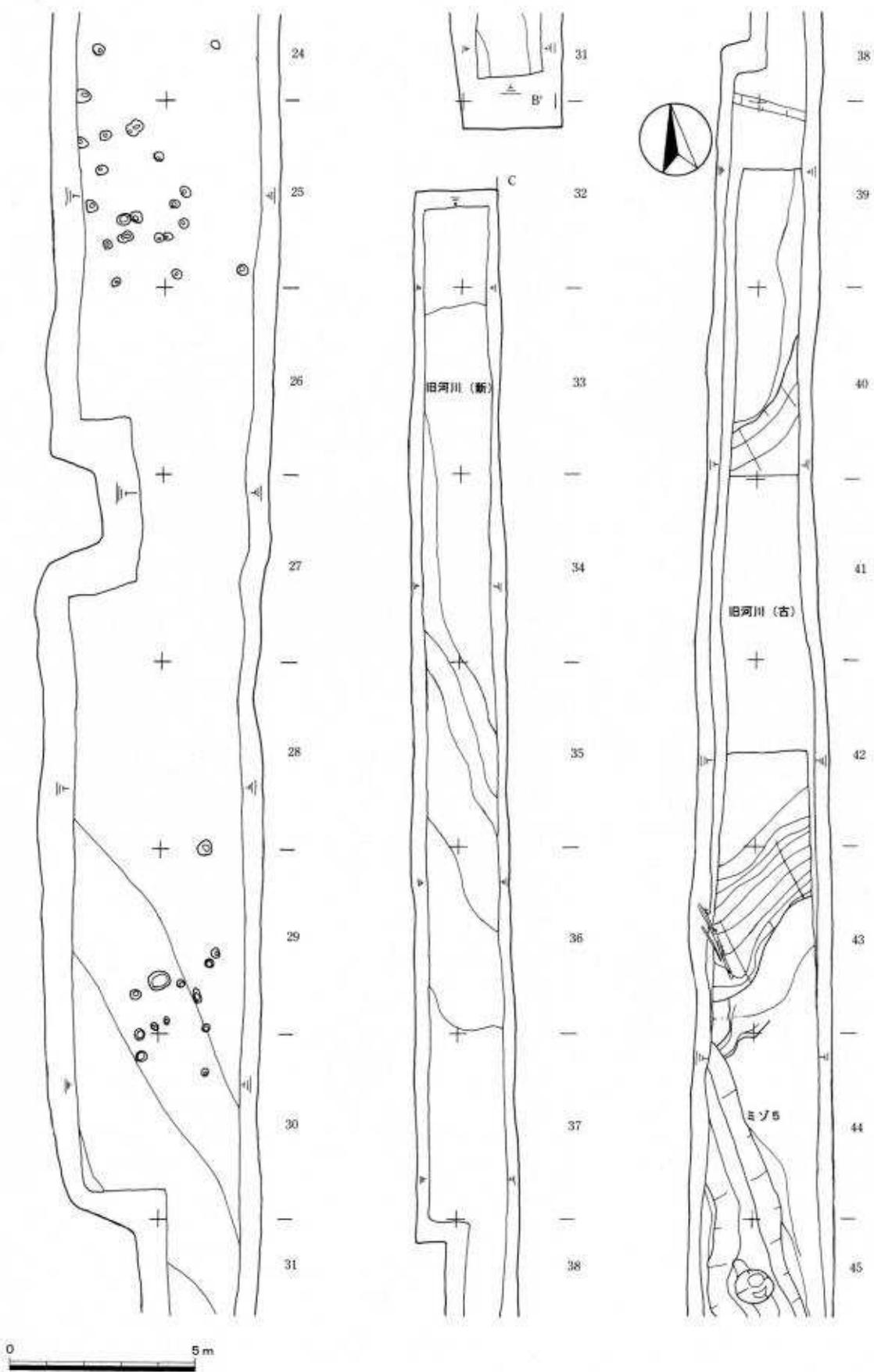
ミゾ1～3より南側（第56～59グリッド）では遺構といえるものは検出されず、当遺跡の範囲外へと続いている。石川県埋文センターの調査区域では、居館域の南端を囲むミゾが検出されているが、今回の調査区域の南端部は居館域の外であるといえ、居館域南端を囲むミゾのつながりが、今回の調査区域で検出されている可能性が考えられる。石川県埋文センターの調査区域から今回の調査区域の南端部に至る間に、居館域が切れている可能性もあり、一概に今回の調査区域内に居館域南端のミゾのつながりがあるとは断定できないが、もし、そのつながりがあるとすれば、ミゾ1～5のいずれかが該当すると考えられる。ミゾ1については、比較的新しい時期に位置付けられることから、居館域南端のミゾにつながるとは考えられないであろうが、その他のいずれにつながるかについては、筆者の力量不足もあり、ここでは保留としたい。

以上、今回の調査区域内における遺跡の状況を見てきたが、今回の調査では、居館域の北端を流れるミゾ（ミゾ9）、居館域を区画する川跡（大溝、旧河川（新）、旧河川（古））、いずれのミゾが該当するかは不明であるが、居館域南端を流れていた可能性のあるミゾが検出された。そして、居館域北端のミゾ9と居館域を区画する大溝との間、石川県埋文センターの調査で西区画とされていた箇所で、平地式建物跡と掘立柱建物跡が重複して1棟ずつ検出されたのであった。

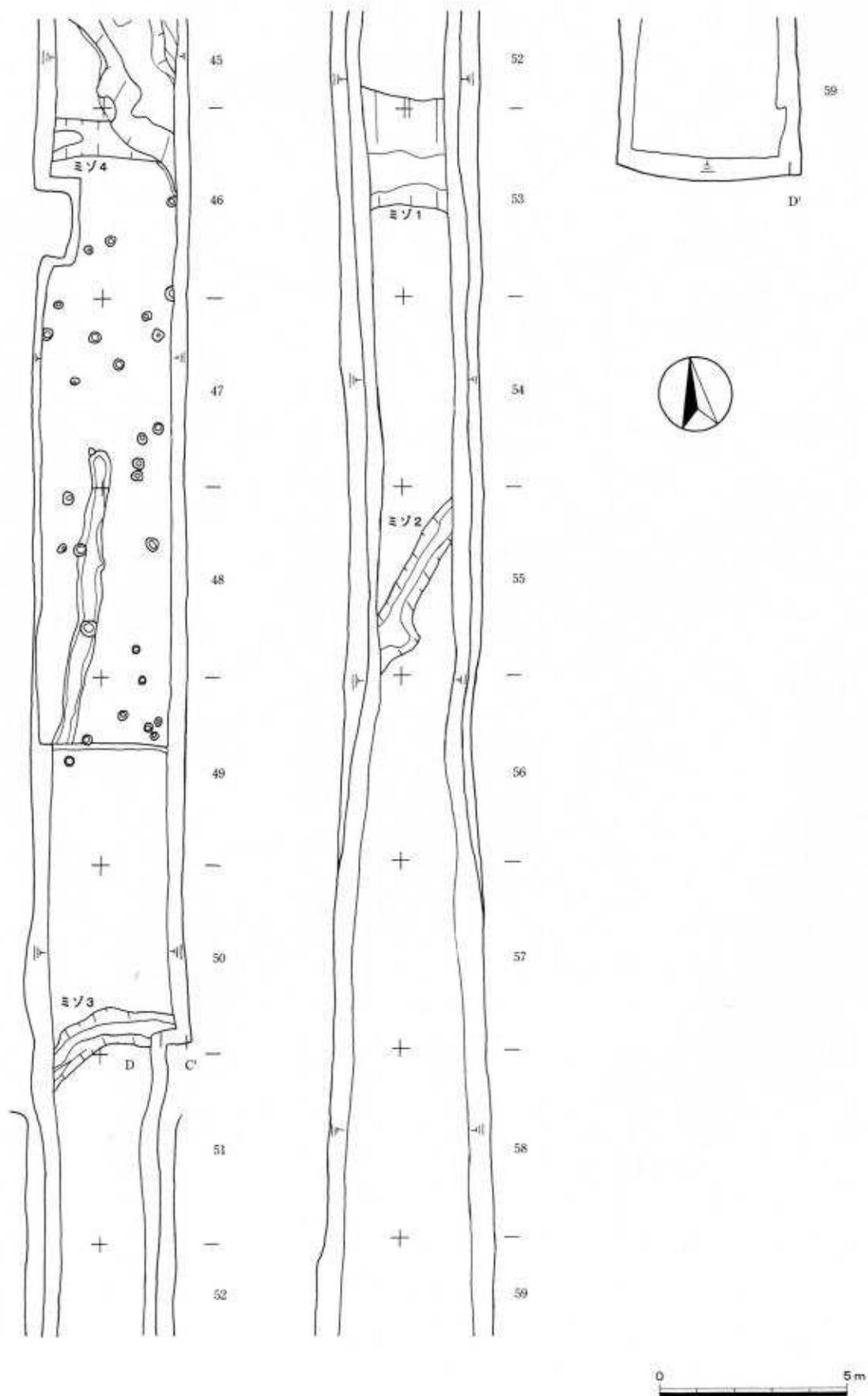
以下、平地式建物跡、掘立柱建物跡、ミゾ、大溝、旧河川と節を分け、遺構ごとに、遺構の状況および出土遺物等について見ていくこととする。なお、既に用いているのであるが、遺構や出土遺物の時期については、田嶋明人氏の漆町編年（田嶋1986）を用いて述べていくこととする。また、遺構外遺物については、ごく少量の土器片と木製品が出土しているのみで、特筆すべきものがなかったので、省略することとした。



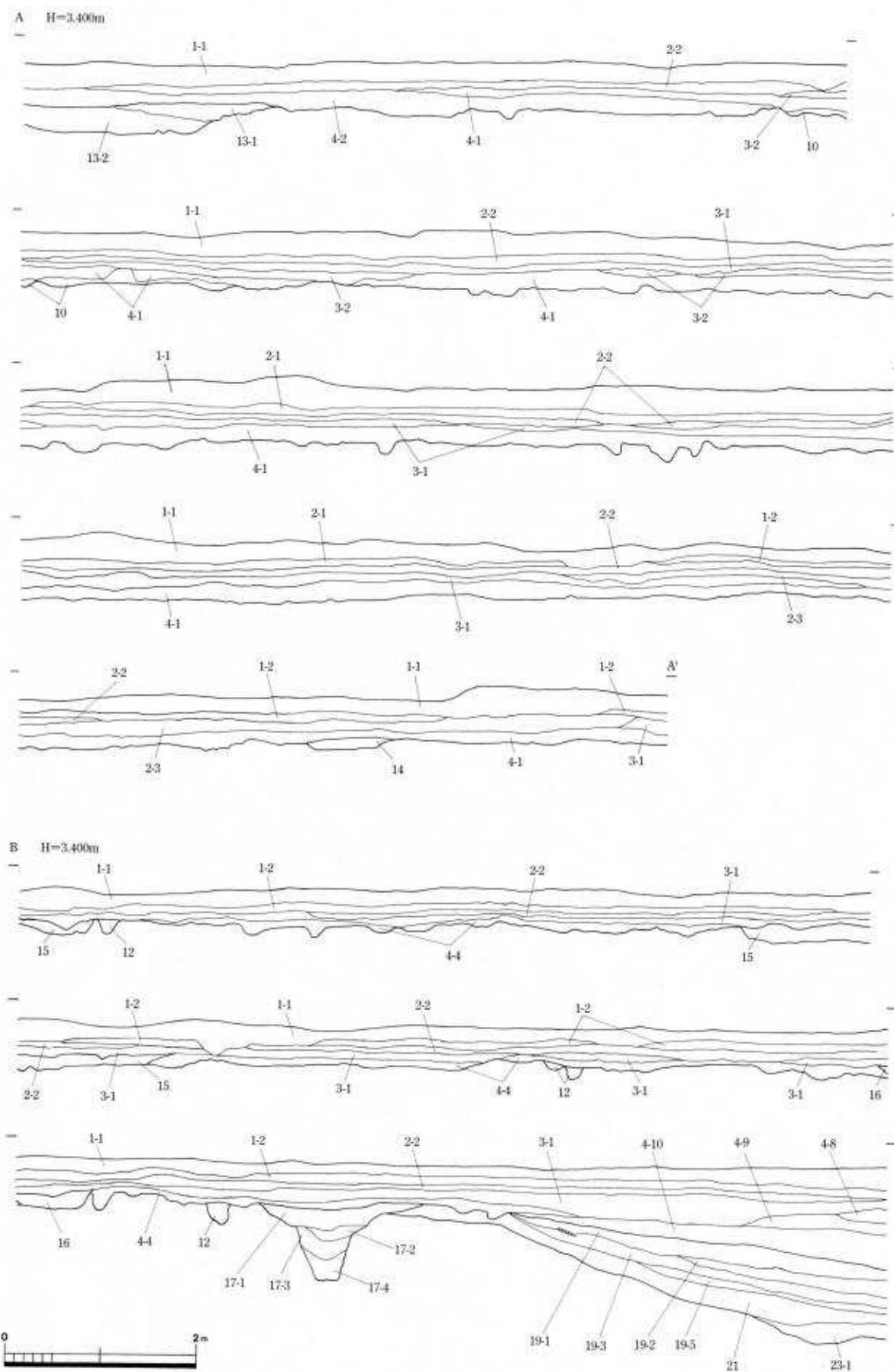
第5図 全体平面図（その1）(S=1/160)



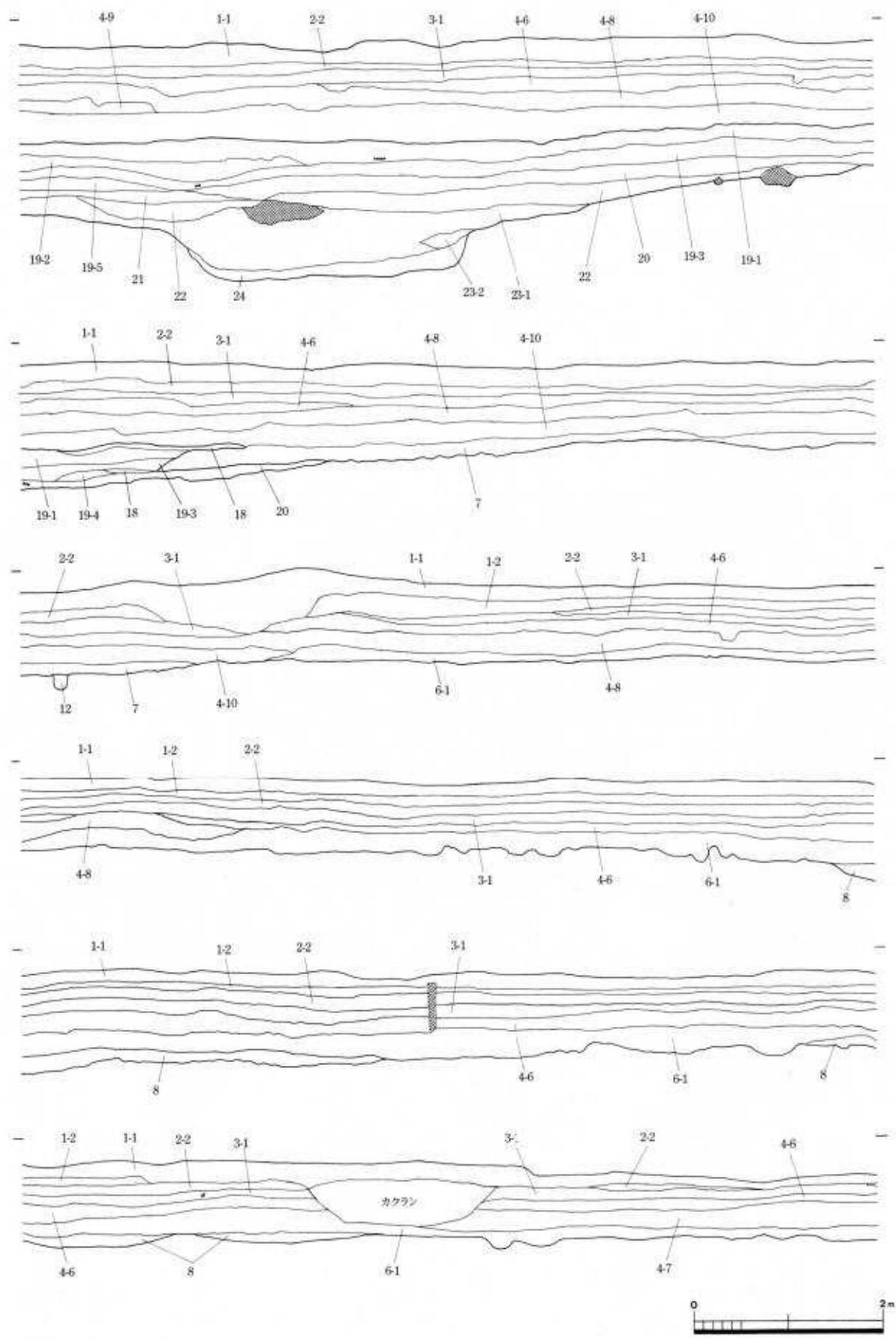
第6図 全体平面図（その2）(S = 1 / 160)



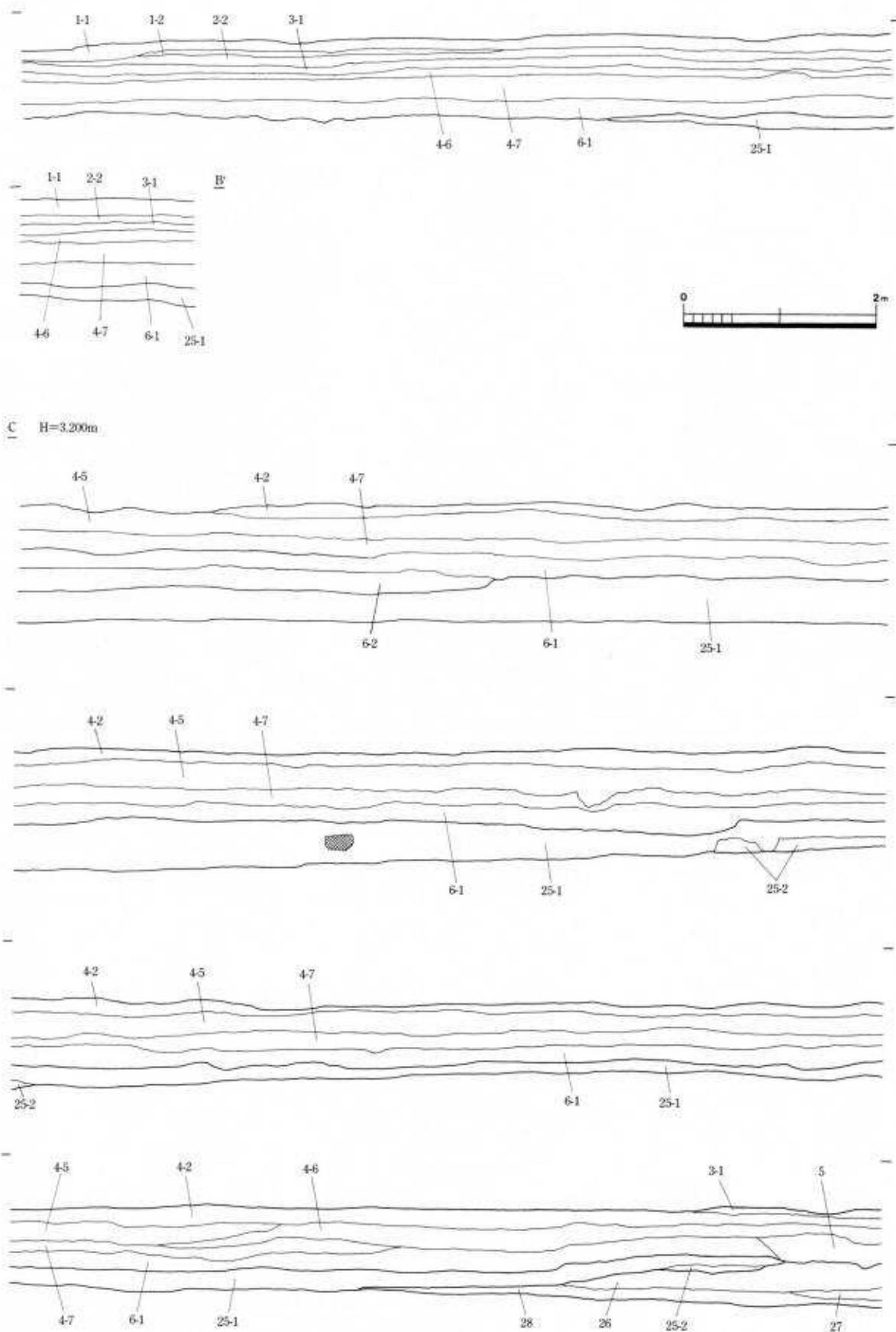
第7図 全体平面図（その3）(S = 1 / 160)



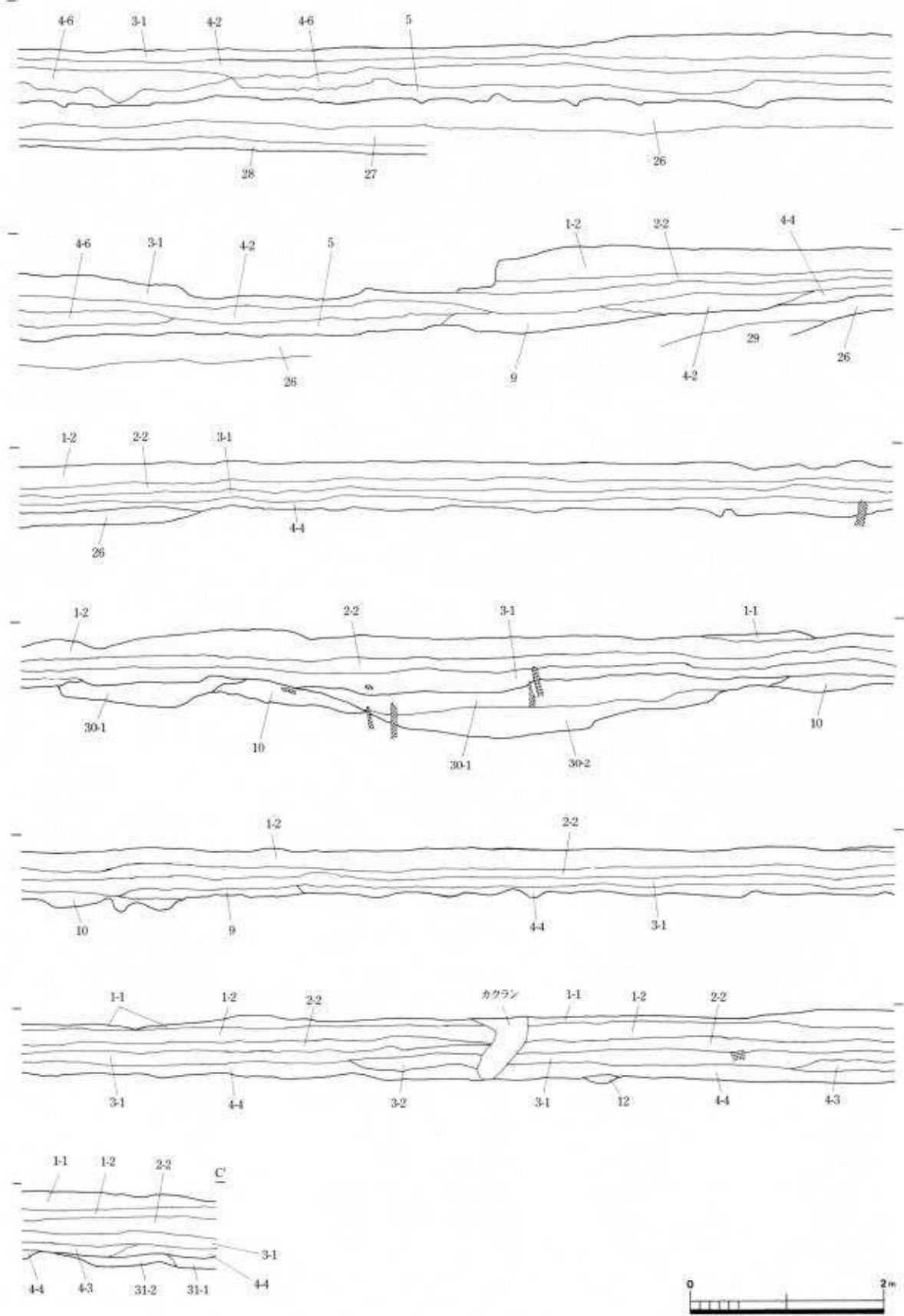
第8図 調査区域東側壁面 土層断面図（その1）（S=1/60）（スクリントンは木）



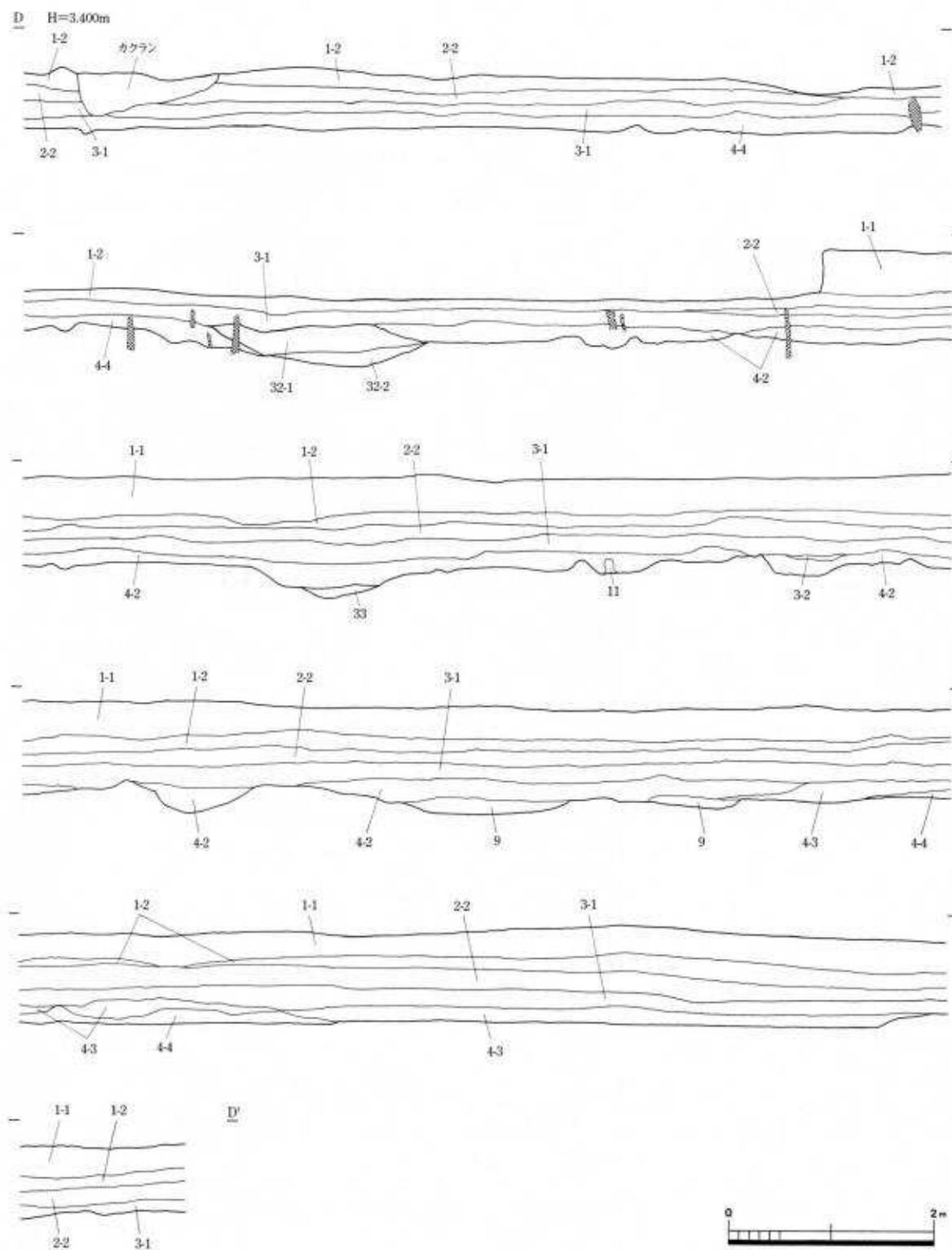
第9図 調査区域東側壁面 土層断面図（その2）（S=1/60）（スクリントンは木）



第10図 調査区域東側壁面 土層断面図（その3）（S=1/60）（スクリントンは木）



第11図 調査区域東側壁面 土層断面図（その4）（S=1/60）（スクリントンは木）



第12図 調査区域東側壁面 土層断面図（その5）(S=1/60) (スクリントンは木)

第2-1表 調査区域東側壁面 土層断面図 土層註（その1）

層名	土層註	備考
1-1	暗灰黄（2.5Y4/2）土。	耕作土
1-2	暗灰黄（2.5Y4/2）土。1-1層に比べ砂氣多い。	耕作土
2-1	褐灰（10YR4/1）シルト。	
2-2	褐灰（10YR4/1）埴土。2-1層より暗み強く、3層より灰色みが強い。粘性強く、やや砂氣混じる。	
2-3	褐灰（10YR4/1~3/1）埴土。2-2層に比べやや暗みあり。	
3-1	灰黄褐（10YR4/2）埴土。粘性強い。少量であるが、カーボンの混入あり。	
3-2	灰黄褐（10YR4/2）埴土。3-1層に比べ、やや灰色みが強い。	
4-1	褐灰（10YR4/1）埴土。	
4-2	褐灰（10YR4/1）埴土。白い石粒混入。木製品多量混入。	
4-3	褐灰（10YR4/1~4/2）埴土。カーボンの混入あり。4-1層に比べ灰色みが弱い。	
4-4	褐灰（10YR4/1）埴土。	
4-5	オリーブ褐（2.5Y4/3）埴土。腐植化している。しまり悪く植物纖維多い。2cm程度の地山（灰白色埴土）ブロック混入。	
4-6	暗オリーブ褐（2.5Y4/2~3/3）埴土をメインとし、地山（灰白色埴土）ブロックの混入見られる。腐植化している。	
4-7	オリーブ褐（2.5Y4/3）埴土。腐植化している。4-5層に比べ地山ブロックの混入なく、安定している。	
4-8	褐灰（10YR4/2）埴土。白い石粒混入。	
4-9	褐灰（10YR4/2）埴土。4-8層に比べやや明るめ。	
4-10	褐灰（10YR4/2）埴土。白い石粒混入。4-8層に比べ腐植の度合い強い。	
5	オリーブ黒（7.5Y3/1）シルトをメインとし、黒色土がスジ状に混入。	
6-1	灰オリーブ（2.5Y4/2~5Y4/2）埴土。腐植化している。砂の混入あり。	
6-2	灰オリーブ（2.5Y4/2~5Y4/2）埴土。腐植化している。6-1層に比べ砂の混入少ない。	
7	オリーブ黒（5Y3/1）埴土をメインとし、灰白色埴土の混入あり。	
8	黄灰（2.5Y4/1~2.5Y5/2）埴土。地山（灰白色埴土）の混入多い（4割程度）。	
9	暗灰黄（2.5Y4/2）埴土。腐植化している。白い石粒混入。木製品の混入あり。	
10	暗灰（N3/~N4/）埴土をメインとし、地山（灰白（N7/）埴土）ブロックの混入あり。12層（ピット覆土）と類似。	
11	灰白色粘土ブロック	

第2-2表 調査区域東側壁面 土層断面図 土層註（その2）

層名	土層註	備考
12	暗灰（N3／～N2／）埴土をメインとし、地山（灰白（N7／）埴土） ブロックの混入あり。カーボン多く混入	ピット覆土
13-1	褐灰（10YR4／1～2.5Y4／2）埴土。白い石粒混入。	ミゾ10覆土
13-2	褐灰（10YR4／1）埴土。5mm程度のカーボンが混入。13-1層 に比べやや砂気あり。	ミゾ10覆土
14	褐灰（10YR4／1）埴土。灰色みが強く、下底面に地山（灰白色埴土） の混入あり。	ミゾ9覆土
15	暗灰（N3／）埴土をメインとし、灰黄（2.5Y6／2）埴土が3割程度 混入。	平地式建物跡の周溝覆土
16	褐灰（10YR4／1）埴土。灰色みが強く、下底面に地山（灰白色埴土） の混入あり。	ミゾ7覆土
17-1	黄灰（2.5Y4／1）埴土。下底面に地山質の灰白色埴土の混入あり	ミゾ6覆土
17-2	黄灰（2.5Y4／1）埴土。17-1層に比べやや暗み増す。部分的に暗 灰（N2／～N3／）シルトの混入あり。	ミゾ6覆土
17-3	灰（2.5Y4／1～5Y4／1）埴土。17-2層に比べ暗灰（N2／～ N3／）シルトの混入が強くなる。	ミゾ6覆土
17-4	オリーブ黒（5Y4／1～3／1）埴土をメインとし、5～6cm大的地山 (灰白色埴土)ブロックが混入する。下底面に暗灰色埴土の溜まりあり。	ミゾ6覆土
18	灰白（5Y8／2）埴土。	大溝覆土
19-1	灰黄褐（10YR4／2）埴土。木製品多量に混入。	大溝覆土（B層）
19-2	黒褐（10YR3／2～3／1）埴土。腐植化している。小枝・葉の腐植 物多い。上部で土器多量出土。	大溝覆土（C層）
19-3	灰黄褐（10YR4／2～3／2）埴土。腐植化している。19-1層に比 べやや暗め。	大溝覆土（C層）
19-4	灰黄褐（10YR4／2）埴土。19-1層に比べやや明るめ。	大溝覆土（C層）
19-5	褐灰（10YR6／1～5／1）埴土。5mm程度のカーボン混入。	大溝覆土（C層）
20	灰黄褐（10YR4／2～3／2）埴土。腐植化している。19層に比べ るとやや暗め。	大溝覆土（D層）
21	灰黄褐（10YR4／2～3／2）埴土。腐植化している。小枝・葉など の腐植物多い。	大溝覆土（D層）
22	黒褐（10YR3／1）埴土。腐植化している。下底面に小枝・葉などの 腐植物の溜まりあり。	大溝覆土（D層）
23-1	灰オリーブ（5Y5／3）埴土。腐植化し、7～8割が腐植物。	大溝覆土（E層）
23-2	23-1層に地山ブロックが混入。	大溝覆土（E層）
24	灰褐（10YR4／1）砂（細砂）をメインとし、23-1層が少量混入。	大溝覆土

第2-3表 調査区域東側壁面 土層断面図 土層註（その3）

層名	土層註	備考
25-1	灰オリーブ（5Y4/2～3/2）埴土。腐植化している。6層に比べやや暗め。砂が少量混入。5mm～1cm程度のカーボン粒の混入あり。	旧河川（新）覆土
25-2	オリーブ黒（5Y3/1～3/2）埴土。腐植化している。25-1層に黒い帶状の埴土の混入があるもの。	旧河川（新）覆土
26	暗灰黄（2.5Y4/2）埴土。腐植化している。白い石粒混入。	旧河川（古）覆土
27	黄灰（2.5Y4/1）埴土をメインとし、2～3cm大の地山（灰白色埴土）ブロックが斑点状に混入。腐植化している。	旧河川（古）覆土
28	オリーブ黒（5Y3/1～3/2）埴土。腐植化している。カーボンの溜まり土。自然木出土。上面に暗灰黄色埴土が見られる。	旧河川（古）覆土
29	灰（7.5Y4/1）埴土。26層との層離面にカーボンの溜まりが見られる。	旧河川（古）覆土
30-1	灰（5Y3/1～4/1）埴土。部分的に白い石粒の混入が見られる。上部において木製品多量出土。	ミゾ5覆土
30-2	オリーブ黒（5Y3/1）埴土。下底面に地山ブロックの混入あり。5mm～1cm程度のカーボンの混入あり。	ミゾ5覆土
31-1	褐灰（10YR4/1）埴土。灰色みが強く、下底面に地山（灰白色埴土）の混入が見られる。	ミゾ3覆土
31-2	褐灰（10YR4/1）埴土。31-1層に比べ地山の混入が多い。	ミゾ3覆土
32-1	褐灰（10YR4/1～2.5Y4/2）埴土。白い石粒混入。	ミゾ1覆土
32-2	灰オリーブ（5Y4/2）埴土。白い石粒混入。32-1層に比べ粘性強い。	ミゾ1覆土
33	オリーブ黒（5Y4/1～3/1）埴土。部分的に地山ブロックが混入。	ミゾ2覆土
地山	以下の3つの層が地山として確認された。 地山1：灰白（10YR7/1）埴土をメインとし、しみ状に褐灰色埴土が混入する。第49グリッドあたりから北で安定し、遺構検出面が高くなっている。ピットが検出されるようになると、灰白（N7/）埴土に変化する。 地山2：黒褐（10YR4/1～3/2）埴土。部分的に灰白色埴土が混入。第54グリッドあたりから第59グリッドの間において、地山1の下で確認される。 地山3：灰白（2.5Y6/1～7/1）埴土。第58グリッドあたりにおいて、地山2の下で確認される。	

## 第2節 平地式建物跡

### 平地式建物跡（第13図）

今回の調査では、平地式建物跡が1棟検出された。

第13～15グリッドに位置し、その平地式建物跡の周溝の一部と柱穴2本を検出した。

第13図の平面図にあるとおり、平地式建物跡の南側部分でL字状に曲がる周溝を確認し、北側部分でその周溝につながると想定される溝が確認された。このことから、この平地式建物跡の平面形は方形状を呈するものと想定している。

周溝の深さは検出面から10cm程度で、暗灰色埴土をメインとした土と灰黄色埴土をメインとした土が堆積していた。

柱穴は、P1とP2の2本のみが確認されただけであるが、4本の主柱をもつ平地式建物跡ではないかと考えている。P1とP2とを結んだ線が、この平地式建物跡の主軸だとすると、主軸は北（磁北）から東へ約26°振る。また、P1とP2との柱間距離は約390cmある。

出土遺物については、第13図の右下にあるP2遺物出土状況図にあるとおり、約20～25cm大と大きめの甕体部片がP2から出土した。図化できないものであるが、外面はハケ調整、内面はヘラ削りされ、外面にはススが顕著に付着していた。その他は、周溝からごく少量の土器細片が出土しているのみであった。

この平地式建物跡の時期については、出土遺物が非常に少なく、時期決定できる土器もないため、明確な時期については不明である。しかし、前節でも述べたのであるが、第8図下から2段目にある調査区域東側壁面の土層断面図で、当調査区域内にある大溝などの覆土の上に堆積している層（4～4層）を、周溝の覆土（15層）が切っていることが確認されており、この平地式建物跡の時期は、当遺跡内の遺構のなかでも比較的新しい時期に位置付けられるのではないかと考えられる。

## 第3節 掘立柱建物跡

### 掘立柱建物跡（第14図）

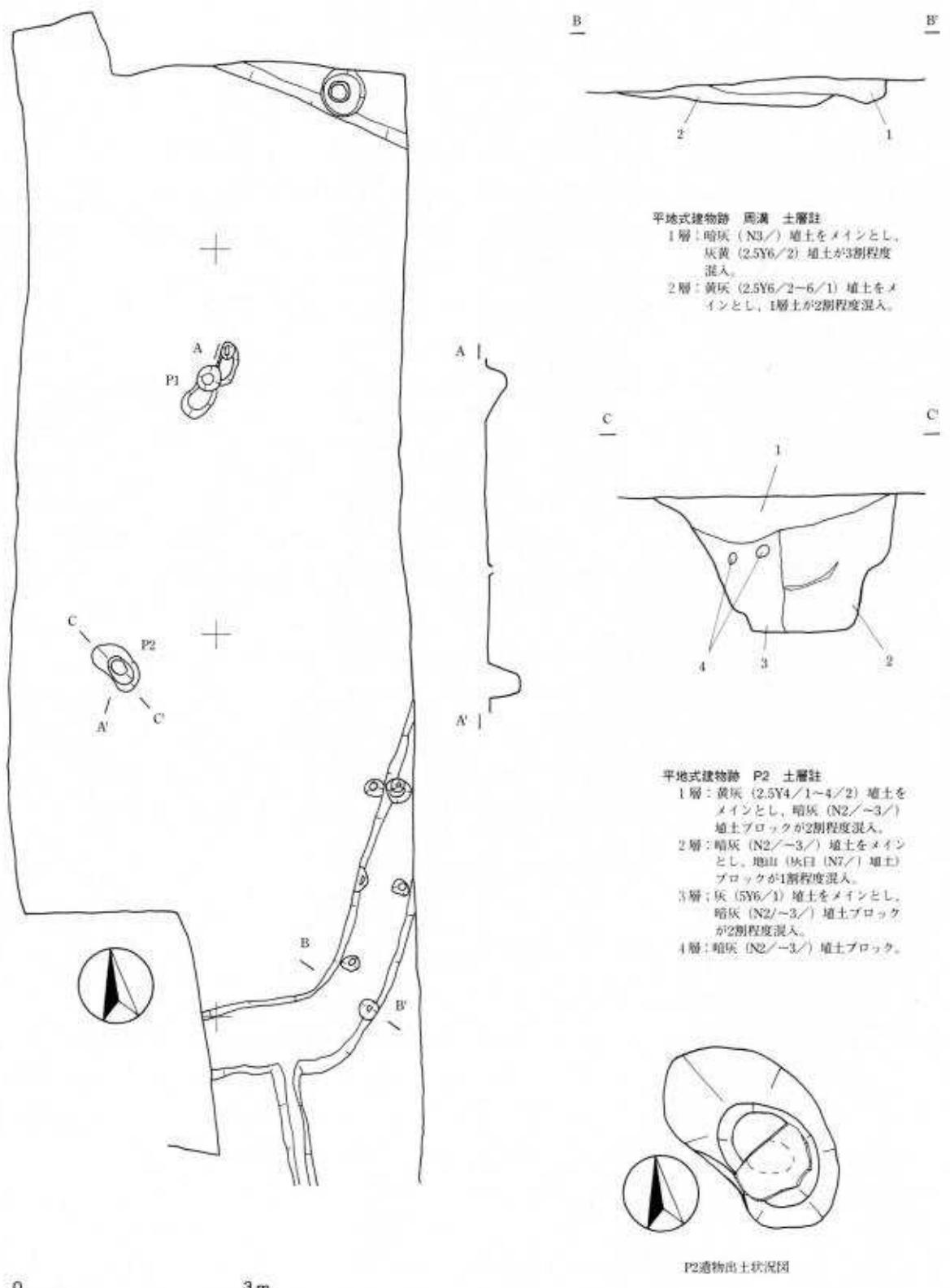
今回の調査区域において、掘立柱建物跡1棟の一部が検出された。

第13グリッドに位置し、第14図の平面図にあるとおり、柱穴4本を検出した。

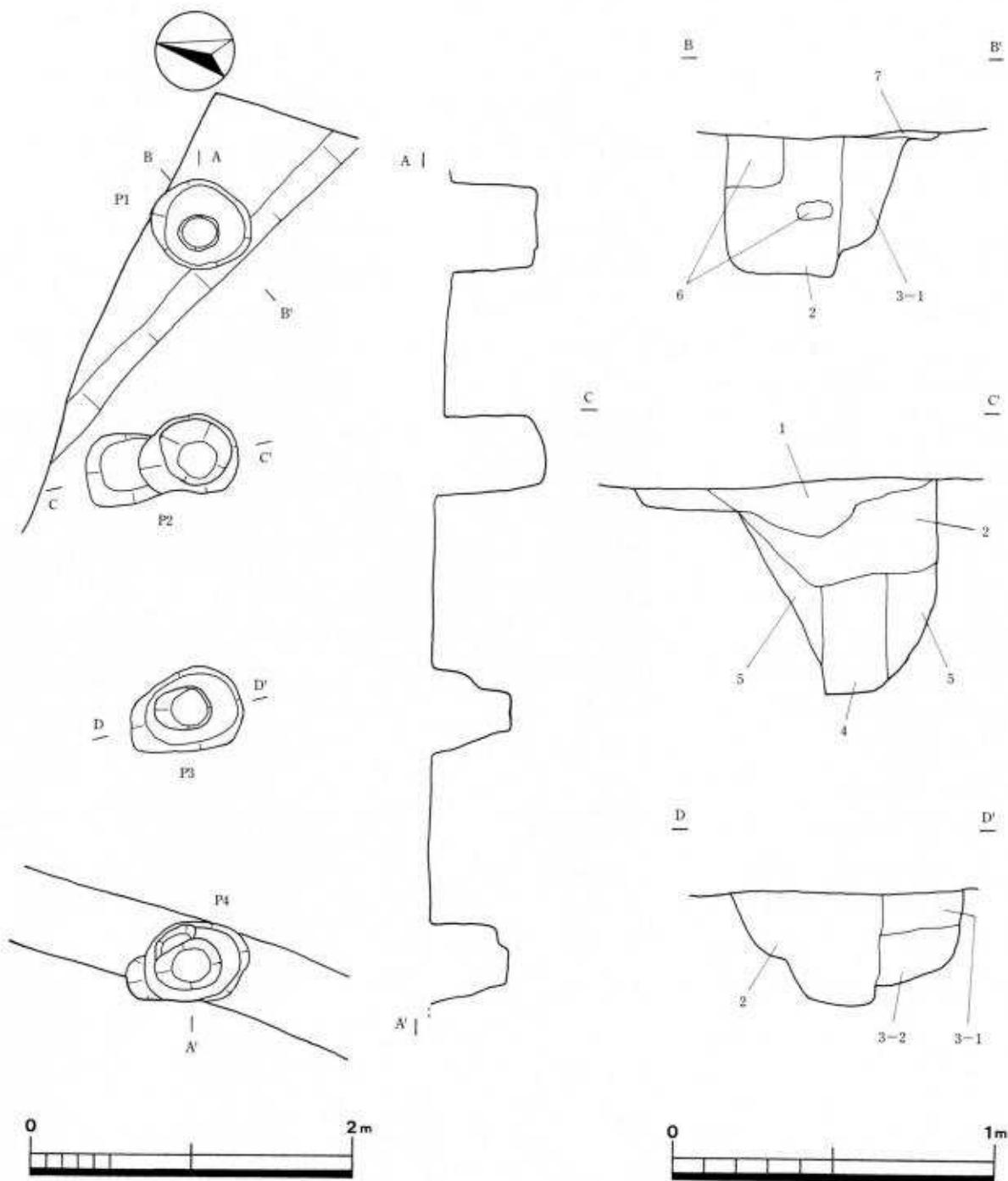
主軸は北（磁北）から東へ約79°振り、P1からP4までの距離が約460cm、各柱間距離については、P1・P2間で約140cm、P2・P3間とP3・P4間で約160cmを測る。柱穴の平面形は、P1・P2が直径約50～60cmの略円形、P3・P4が、長径約70cm、短径約50cmの梢円形状を呈す。柱穴の深さは、P1・P3・P4が検出面から約50cm、P2が検出面から約70cmを測る。

出土遺物については、いずれの柱穴からも遺物が出土しなかった。

この掘立柱建物跡の時期については、遺物が1点も出土していないため、明確な時期については不明であるが、第14図右上の掘立柱建物跡P1土層断面図にあるとおり、P1の覆土の上に、この掘立柱建物跡と重複する平地式建物跡の周溝の覆土が存在することから、この掘立柱建物跡は、前節で述べた平地式建物跡より古い時期に位置付けられるであろう。



第13図 平地式建物跡 平面図、柱穴断面図 ( $S = 1/80$ )  
および周溝・P2 土層断面図、P2 遺物出土状況図 ( $S = 1/20$ ) ( $H = 2.800m$ )



掘立柱建物跡 柱穴 土層註

- 1層：黄灰 (25Y4/1~4/2) 塗土。暗灰色埴土  
ブロックが2割程度混入。平地式建物跡P2  
の1層土に類似。  
2層：暗灰 (N3/-2/) 地山ブロックが混入。  
3-1層：暗灰 (N3/-~2/) 塗土。2層に比べ  
やや明るめ。地山ブロックが2割程度混入。  
3-2層：暗灰 (N3/-~2/) 塗土。3-1層に比  
べ地山ブロックの混入少ない。  
4層：オリーブ黒 (5Y4/1-3/1) 塗土。地山  
ブロック少量混入。  
5層：暗灰 (N3/-~2/) 塗土。2~4cm大的地山  
ブロック混入。  
6層：地山ブロック。  
7層：暗灰 (N3/-) 塗土をメインとし、灰黄 (25Y6  
/2) 塗土が3割程度混入。平地式建物跡の  
周溝覆土。

第14図 掘立柱建物跡 平面図・断面図 ( $S = 1/40$ ) ・ 土層断面図 ( $S = 1/20$ ) ( $H = 2.800m$ )

## 第4節 ミゾ

### ミゾ1（第15図）

第53グリッドに位置し、概ね東西方向に流れるミゾ。

幅は約280cmあり、深さは、深いところで検出面より約20cm程度であったが、第12図の上から2段目にある調査区域東側壁面の土層断面図（32-1・32-2がミゾ1の覆土）から、深いところで約40cmの深さがあったものと思われる。

ミゾ1の土層断面図については、第12図上から2段目にある調査区域東側壁面の土層断面図を、その代わりとして見ていただきたいが、褐灰色埴土（32-1層）と灰オリーブ色埴土（32-2層）の2つの土層が堆積していた。

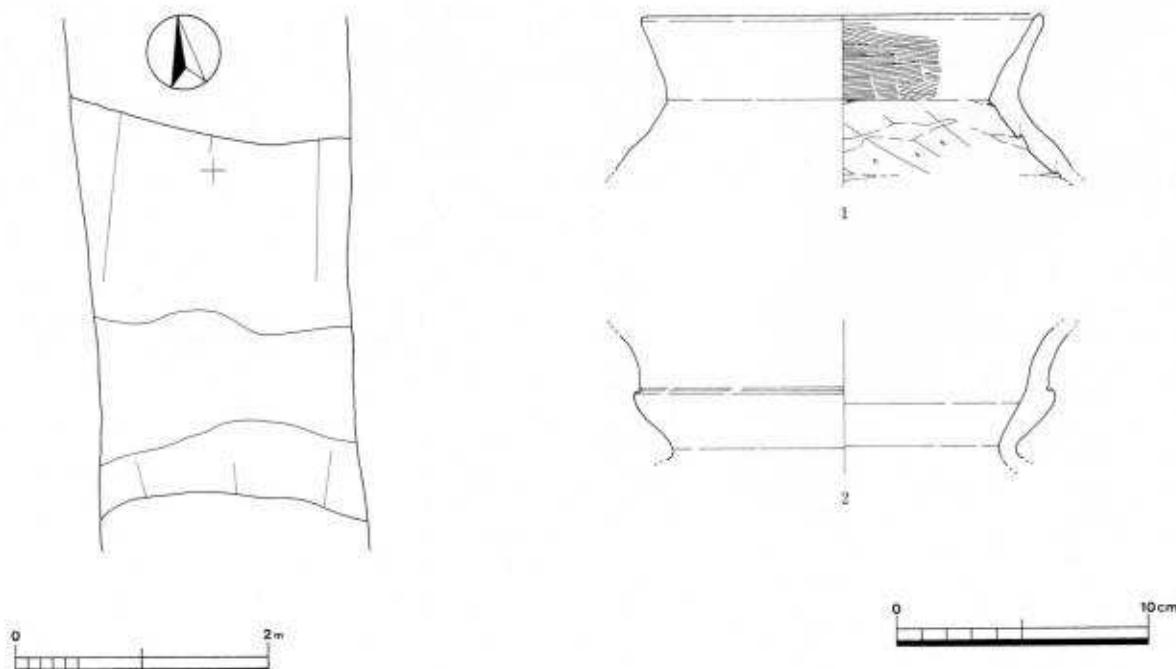
出土遺物は、甕体部片少量と甕底部片1点、そして第15図に掲載した甕と壺の口縁部片1点ずつ、さらに第47図に掲載してある石鎌（133）も出土している。

第15図の1は、断面くの字状の甕口縁部。外面は摩滅して調整不明であるが、内面は、口縁部がハケ調整、体部がヘラ削りされている。体部内面は接合痕が残っており、調整が粗い印象を受ける。2は、山陰系壺の口縁部。口縁部内外面ともヨコナデされている。

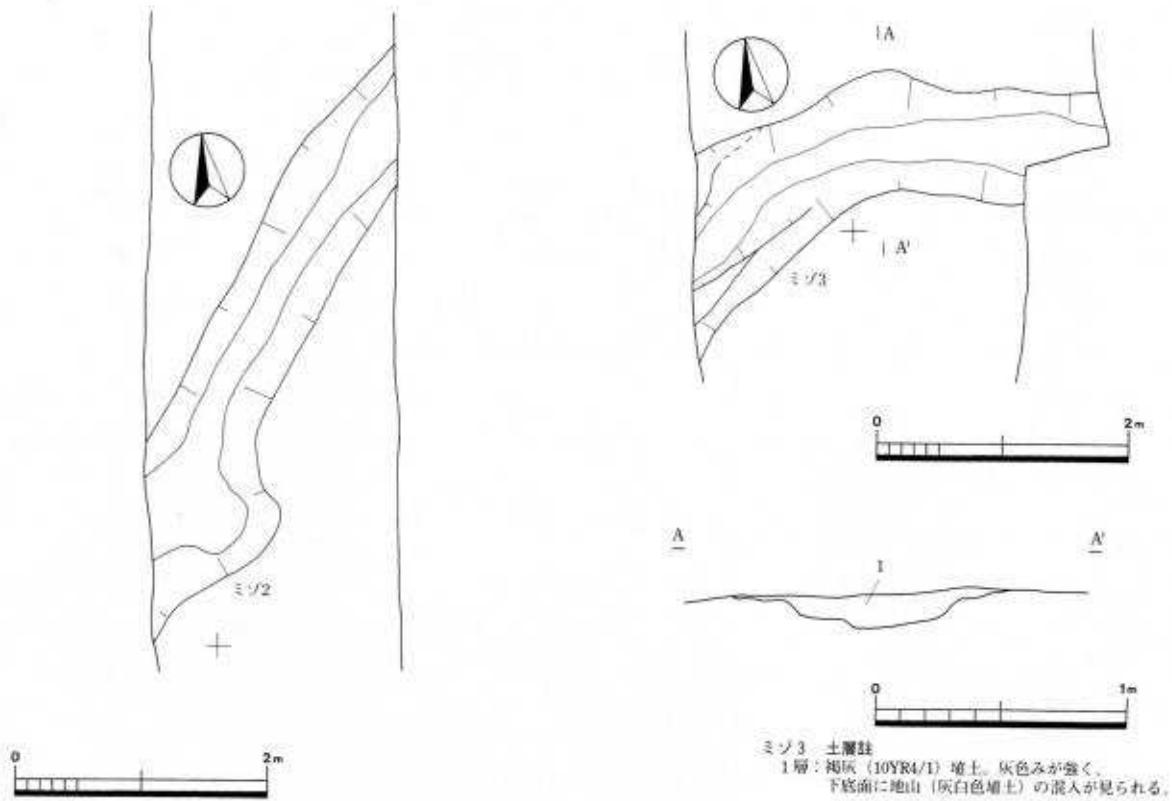
このミゾ1の時期については、上記2点の出土土器から、漆町編年の12群期頃に位置付けられると考えられる。第12図の上から2段目にある調査区域東側壁面の土層断面図において、大溝などの覆土の上に堆積する4-4層をミゾ1の覆土（32-1層）が切っており、ミゾ1は、今回の調査区域で検出された遺構のなかでも比較的新しい時期に位置付けられると考えられる。その点から見ても、ミゾ1を漆町編年12群期頃に位置付けることは妥当であろう。

### ミゾ2（第16図左）

第55グリッドに位置し、北東から南西方向に流れるミゾ。



第15図 ミゾ1 平面図 (S = 1 / 60) ・出土土器 (S = 1 / 3)



第16図 ミヅ2・ミヅ3平面図 (S=1/60) およびミヅ3土層断面図 (S=1/30) (H=2.600m)

幅は約70cmあり、深さは、深いところで確認面から約15cm程度である。

ミヅ2の土層断面図については、第12図の上から3段目にある調査区域東側壁面の土層断面図を、その代わりとしていただきたいが、その33層のオリーブ黒色埴土が堆積していた。

出土遺物については、器種不明の土器細片2点が出土したのみで、ミヅ2の時期については不明である。

#### ミヅ3（第16図右）

第50グリッドに位置。東西方向に円弧を描くように流れるミヅである。

幅は約80～90cmあり、深さは、深いところで約15cm程度である。覆土については、褐灰色埴土をメインとした土が堆積していた。

出土遺物は、甕体部片と思われる土器片が1点出土したのみで、ミヅ3の時期については、不明である。

#### ミヅ4（第17図左）

第46グリッドに位置し、概ね東西方向に流れるミヅ。

幅は約100cmあり、深さは検出面から10cm程度である。土層断面図については、非常に浅いミヅであったため、作成することができなかったが、褐灰（10YR4/2）色埴土で、1cm程度のカーボンを混入し、部分的に地山（灰白色埴土）ブロックが混入している土が堆積していた。

また、遺構検出時の状況から、ミゾ4の東側がミゾ5に切られていることが確認され、ミゾ4はミゾ5より古い時期に位置付けられるといえる。

出土遺物は1点もなく、ミゾ4の明確な時期については不明である。

### ミゾ5（第17図～第22図）

第44～第46グリッドに位置。概ね南北方向に流れるミゾである。

幅は、狭いところで約170cm、広いところで約290cmある。第17図のミゾ5の平面図にあるように、検出した部分のはば中央にピット状の落ち込みがあり、その落ち込み部分で検出面から約70cmの深さがある。その落ち込み以外の部分では、検出面から約30cm～50cmの深さを測る。

土層断面については、第19図の上段にある土層断面図のとおりで、暗灰黄色埴土の1層、灰色埴土の2層、オリーブ黒色埴土の3層が確認されたが、1層土は、調査区域東側壁面の土層断面図にある4～4層土に対比するのではないかと考えられる。2層・3層土のみがミゾ5に伴うもので、1層土はミゾ5に伴うものではないと考えている。

なお、ミゾ5の北側に北東から南西方向のミゾ状の浅い落ち込みがあるが、これについては、検出時の状況から、ミゾ5に切られて、ミゾ5より古い時期に位置付けられるものであることが確認されており、ミゾ5とは関連性をもたないものである。

ミゾ5の出土遺物については、定量の土器と多量の木製品が出土した。第17図にあるミゾ5の平面図に見られるように、ピット状の落ち込みがあるあたりのミゾの両脇に、平坦な浅い落ち込み（検出面から10cm程度の深さのもの）が見られるが、この浅い落ち込みからミゾのなかへ傾斜する肩部において、ミゾの方向とほぼ同じ方向に列をなすような感じで杭が打ち込まれてあった。また、ミゾ内にあるピット状の落ち込みの部分にも杭が打ち込まれていた（杭の状況については第18図参照）。そして、これらの杭が打ち込まれてある区間に概ね集中するようにして、木製品を主とした遺物が出土するという状況であった。また、それらの遺物の多くは、第19図上段にある土層断面図の2層の上部において出土していた。なお、ミゾの両脇に列状に打ち込まれた杭と、ピット状の落ち込み部分に打ち込まれた杭の性格については、筆者の力量不足で詳しくは分からぬが、ミゾの両脇に打ち込まれた杭については、護岸的要素をもったものではないかと考えている。

以下、土器・木製品の順で、ミゾ5の出土遺物について見ていくこととした。なお、木製品で、単なる板状・棒状のものや、板・棒状で先を尖らせただけの疣状のものについては、紙幅の都合上、省略することとした。

#### 【土器】（第19図）

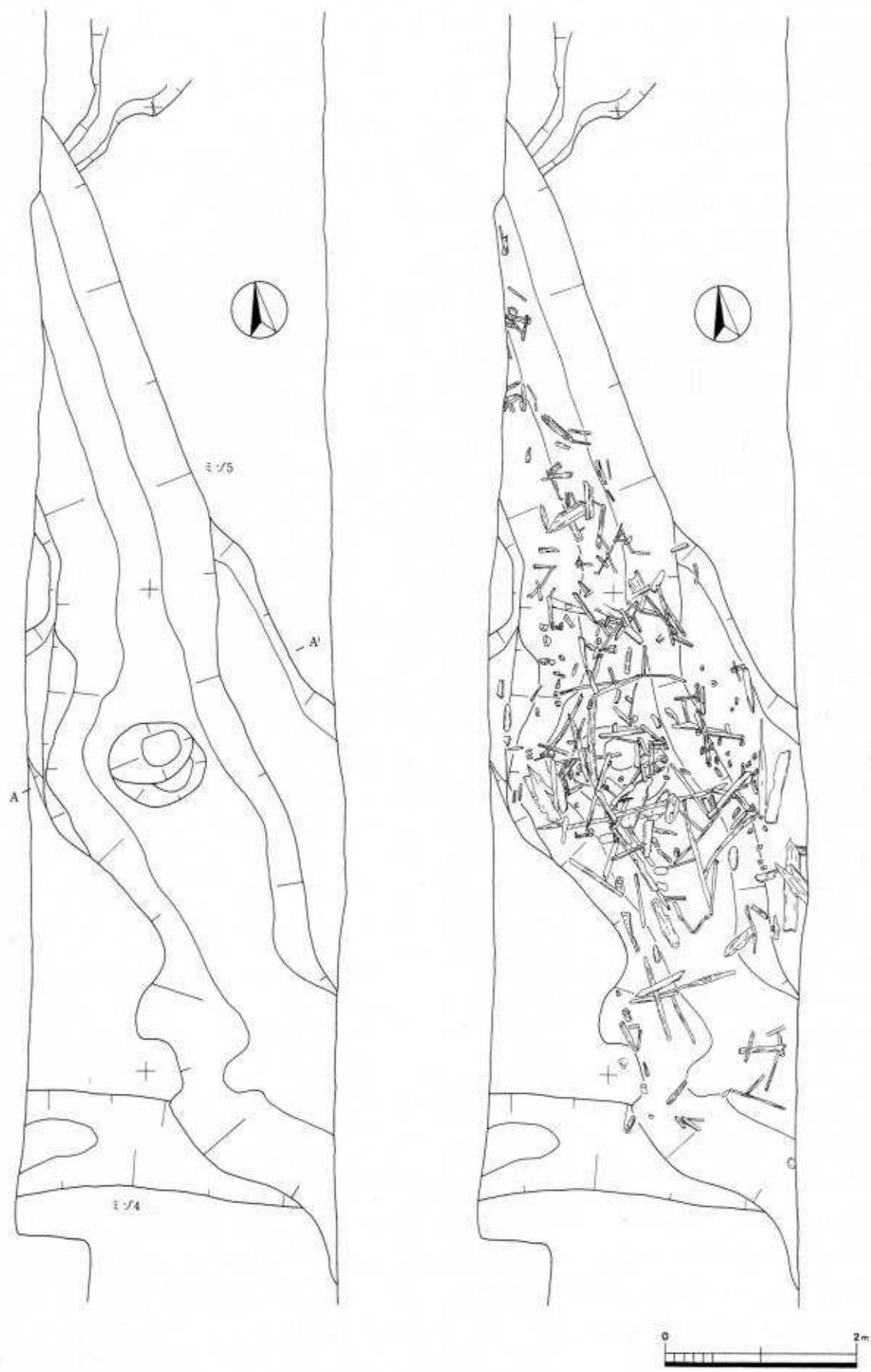
3・4は有段口縁の甕の口縁部で、口縁帯に擬凹線が施されているものである。3は口縁端部が外反・先細りし、4は口縁端部が丸く作られて外反する度合いが比較的弱い。3の口縁部内面には指頭痕が見られる。

5は断面くの字状の甕口縁部。6は口縁端部外面に面をもつ甕の口縁部である。6については、口縁部下半がないのであるが、恐らく、頸部で屈曲したのち、やや直立気味に上方にのびて端部で外反する口縁部で、田嶋1986においてF2a類と分類された「能登形甕」の口縁部ではないかと考えている。

7は平底の甕ないしは壺の底部。外面はハケ調整され、内面は上から見ると時計回りの方向でナデ調整されている（ヘラ削りにしては弱い調整であったので、ナデ調整と判断した）。

8は八の字状に下方に開く高坏脚部。円形の穿孔が4箇所ある。

9は有段口縁状の器台の口縁部である。



第17図 ミゾ4・ミゾ5平面図およびミゾ5遺物出土状況図 (S = 1 / 60)

【木製品】(第20図～第22図)

10は梯子の一部と思われるもので、凸部の上面は欠損が著しい。

11は棒の両端付近に抉りが入れられたもの。長さは46cmほどある。織機(経(布)巻具)である可能性が考えられる。

12は棒の端部付近に抉りが入れられたものの一部。11のようなもの的一部であることも考えられ、織機(経(布)巻具)の一部である可能性が考えられる。

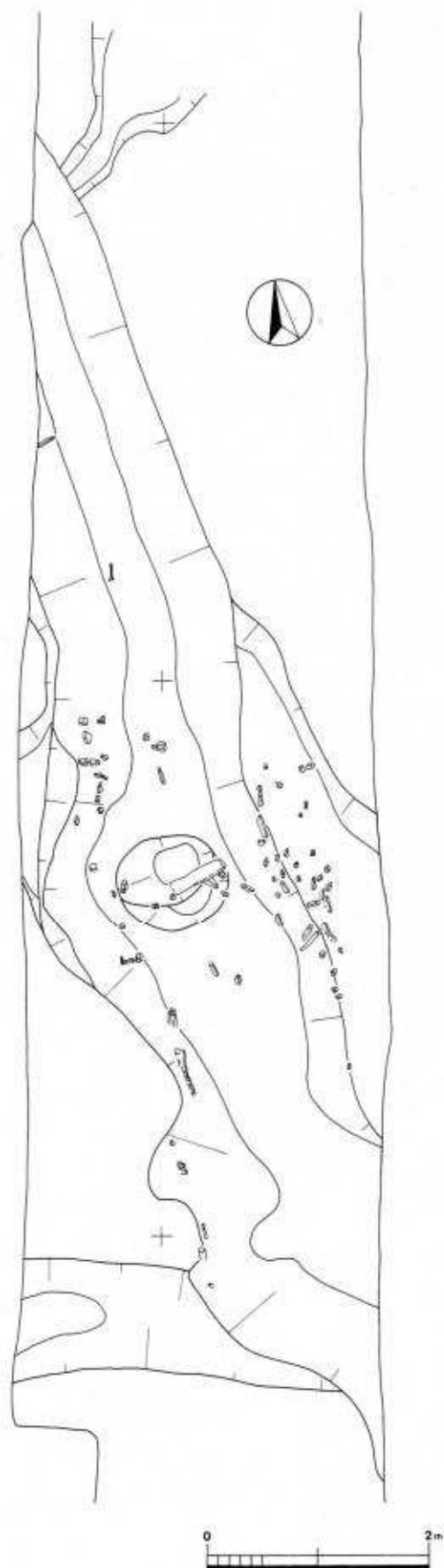
13は棒状のもので、図の上端部から約9cmの部分が半円形の断面を呈するもの的一部である。ミゾの肩部に打ち込まれていた杭の1つで、半円形の断面を呈する部分が下となって打ち込まれていた。

14は、長さ約39cm、断面形が約10～11cm四方の方形状を呈し、図の下端部から約10cmの部分が概ね3分の2ほど削り取られたものである。図の上・下端部は粗く削り取られている。用途は不明である。

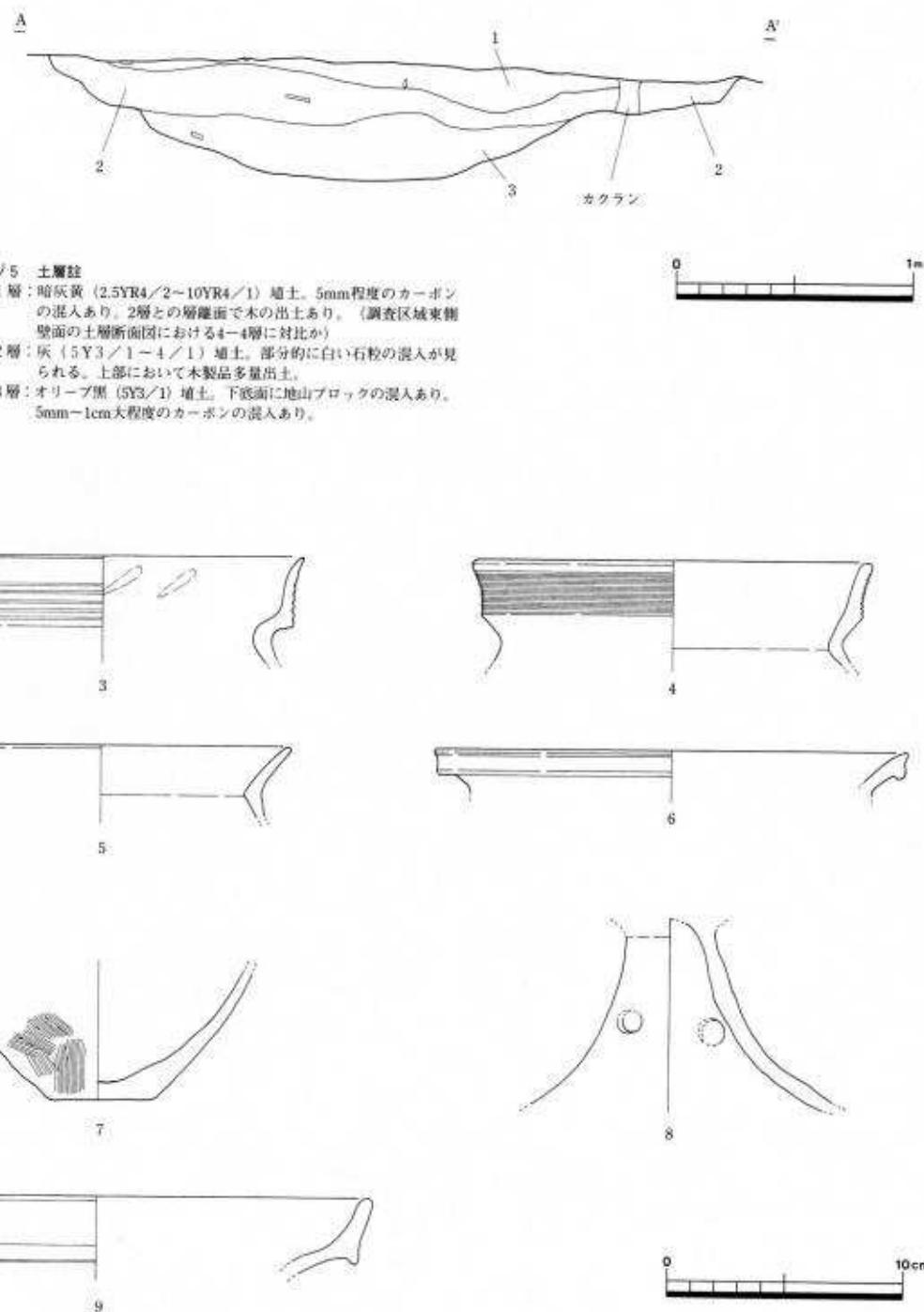
15は、板状のもの的一部で、長方形状の穴が1箇所見られる。削り加工痕は両面に見られ、図化した面は明確に見られるが、反対側の面はあまり明確には見られない。図の上端については、図化した面側のみが粗く削られ、反対側は削られていない、先の尖ったような形をしている。部材の一部と思われるが、ミゾの肩部に打ち込まれた杭の1つである。部材を杭(矢板)に転用したものではないかと思われる。なお、図の上端が下になってミゾの肩部に打ち込まれていた。

16・17は板状のもの的一部で、図の上部において左右両側が抉り取られているものである。長方形状の穴が、16については1箇所、17については5箇所見られる。削り加工痕は、いずれも両面に見られ、図化した面は明確に見られるが、反対側はあまり明確には見られない。なお、17の図の中央右側には、小さな抉りが2箇所入れられている。いずれも部材の一部と思われる。

以上、ミゾ5の出土遺物について見てきたが、

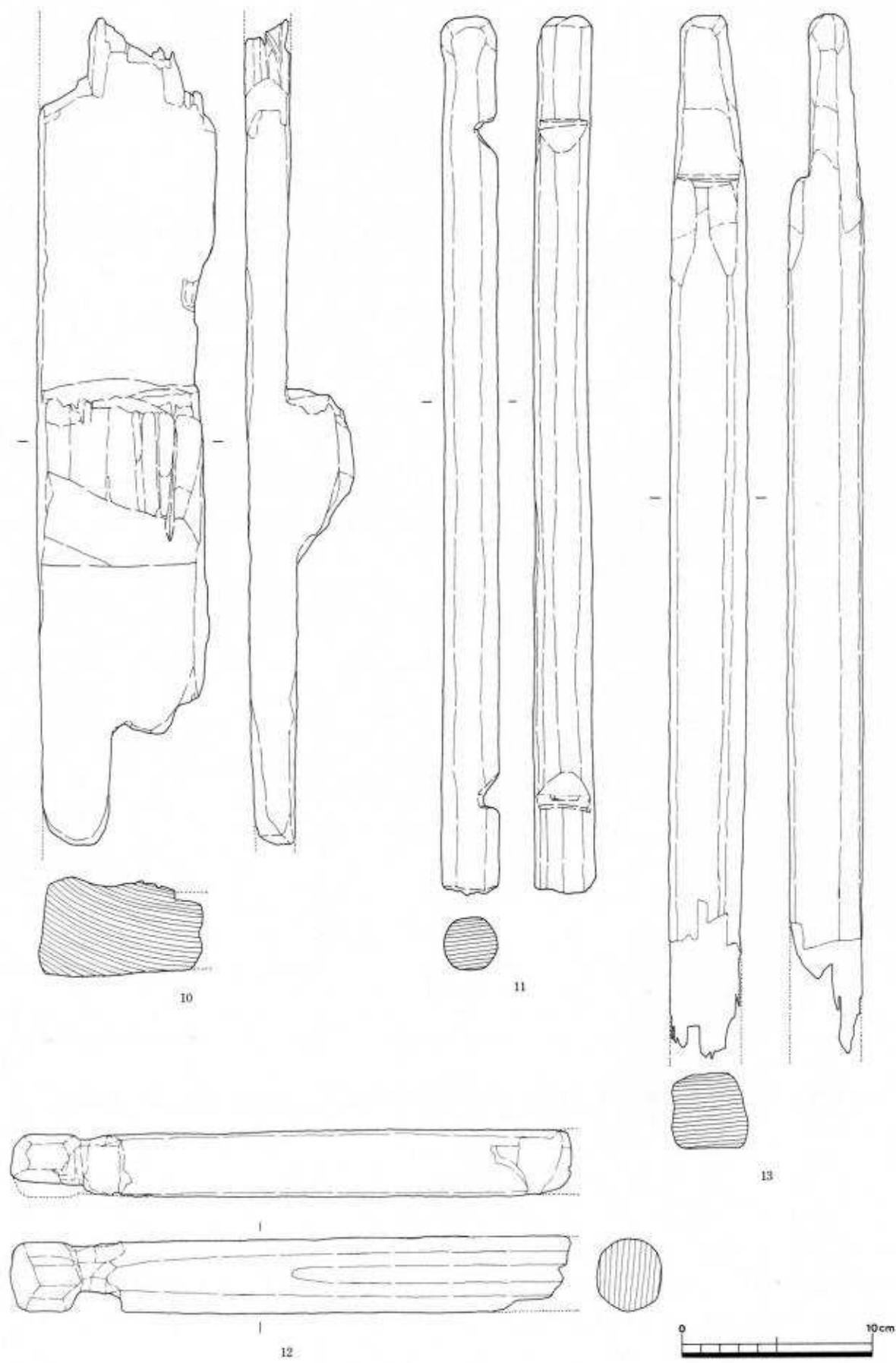


第18図 ミゾ5における杭の状況 (S=1/60)

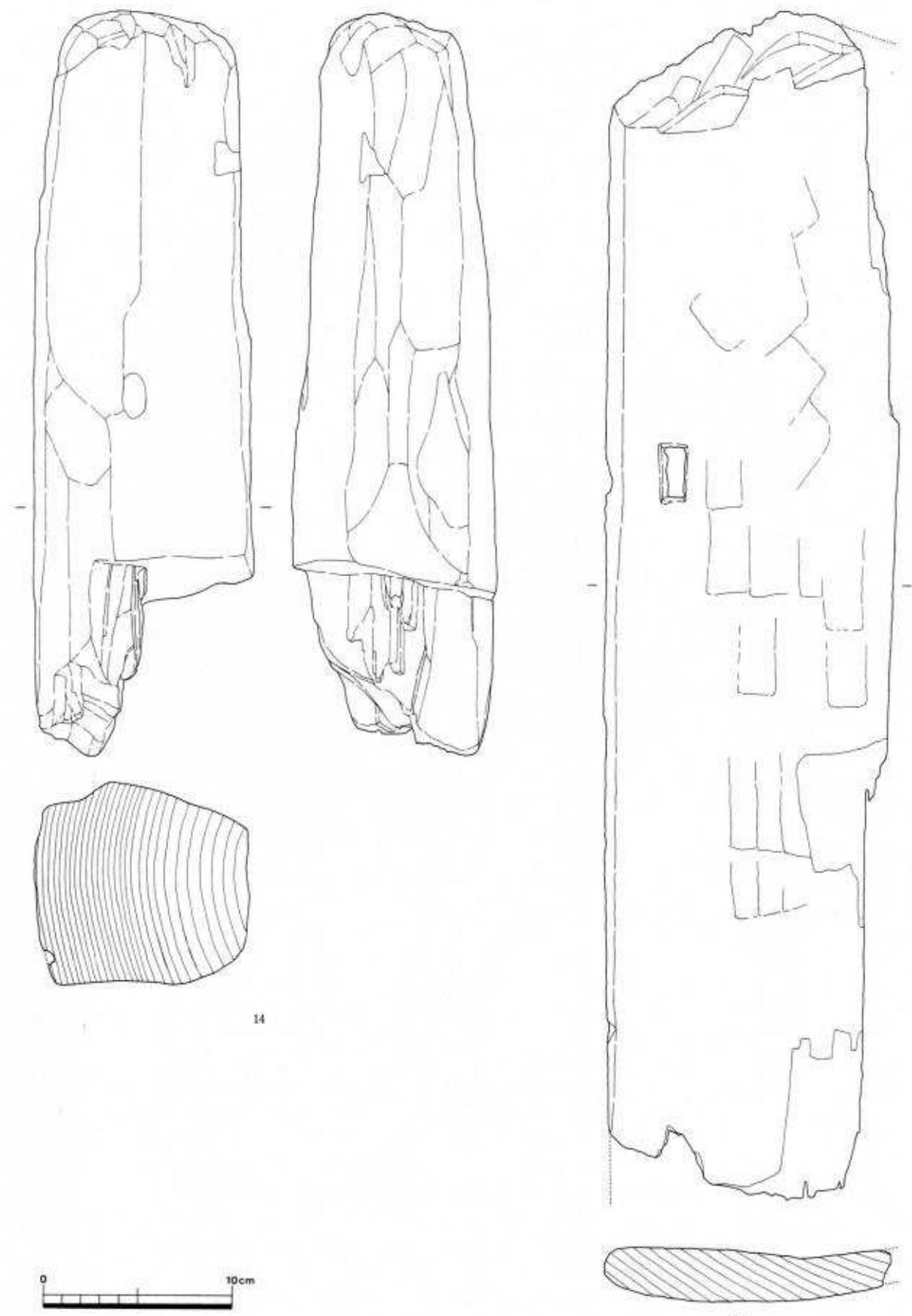


第19図 ミゾ5 土層断面図 ( $S = 1/30$ ) ( $H = 2.600\text{m}$ ) および出土土器 ( $S = 1/3$ )

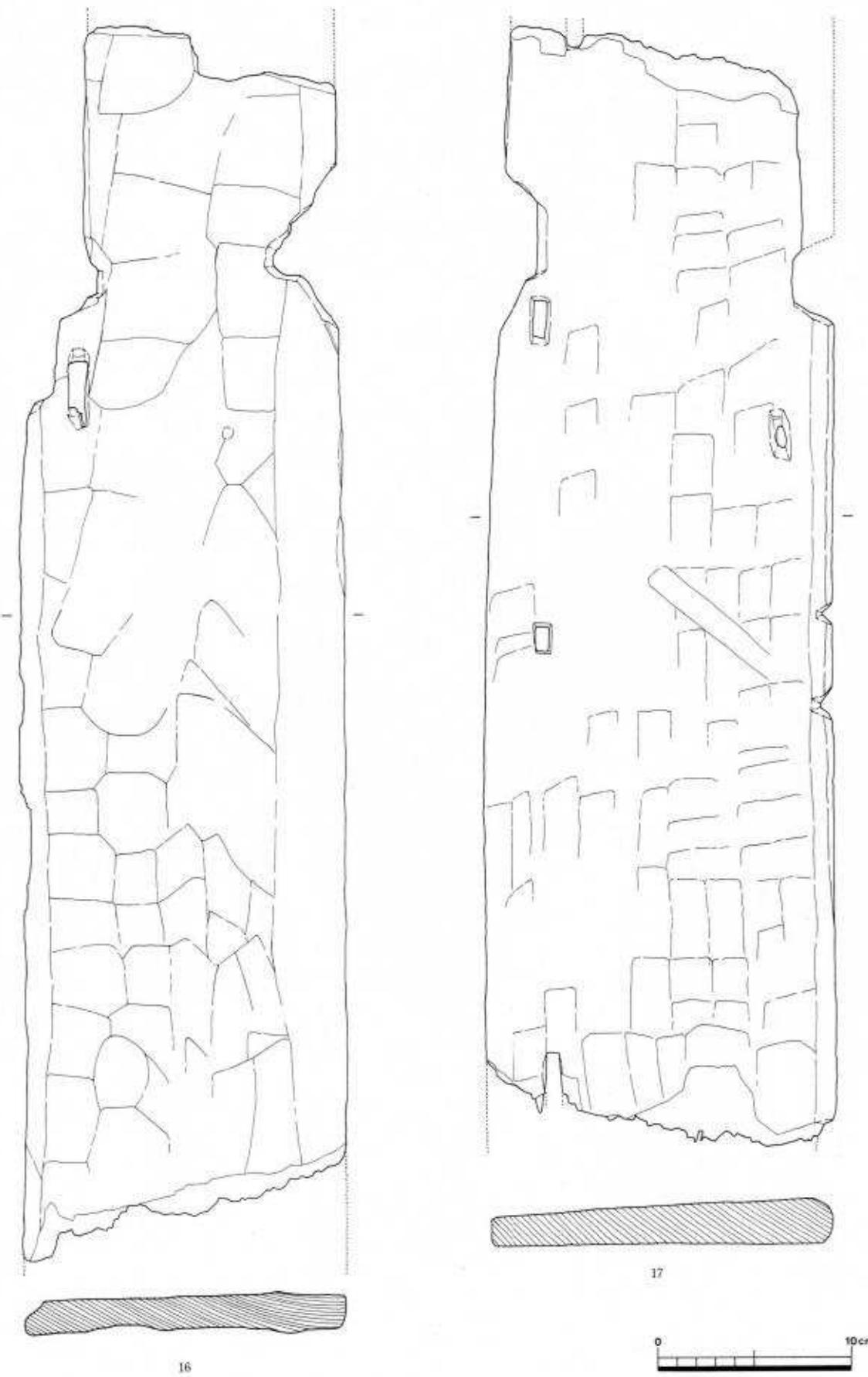
ミゾ5の時期については、第19図4のような比較的古い時期（弥生時代後期～末）に位置付けられる土器片も出土したが、それらは混入品と判断し、その混入品以外の出土土器から判断して、漆町編年の5・6群期頃に位置付けられると思われる。



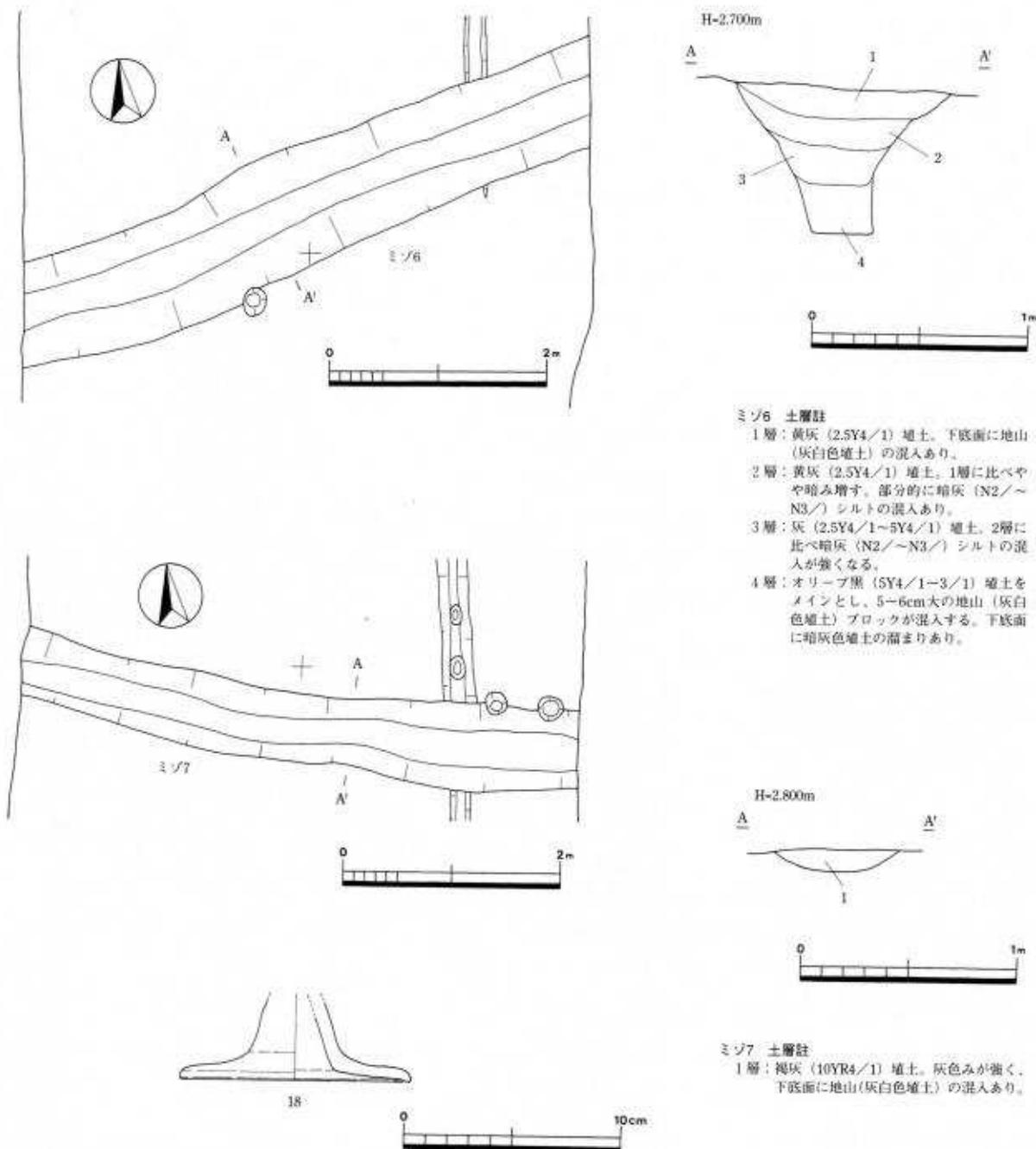
第20図 ミヅ5出土木製品（その1）(S=1/3)



第21図 ミゾ5出土木製品（その2）(S=1/3)



第22図 ミゾ5出土木製品（その3）(S=1/3)



第23図 ミゾ6・7 平面図 ( $S = 1/60$ )・土層断面図 ( $S = 1/30$ ) およびミゾ7 出土土器 ( $S = 1/3$ )

### ミゾ6 (第23図上段)

第17グリッドに位置。概ね東西方向に流れる。

幅は約100～110cmで、深さは検出面より約70cmと深い。断面形は逆台形状を呈し、第23図上段右の土層断面図にあるとおり、黄灰色埴土をメインとした1・2層、灰色埴土をメインとした3層、オリーブ黒色埴土をメインとした4層が堆積していた。

出土遺物については、甕体部片と思われる土器片数点が1層から出土したのみである。よって、ミゾ6の時期については不明であるが、検出時の状況から、ミゾ6が埋没した後にミゾ8が掘削されたということが確認されており、ミゾ6はミゾ8より古い時期に位置付けられることは確実である。

なお、第8図下から1段目にある調査区域東側壁面の土層断面図において、ミゾ6の覆土（17-1層）が大溝覆土の21層を切っているのが見られる。大溝の21層は、第5節の大溝のところで、大溝D層としている層の1つであるが、「大溝D層出土遺物」としたものの時期は、漆町編年6~8群期頃に位置付けられると考えられる。よって、大溝のD層を切っているミゾ6の時期は、その漆町編年6~8群期頃より新しい時期に位置付けられるとも考えられた。

しかし、「大溝D層出土遺物」としたものは、D層の直上、D層より上のC層（調査区域東側壁面の土層断面図における19-2~5層）の床面から出土しているもので、D層は無遺物層であった。よって、ミゾ6の覆土が大溝D層を切っていることから、ミゾ6の時期が漆町編年6~8群期より新しい時期に位置付けられるとは、一概にはいえない。

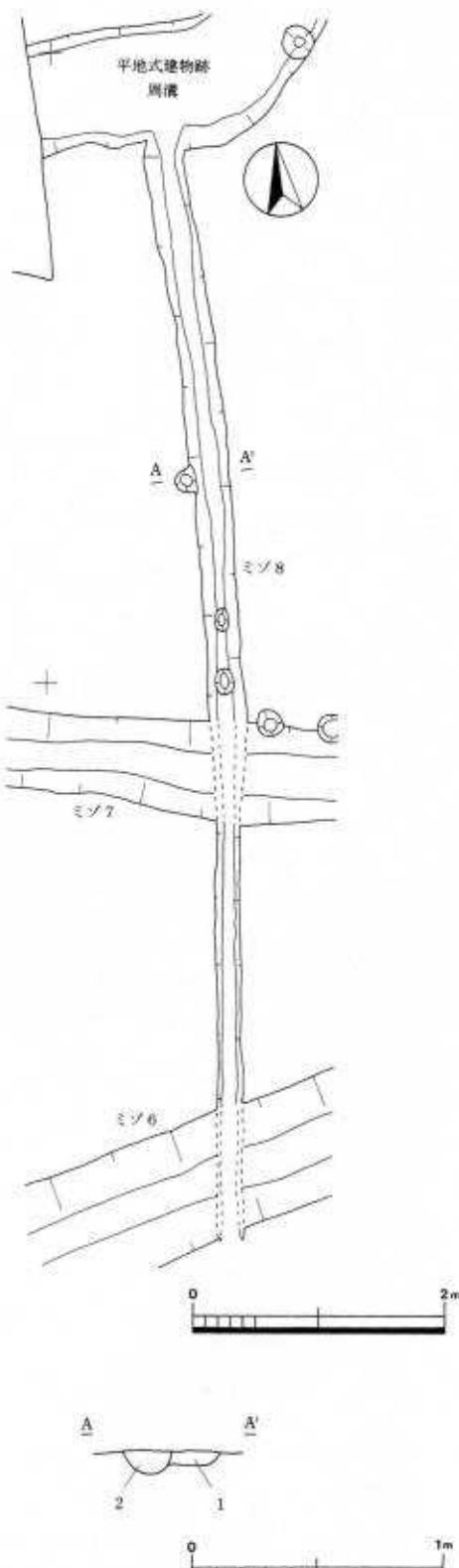
### ミゾ7（第23図下段）

第17グリッドに位置し、概ね東西方向に流れるミゾ。

幅は約60~70cm、深さは検出面から約10cm程度である。第23図右下の土層断面図にあるとおり、褐灰色埴土が堆積していた。

出土遺物については、甕体部片と思われる土器片数点と高壙脚部片2点（この2点は同一個体）が出土した。第23図左下の18は、ミゾ7出土の高壙脚部で、古墳時代前期における畿内系高壙の脚部である。接合ができなかったが、この高壙脚部と同一個体といえる脚柱部片も出土しており、それらから判断して、この高壙の脚柱部は比較的短いものであった。

ミゾ7の時期については、上記の高壙脚部から判断して、漆町編年の11群期以降に位置付けられると思われる。なお、検出時の状況から、ミゾ7はミゾ8を切っていることが確認されており、ミゾ7はミゾ8より新しい時期に位置付けられる。



ミゾ8 土層柱

1層：黒（N3/-N2/-）埴土。カーボン混入。  
2層：黒（N3/-N2/-）埴土。カーボン混入。  
下底面に行ぐに従い地山ブロックが混入。1層に比べやや暗め。（別途構（ビット）の土）

第24図 ミゾ8 平面図 ( $S = 1/60$ )  
および土層断面図 ( $S = 1/30$ ) ( $H = 2.800\text{m}$ )

### ミゾ8（第24図）

第16・17グリッドに位置。概ね南北方向に流れるミゾ。

幅は約20～30cm、深さは検出面から約10cm程度である。第24図の土層断面図にある1層黒色土が堆積しており、覆土にはカーボンが多く混入していた。

出土遺物については、甕体部片と思われる土器片と器種不明の土器片が数点出土しているのみで、ミゾ8の明確な時期については不明である。

第13～15グリッドに位置する平地式建物跡の周溝から南側に伸びており、その平地式建物跡と何らかの関連性をもつ可能性が考えられる。

なお、第24図平面図の中央部でミゾ7と、下の部分（南側の部分）でミゾ6と重複しているが、検出時の状況から、ミゾ8は、ミゾ7に切られ（ミゾ7より古く）、ミゾ6を切っている（ミゾ6より新しい）ことが確認された。

### ミゾ9（第25図上段）

第11・12グリッドに位置。概ね東西方向に流れる。

幅は約70～80cm、深さは検出面から数cm程度で、第25図上段左の平面図にある破線の部分では、ミゾの肩部が確認できないほど浅かった。

土層断面図については、検出面からの深さが非常に浅く、作成できなかったため、第8図の上から5段目にある調査区域東側壁面の土層断面図を、その代わりとしていただきたい。その土層断面図の14層がミゾ9の覆土であり、褐灰色埴土が堆積していた。

出土遺物については、甕体部片と思われる土器片3点と、甕底部の細片1点、そして、第25図上段右に掲載してある甕底部片（19）が出土している。19は、図上復元で直径3cmほどの平底をもつ甕底部で、底部からの立ち上がり部分の外面と外底面がヘラ削りされている。内面は摩滅しているが、ヘラ削りされていたような感じである。細片であったため図化できなかった甕底部片は、非常に小さくて自立できないような平底のものである。

ミゾ9の明確な時期については、時期決定の決め手となるような遺物がないため、不明である。

なお、第3章第1節および本章第1節のところでも述べたのであるが、このミゾ9は、（財）石川県埋蔵文化財センターの調査区域で検出された首長居館域の北端を流れる大溝につながると想定される。

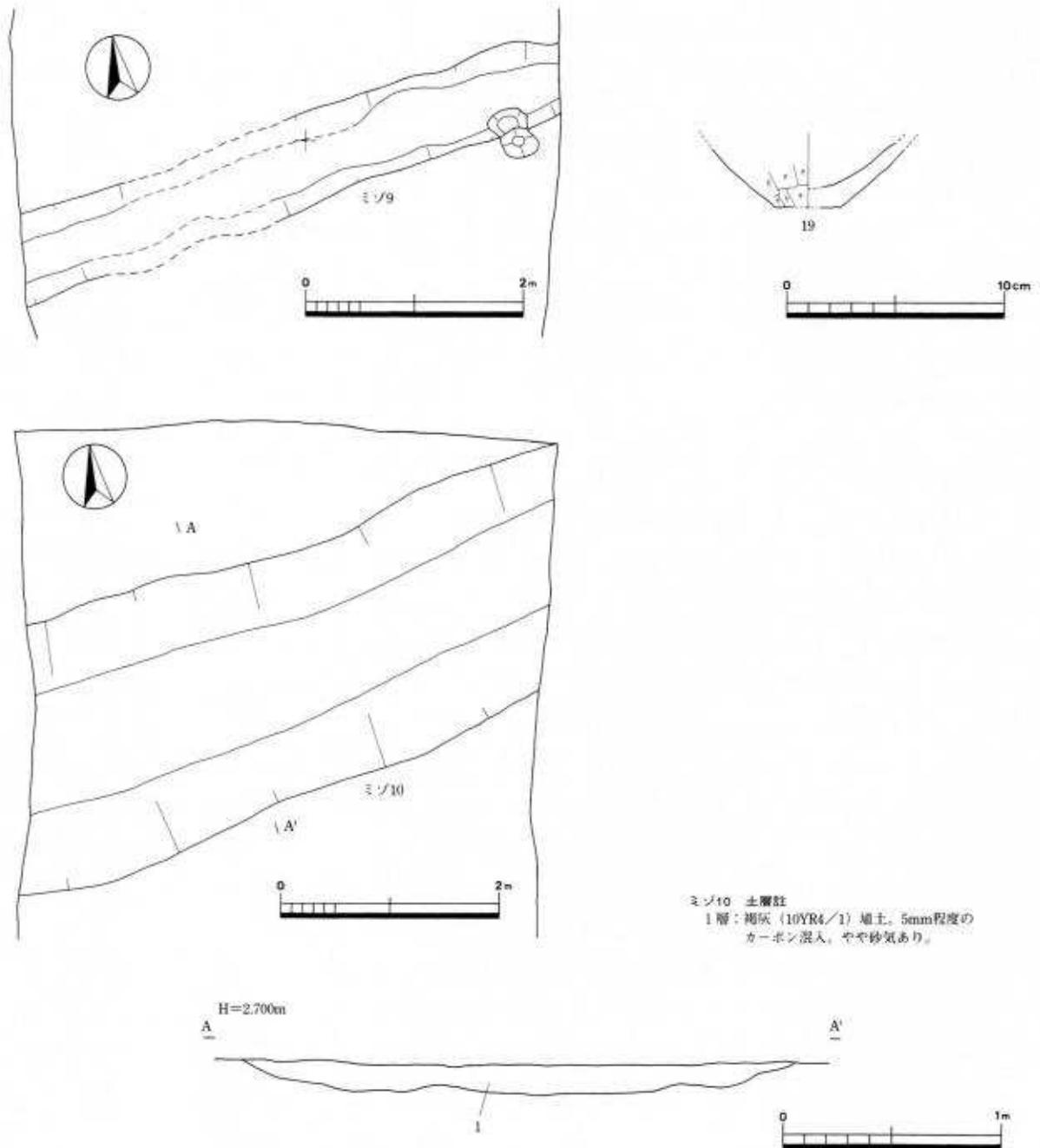
### ミゾ10（第25図下段）

調査区域の北端、第4グリッドに位置。概ね東西方向に流れるミゾ。

幅は約210～250cm、深さは検出面から約10～15cmほどである。第25図下段の土層断面図にあるとおり、褐灰色埴土でやや砂気がある土が堆積していた。なお、第8図の上から1段目にある調査区域東側壁面の土層断面図では、その土（13～2層。13～2層が第25図の土層断面図における1層に対比する）の上に比較的砂気がない13～1層が堆積しており、この13～1層もミゾ10の覆土である。

出土遺物については、器種不明の土器片2点、甕体部片と思われる土器片1点、そして、略完形の土錘1点が出土した。土錘については、第47図（132）に掲載してあるが、その形状から古代のものではないかと思われる。

ミゾ10の時期については、時期決定の決め手となる土器が出土していないため、明確な時期については不明であるが、出土した土錘から、古代に位置付けられる可能性が考えられる。



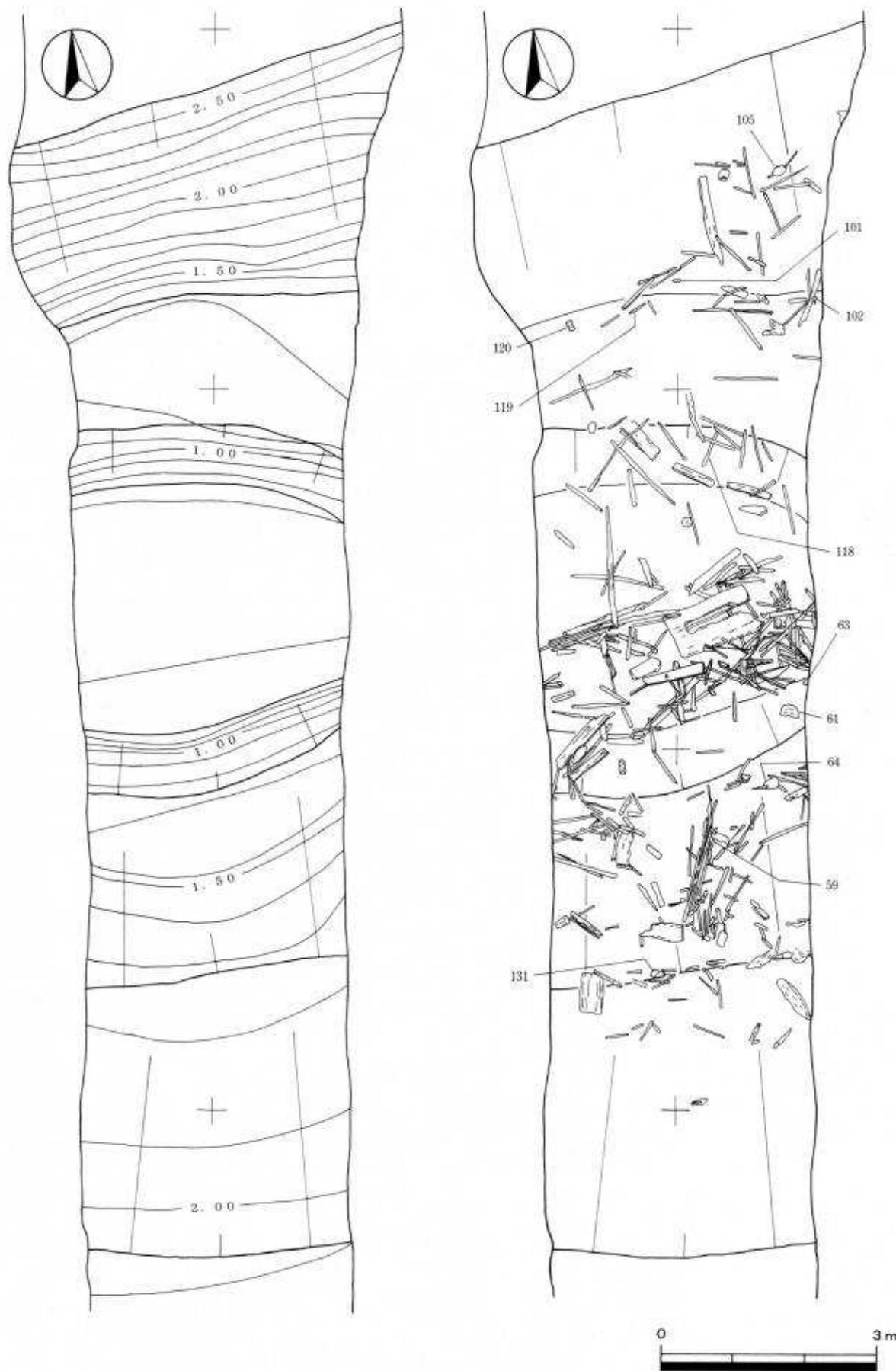
第25図 ミゾ9・10平面図 ( $S=1/60$ ) ミゾ9出土土器 ( $S=1/3$ ) ミゾ10土層断面図 ( $S=1/30$ )

## 第5節 大溝

### 大溝（第26図～第44図）

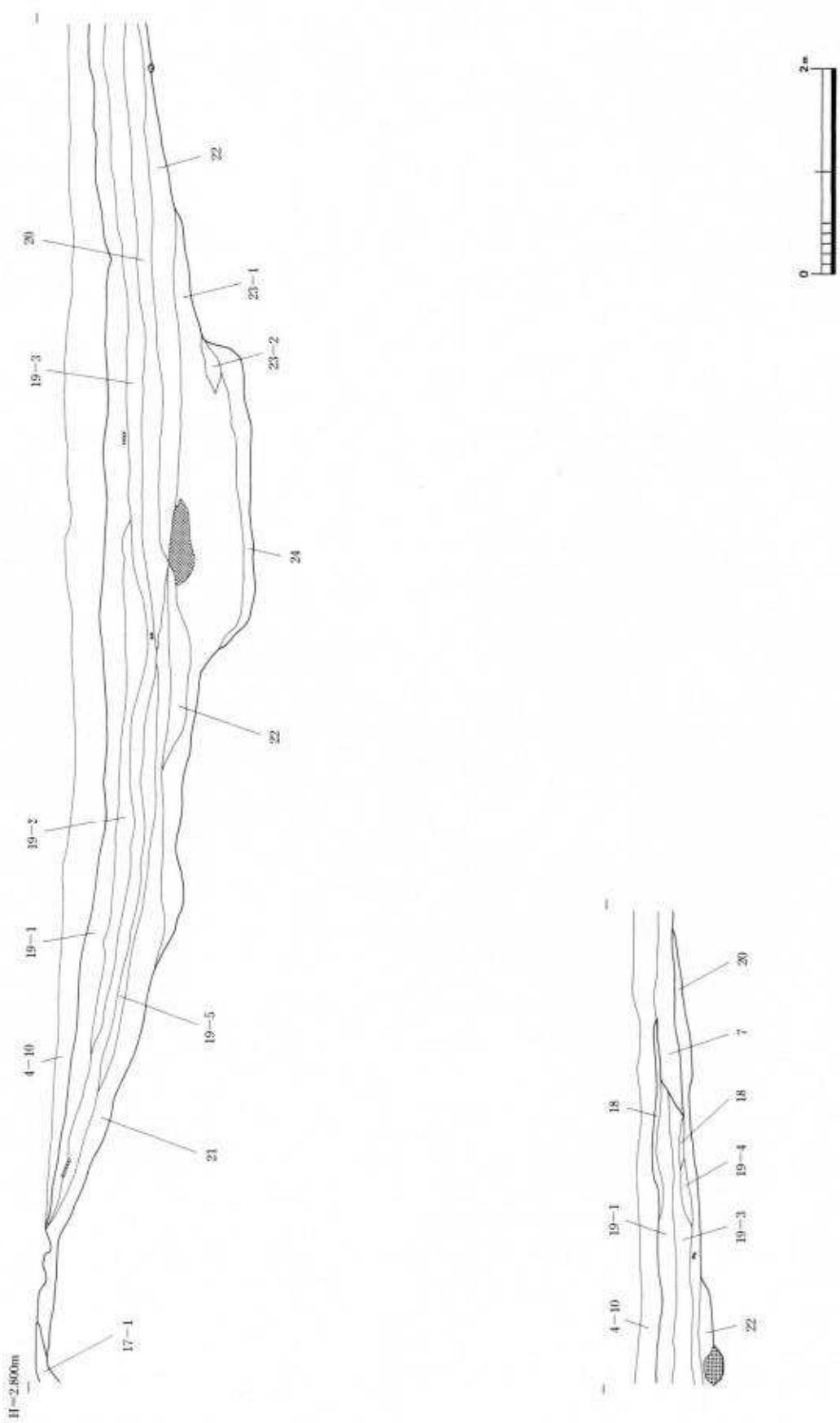
第18～21グリッドに位置し、概ね東西方向に流れる。（財）石川県埋蔵文化財センターの調査区域で確認された川跡につながるものと想定される。

幅は約16mで、深さは、最も深いところで、検出面から約180cmある。第27図に調査区域東側壁面の土層断面図における大溝部分の図を掲載しておいたが、その図にあるとおり、灰黄褐・黒褐・褐灰



第26図 大溝 平面図・遺物出土状況図 ( $S = 1/80$ )

第27図 大溝土層断面図（調査区域東側壁面の土層断面図における大溝部分）（S=1／60）（スクリントンは木）（土層註は第3表）



第3表 大溝 土層断面図（第27図） 土層註

層名	土層註	備考
4 - 10	褐灰（10YR4／2）埴土。白い石粒混入。腐植化している。	
7	オリーブ黒（5Y3／1）埴土をメインとし、灰白色埴土の混入あり。	
17 - 1	黄灰（2.5Y4／1）埴土。下底面に地山質の灰白色埴土の混入あり。	ミヅ6覆土
18	灰白（5Y8／2）埴土。	大溝覆土
19 - 1	灰黄褐（10YR4／2）埴土。木製品多量に混入。	大溝覆土（B層）
19 - 2	黒褐（10YR3／2～3／1）埴土。腐植化している。小枝・葉の腐植物多い。上部で土器多量出土。	大溝覆土（C層）
19 - 3	灰黄褐（10YR4／2～3／2）埴土。腐植化している。19 - 1層に比べやや暗め。	大溝覆土（C層）
19 - 4	灰黄褐（10YR4／2）埴土。19 - 1層に比べやや明るめ。	大溝覆土（C層）
19 - 5	褐灰（10YR6／1～5／1）埴土。5mm程度のカーボン混入。	大溝覆土（C層）
20	灰黄褐（10YR4／2～3／2）埴土。腐植化している。19層に比べるとやや暗め。	大溝覆土（D層）
21	灰黄褐（10YR4／2～3／2）埴土。腐植化している。小枝・葉などの腐植物多い。	大溝覆土（D層）
22	黒褐（10YR3／1）埴土。腐植化している。下底面に小枝・葉などの腐植物の溜まりあり。	大溝覆土（D層）
23 - 1	灰オリーブ（5Y5／3）埴土。腐植化し、7～8割が腐植物。	大溝覆土（E層）
23 - 2	23 - 1層に地山ブロックが混入。	大溝覆土（E層）
24	灰褐（10YR4／1）砂を（細砂）メインとし、23 - 1層が少量混入。	大溝覆土
地山	灰白（N7／）埴土。	

色埴土で一部腐植化している19層、灰黄褐色埴土で腐植化している20・21層、黒褐色埴土で腐植化している22層、灰オリーブ色埴土で腐植化している23層、灰褐色砂をメインとした24層が大溝に堆積していた。

遺物については多量に出土しており、今回の調査で出土した遺物のほとんどは、この大溝から出土している。

調査時における遺物の取り上げについては、概ね層ごとに行なっており、第27図の土層断面図にある4 - 10層をA層（A層は大溝にかかる土層ではないと考えている）、19 - 1層をB層、19 - 2～5層をC層、20～22層をD層、23層をE層として、遺物の取り上げを行なった（24層からの出土遺物はなかった）。

その結果、B層とC層から多量の遺物が出土し、大溝出土遺物のほとんどは、B層とC層の出土遺物であった。そのB層・C層における遺物の出土状況を平面で見ると、概ね、大溝の北側の肩部（第26図の平面図における上のほうの肩部）で土器片が集中し、大溝の中央部で木製品が集中するという状況であった（第26図右にある遺物出土状況図には、土器の出土状況が記載されていない）。D層からは出土遺物はなく、E層からはごく少量の土器が出土するのみであった。

なお、後述する遺物の説明において「D層出土遺物」としたものがあるが、これについては、D層の

直上、C層の床面から出土したものであり、D層ではなく、C層（床面）からの出土遺物である。以下、「D層出土遺物」はC層床面からの出土遺物として、D層は無遺物層として把握していただきたい（混乱をさけるため、「D層出土遺物」を「C層床面出土遺物」とすべきであったが、調査時において「D層出土遺物」として取り上げてしまったため、そのまま「D層出土遺物」としておく）。

以下、大溝の出土遺物について見ていくが、B層、B・C層、B・C・D層、C層、C・D層、D層、E層出土遺物と、層ごとに出土遺物を見ていくこととする（B・C層、B・C・D層、C・D層の出土遺物とは、違う層から出土した破片でありながらも接合できた遺物、または、層離面で出土していざれの層にかかる遺物か判断しかねた遺物を指す）。なお、大溝から出土した木製品で、単なる板状・棒状のものや、板・棒状のもので先端を尖らせただけの杭状のものについては、紙幅の都合上、省略することとした。

#### 大溝B層出土遺物（第28図～第34図）

##### 【土器】（第28図～第30図）

<甕>（20～42）

20～34は断面くの字状の甕口縁部。20～26は口縁端部が丸く作られているのに対し、27～34は口縁端部に面をもつ。

口縁端部が丸く作られている20～26のうち、24については、他のものに比べ口縁部が直立ぎみとなっており、頸部外面の屈曲が緩やかなものとなっている。また25・26については、頸部から口縁部下半の外面が強くヨコナデされており、口縁部外面に小さな段をもったような形となっている。なお、21の口縁部内面は、ハケ調整後にヨコナデされており、ヨコナデされる前のハケ調整痕がうすく見られる。22の口縁部内面も、ハケ調整後にヨコナデされており、口縁部内面のハケ調整痕は完全に消されているが、頸部内面にハケ調整痕が残っている。

口縁端部に面をもつ27～34においては、32の口縁端部の面が上方を向いており、他のものは違った形の口縁端部となっている。また、33・34については、他のものに比べ、強く外反して短い口縁部となっている。なお、27の口縁部外面、29の口縁部内外面、30の口縁部内面は、ハケ調整後にヨコナデされており、ヨコナデされる前のハケ調整痕がうすく見られる。

35は、断面くの字状を呈し、口縁端部が上方に摘み上げられた形を呈する甕口縁部である。口縁部から頸部の外面と口縁部内面はヨコナデされ、体部外面はハケ調整、体部内面はヘラ削りされている。

36は、断面くの字状を呈し、口縁端部内面が肥厚する布留甕の口縁部である。肩部外面にはヨコ方向のハケ調整痕が見られ、それより上の部分では、タテ方向のハケ調整の後、ヨコナデされており、ヨコナデされる前のハケ調整痕がうすく見られる。口縁部内面においても、ハケ調整の後、ヨコナデされ、ハケ調整痕がうすく見られる。体部内面はヘラ削りされている。

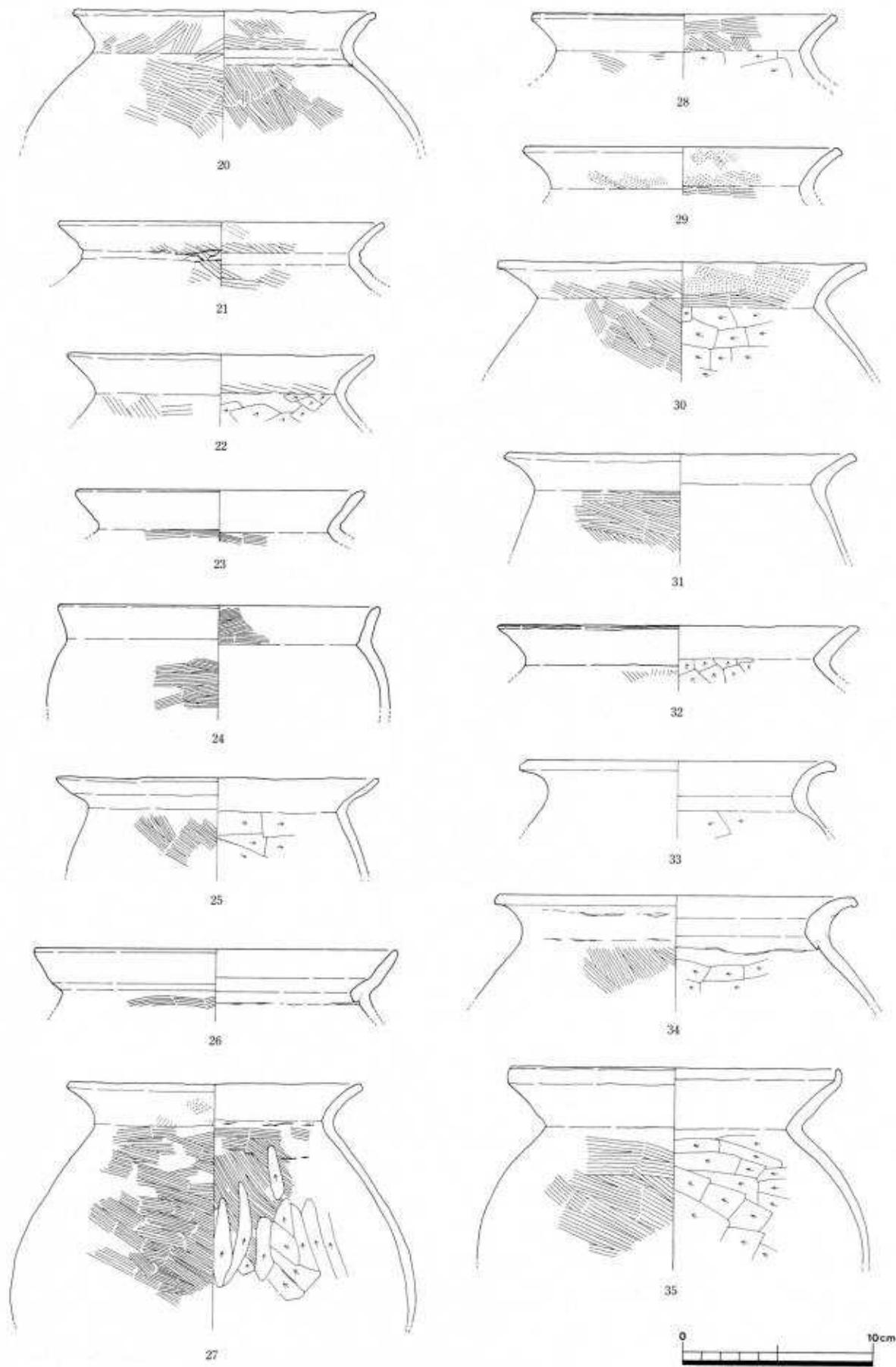
37は、断面S字状の甕口縁部。口縁部から頸部の内外面はヨコナデされているが、頸部外面にはヨコナデされる前のハケ調整痕がうすく見られる。

38は、受口状の甕口縁。口縁部の段は比較的緩やかで、口縁端部に外傾する面をもつ。

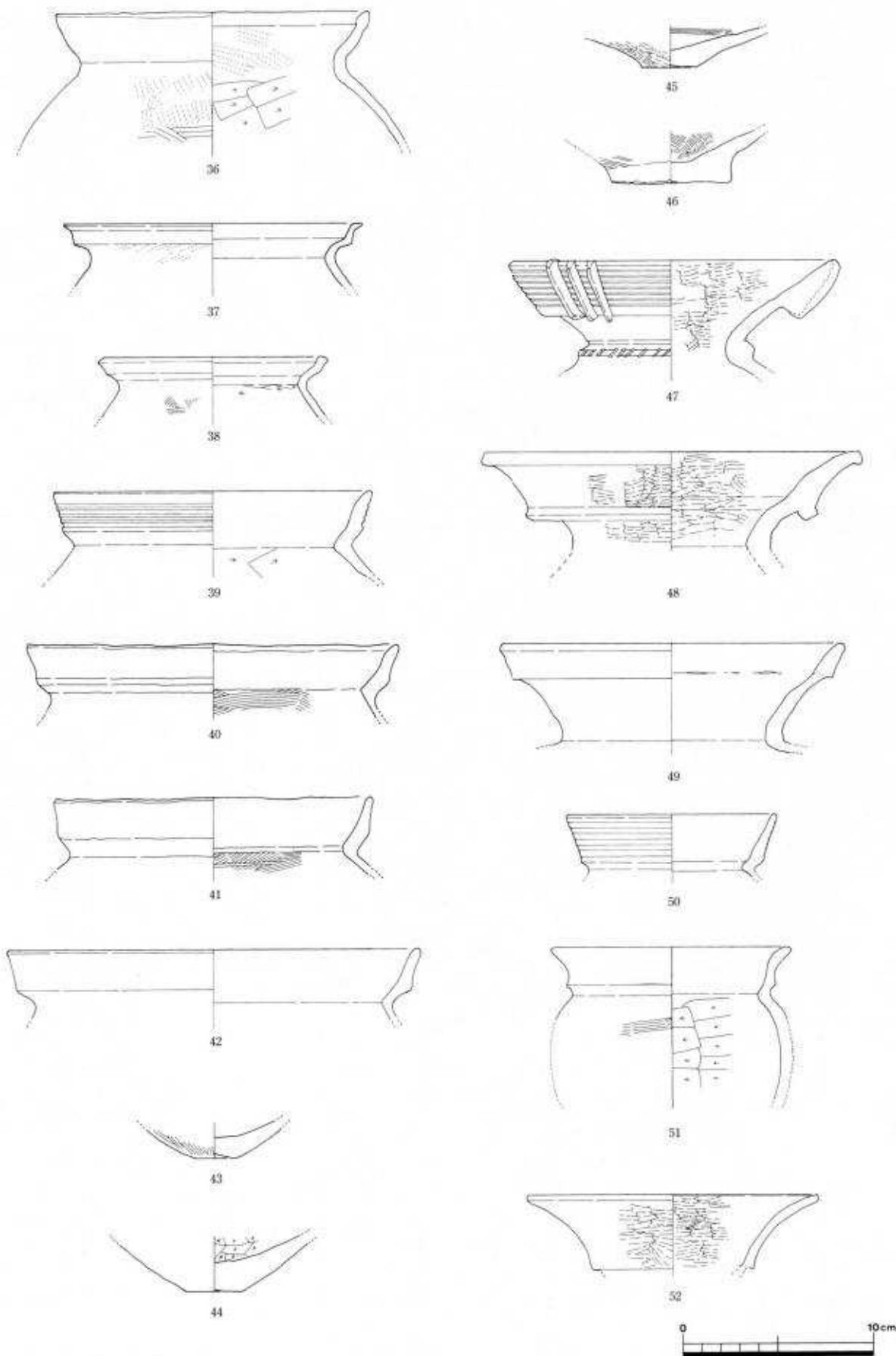
39～42は、有段口縁の甕口縁部。39は口縁帶外面に擬凹線が施され、40～42の口縁帶外面はヨコナデされているのみである。いずれも口縁部はあまり外反していないもので、39～41の口縁端部はやや先細りぎみに、42の口縁端部は丸く作られている。

<底部>（43～46）

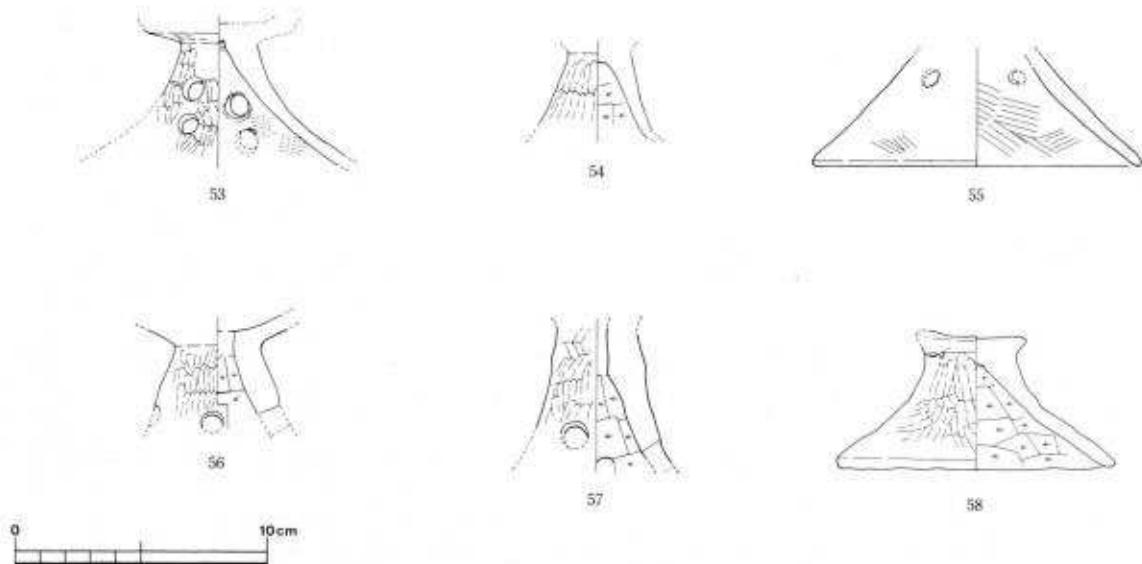
43・44は甕の底部、45・46は壺の底部と思われる。43の外底面は凹んでナデ調整され、自立でき



第28図 大溝B層出土土器（その1）(S=1/3)



第29図 大溝B層出土土器（その2）(S=1/3)



第30図 大溝B層出土土器（その3）(S=1/3)

ないと思わせるほどの小さな平底である。45の外面は、外底面に至るまで入念にヘラミガキされ、内底面は、上から見ると反時計回りの方向で、強いヘラナデ調整が施されている。46の外底面は、ヘラ削りされた後、底面端部のところのみ、不整方向のナデ調整でヘラ削り痕を消している。

#### <壺> (47~51)

47は、古墳時代前期における東海系壺の口縁部である。口縁部のみ略完形となって出土した。口縁部外面に見られる棒状浮文は3本で1組となっており、それが3箇所見られる。また、頸部外面にある稜の部分には、ハケ状具による連続斜行刻みが入れられている。

48・49は有段口縁状の壺口縁部。50・51は、弥生時代末の月影式期からの系譜をもつ有段口縁の壺口縁部である。50は口縁帶外面に擬凹線が施され、口縁部はあまり外反せず、端部は丸く作られている。これに対し、51は口縁帶外面に擬凹線がなく、口縁部は強く外反、端部は先細りしている。

#### <高坏> (52~54)

52は、弥生時代末の月影式期からの系譜をもつ有段高坏の口縁部。53は、小さな碗形の坏部に、八の字状に下方に開く脚部が付く小型高坏の脚基部から脚部。54は、八の字状に下方に開くと想定される高坏の脚基部である。53については、上下2段で1組の円形穿孔が脚部に4箇所あり、脚基部内面にはシボリ痕が見られる。また、脚部内面は、ハケ調整後にヨコナデされており、ヨコナデされる前のハケ調整痕がうすく残っている。

#### <脚部> (55)

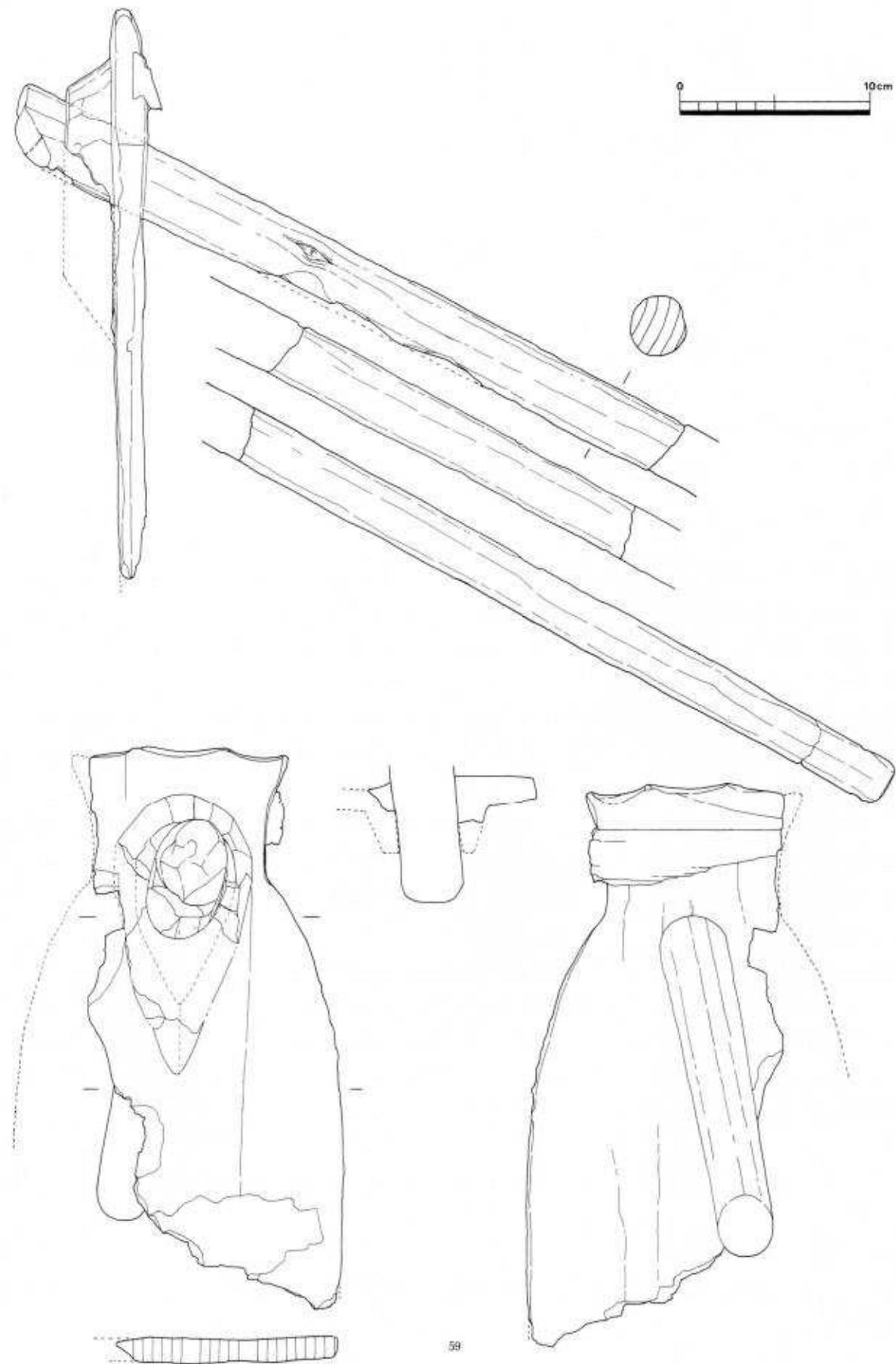
55は、ハの字状に下方に開く高坏ないしは器台の脚部。破片が小さく個数は不明であるが、円形の穿孔がある。

#### <器台> (56・57)

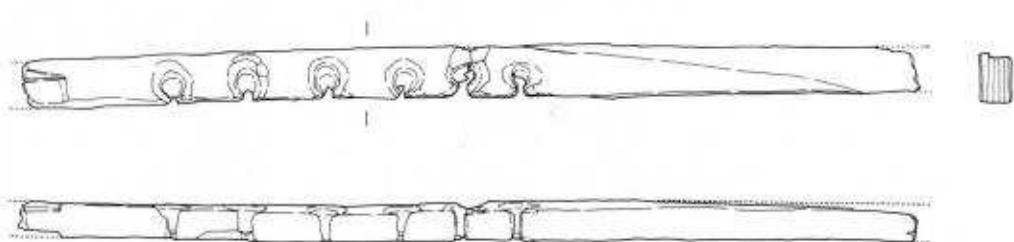
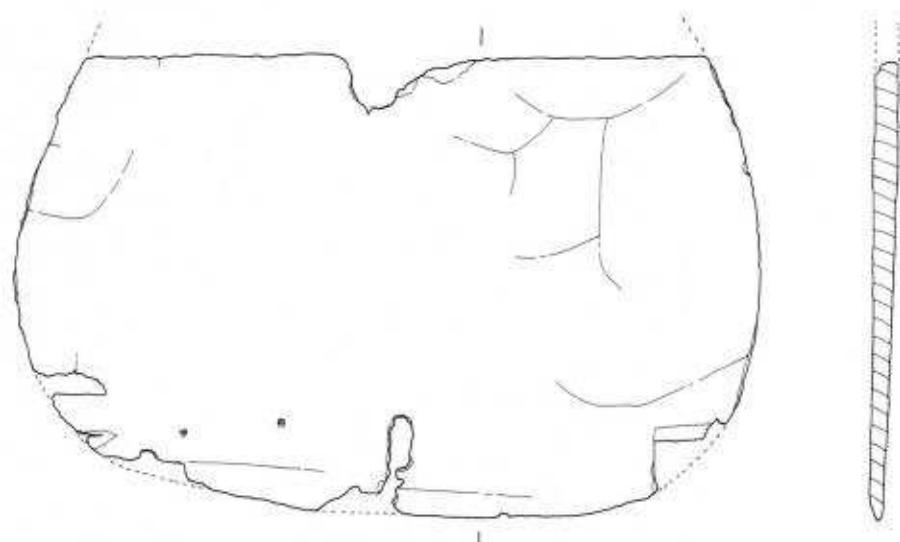
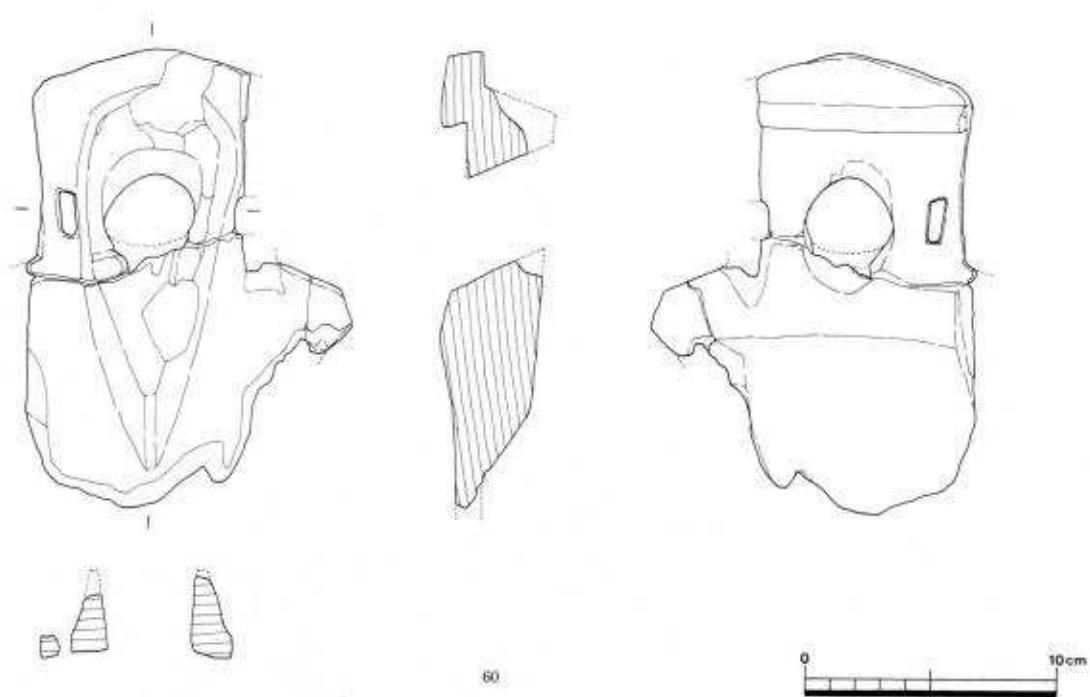
56は、古墳時代前期に見られる小型器台の脚基部。57は小型器台の脚部である。いずれも円形の穿孔が4箇所ある。

#### <蓋形土器> (58)

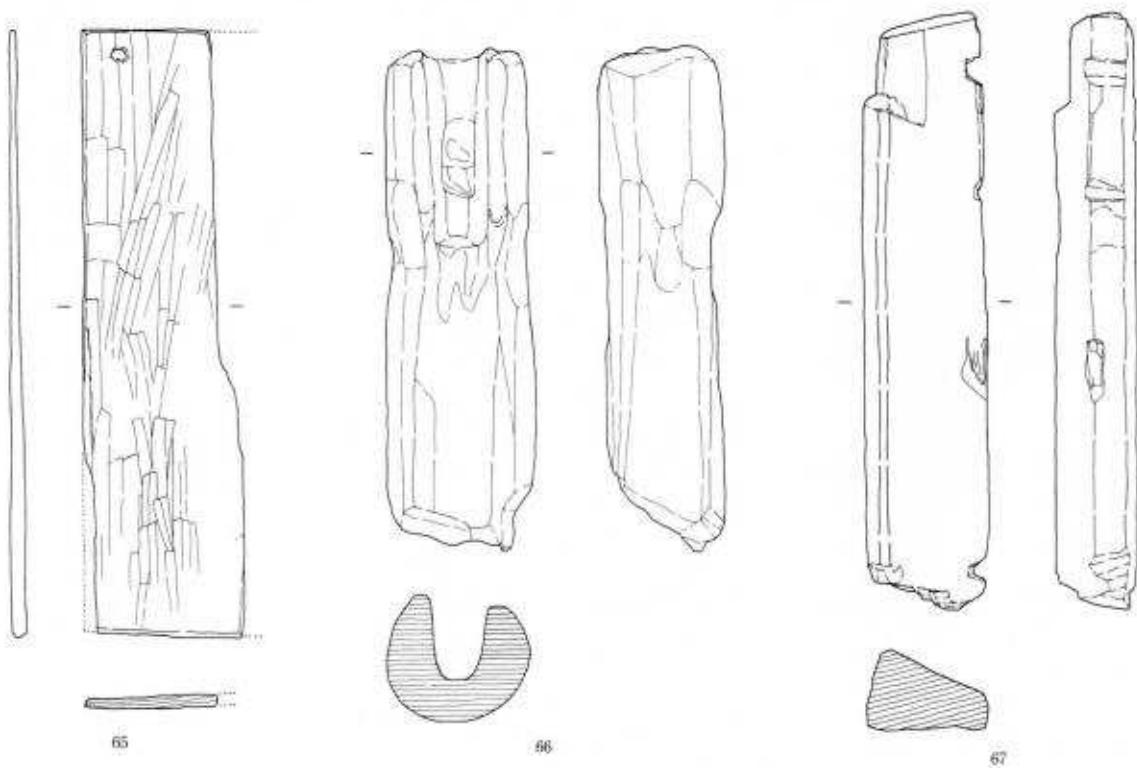
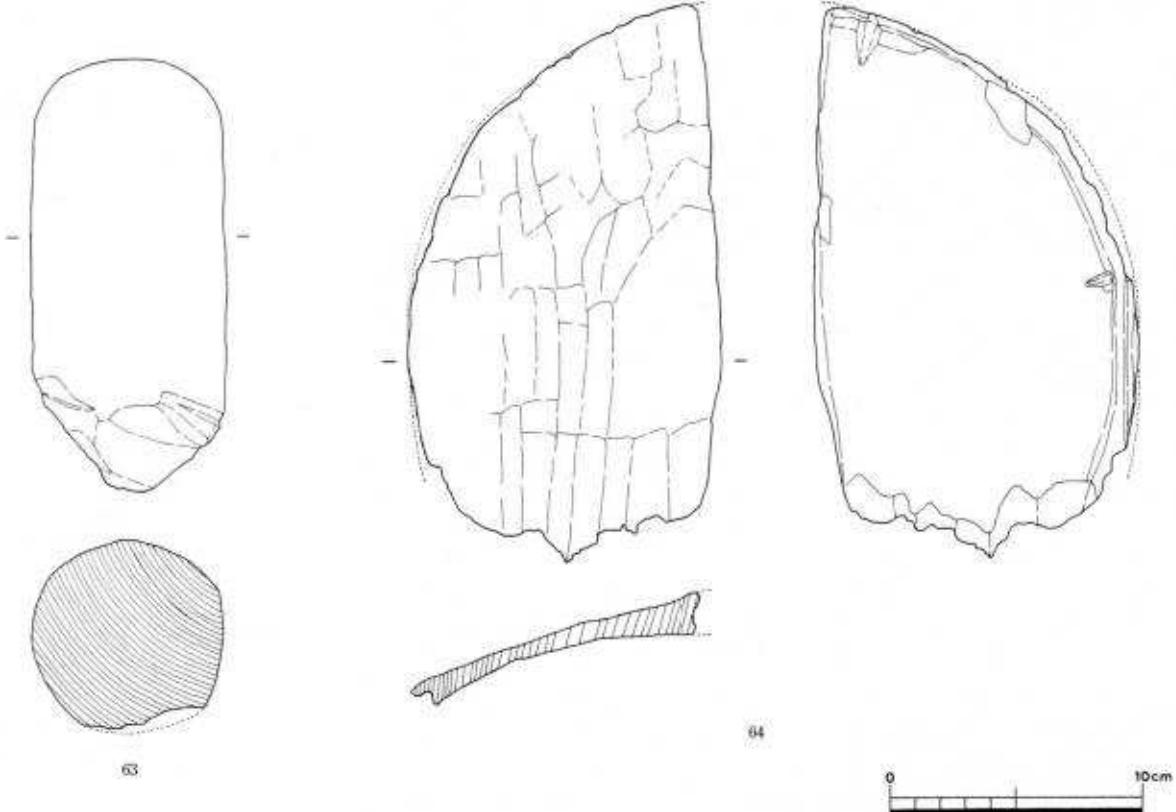
58は蓋形土器で、略完形となって出土した。



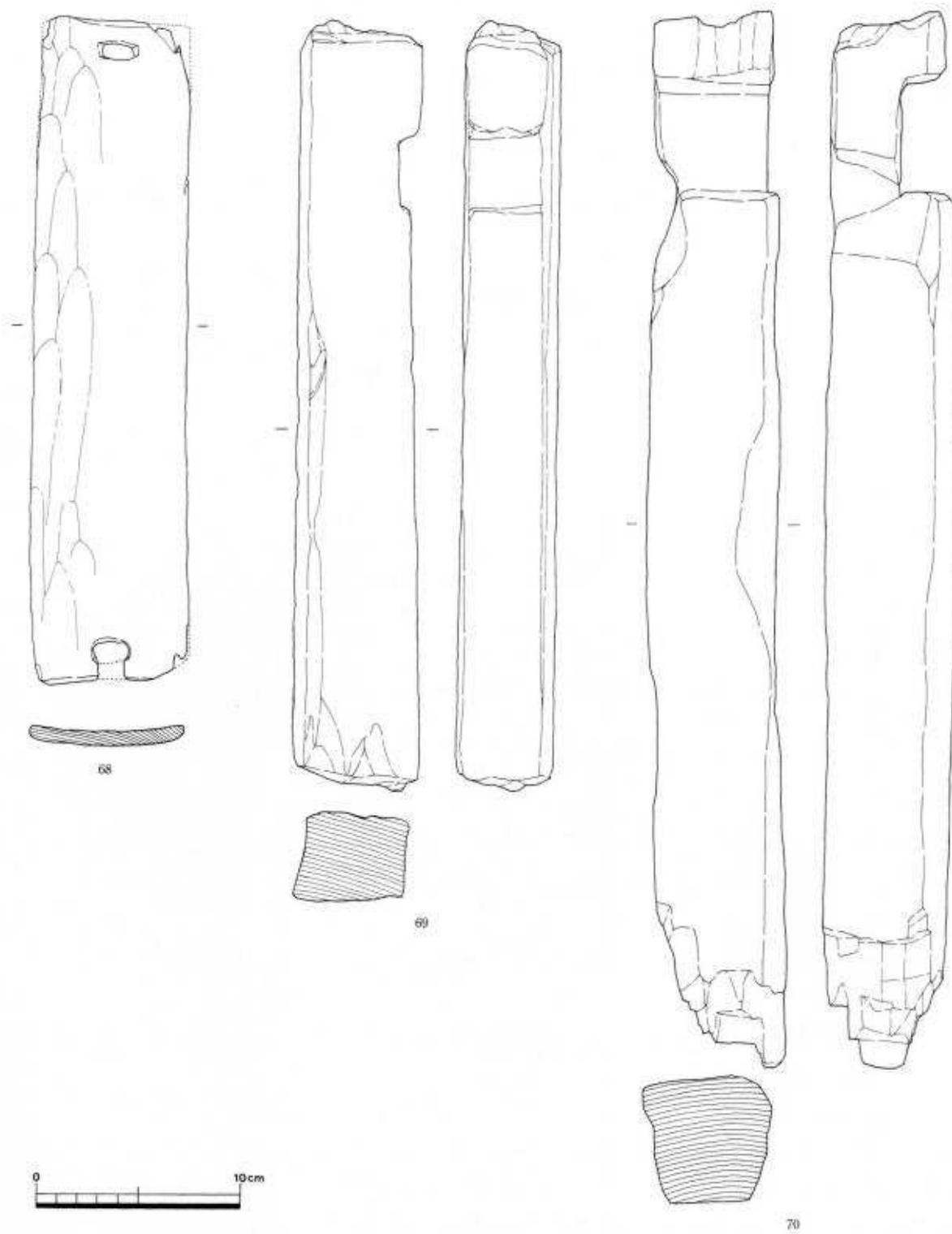
第31図 大溝B層出土木製品（その1）(S=1/3)



第32図 大溝B層出土木製品（その2）(S=1/3)



第33図 大溝B層出土木製品（その3）(S=1/3)

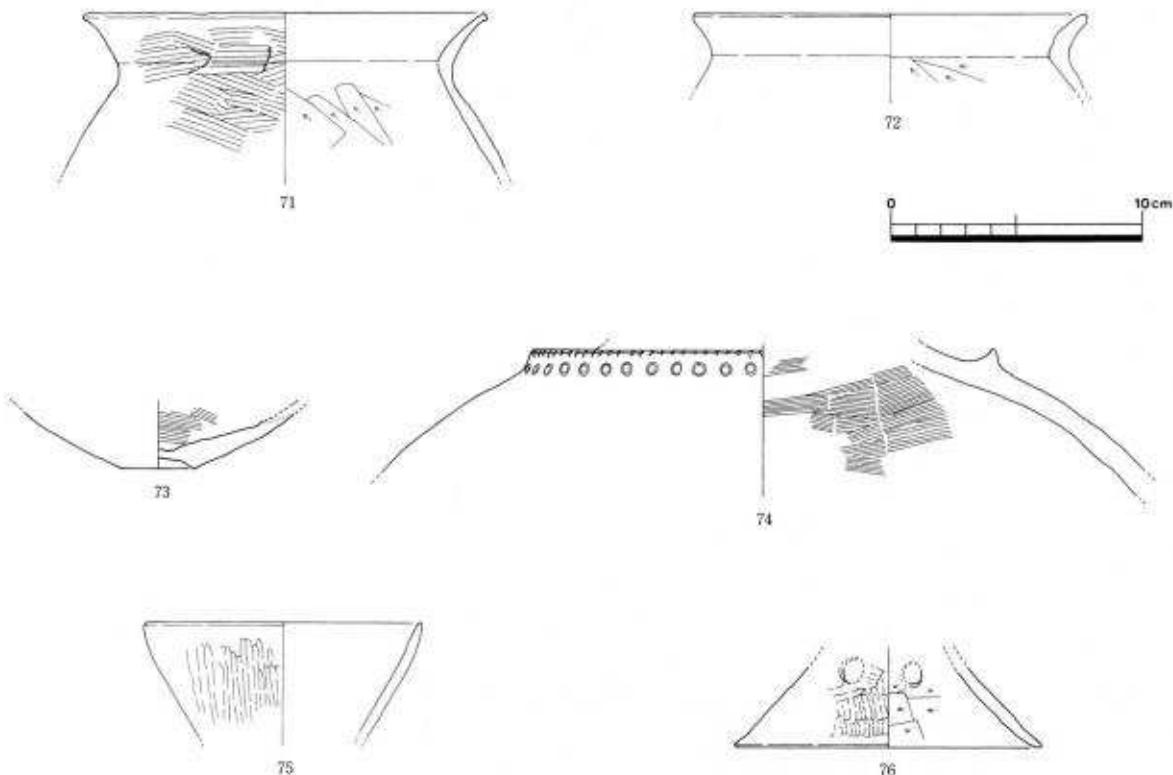


第34図 大溝B層出土木製品（その4）(S=1/3)

【木製品】(第31図～第34図)

<鍔> (59・60)

59は、身に柄が装着された状態で出土し、さらに身の柄孔より上にある泥除け具装着部分には、泥除け具の破片が付いていた。60は鍔身の頭部で、刃部は欠損。隆起部分上面の欠損が著しい。



第35図 大溝B・C層出土土器 (S = 1/3)

<泥除け具> (61)

61は泥除け具で、上部が欠損しているものである。上端が直線的な不整円形の平面形を呈し、上端に長い蟻柄を作り出したものと思われる。中央下端付近に長方形状の孔がある。

<火きり臼> (62)

62は火きり臼の一部。図の中央部（右から2つ目の孔の部分）で折れた状態で出土。

<堅杵先端転用品> (63)

63は堅杵の先端を削り取ったもの。図の下端部は粗く削り取られている。用途は不明であるが、未製品である可能性も考えられる。

<容器> (64・65)

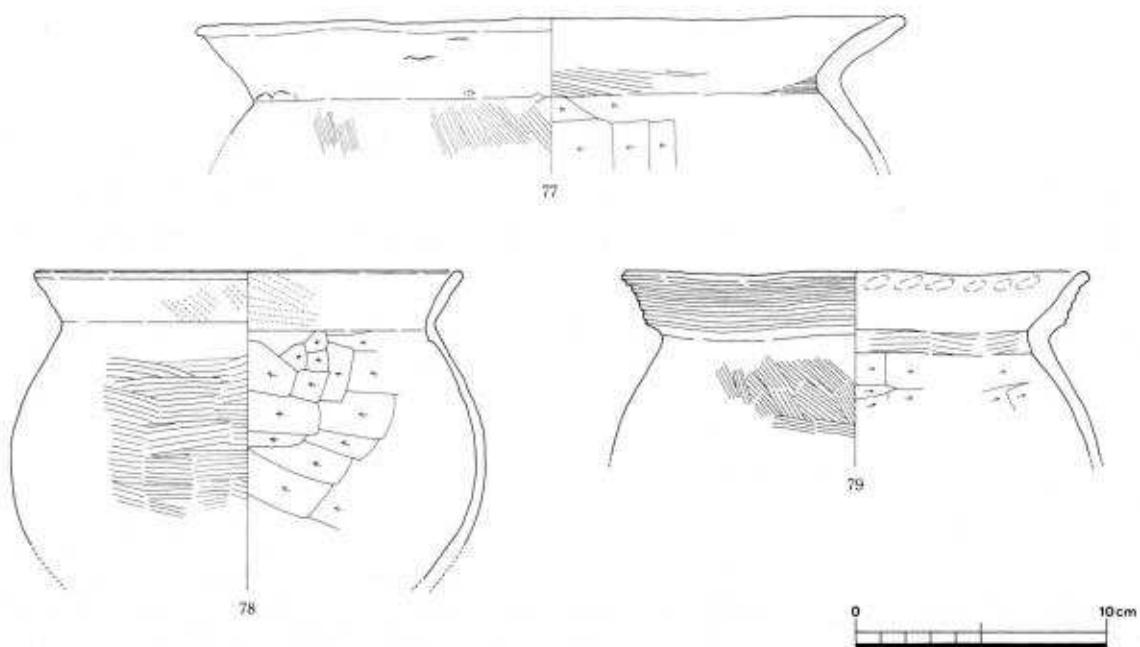
64は、断面が笠形状を呈し、端部に凹みが入れられた蓋と思われるもの一部。外面には削り加工痕が明確に見られる（内面は明確に見られない）。65は、容器の一部とするには疑問が残るが、図の下端部に斜めに入れられた面があり、四角形状に作られた容器の一部ではないかと思われるものである。図の上部左には円形の孔があり、両面には削り加工痕が見られる。

<用途不明品> (66・67)

66は、長さ約20cm、断面略円形の棒状のもので、図の上半部の断面が凹形状を呈すものである。67は、長さ約24cm、断面台形状を呈す棒状のもので、図の右側の上下両端付近に抉りが入れられたものである。いずれも上下両端は粗く削り取られている。

<部材> (68~70)

68は板状のもので、図の上下両端部分付近に長方形状の孔がある。図化した面には削り加工痕が見



第36図 大溝B・C・D層出土土器 (S=1/3)

られるが、その反対側の面では削り加工痕は明確に見られない。断面はやや反った形をしている。69・70については、図の上下両端が粗く削り取られている。

#### 【鉄製品】

大溝B層からは、土器・木製品のほか、第47図131に掲載した鉄製の鍬・鋤先が出土した。

#### 大溝B・C層出土遺物（第35図）

##### 【土器】

###### <甕>（71・72）

71・72は断面くの字状の甕口縁部で、71の口縁端部は面をもち、72の口縁端部は丸く作られている。72の口縁部は、外反度が比較的強く、短い。

###### <底部>（73）

73は凹み底の甕底部である。内面は、上から見ると、反時計回りにハケ調整されている。

###### <壺>（74）

74は、突帯が付いた大型壺の肩部。突帯の外面には連続竹管文、突帯の上端には連続刻みが入れられている。突帯より上の外面はヘラミガキされており、突帯より下の外面は、摩滅が著しく明確には調整痕が見られないが、ヘラミガキされているようである。なお、外面は赤彩されている。

###### <小型壺>（75）

75は小型丸底壺の口縁部。内面は摩滅しているが、外面にはヘラミガキ痕が見られる。

###### <脚部>（76）

76は、ハの字状に下方に開く高坏ないしは器台の脚部。残存部が小さく個数は不明であるが、円形の穿孔がある。

## 大溝B・C・D層出土遺物（第36図）

### 【土器】

#### <甕>（77～79）

77・78は断面くの字状の甕口縁部。77の口縁端部は、やや不明瞭ながら面をもち、78の口縁端部は丸く作られている。77の口縁部内外面はヨコナデされているが、口縁部内面下半にはヨコナデされる前に施されたハケ調整の痕跡が残っている。また、78の口縁部内外面ではヨコナデによって消されたハケ調整痕が薄く見られる。

79は有段口縁の甕口縁部で、口縁帶に擬凹線が施されているもの。口縁部は外傾して端部でやや外反しているが、口縁端部は丸く作られている。口縁部内面上部には指頭痕が認められる。

## 大溝C層出土遺物（第37図～第41図）

### 【土器】（第37図・第38図）

#### <甕>（80～91）

80～86は、断面くの字状の甕口縁部。80～84は口縁端部が丸く作られ、85・86は口縁端部外面に面をもつ。80の頸部下の内面は、ヘラ削りされた後にハケ調整が施されている。また、83の体部外面と口縁部内面に見られるハケ調整痕は、他のものに比べて粗い原体によってできたものである。80～84の口縁部は、頸部で屈曲した後、ほぼ外傾しながら伸びているが、85は、頸部で屈曲後、著しく外反しながら口縁部が伸びており、86は、頸部で屈曲後、やや外反しながら上方に伸び、口縁端部で外反する形となっている。また、86の口縁端部上端は、わずかながらであるが、つまみ上げられたような形を呈している。

87は断面S字状の甕口縁部である。口縁部内外面はヨコナデされている。

88～91は有段口縁の甕口縁部。88は、口縁端部が外反して先細り気味となっており、口縁帶外面はヨコナデされているが、その下端に1条の凹線が見られる。89～91は、口縁部が外反せず、端部が丸く作られており、89・90の口縁部は外傾、91の口縁部は直立している。なお、89～91の口縁帶外面はヨコナデされ、擬凹線は見られない。

#### <底部>（92～94）

92・93は甕の底部で、93については、外底面端部は平坦であるが、外底面の中央部は凹んだ形を呈している。94は、立ち上がりより上の外面がヘラミガキされていることから、壺の底部と思われる。外底面は強いヘラナデ（ヘラ削りかもしれない）が施されている。

#### <高坏>（95・96）

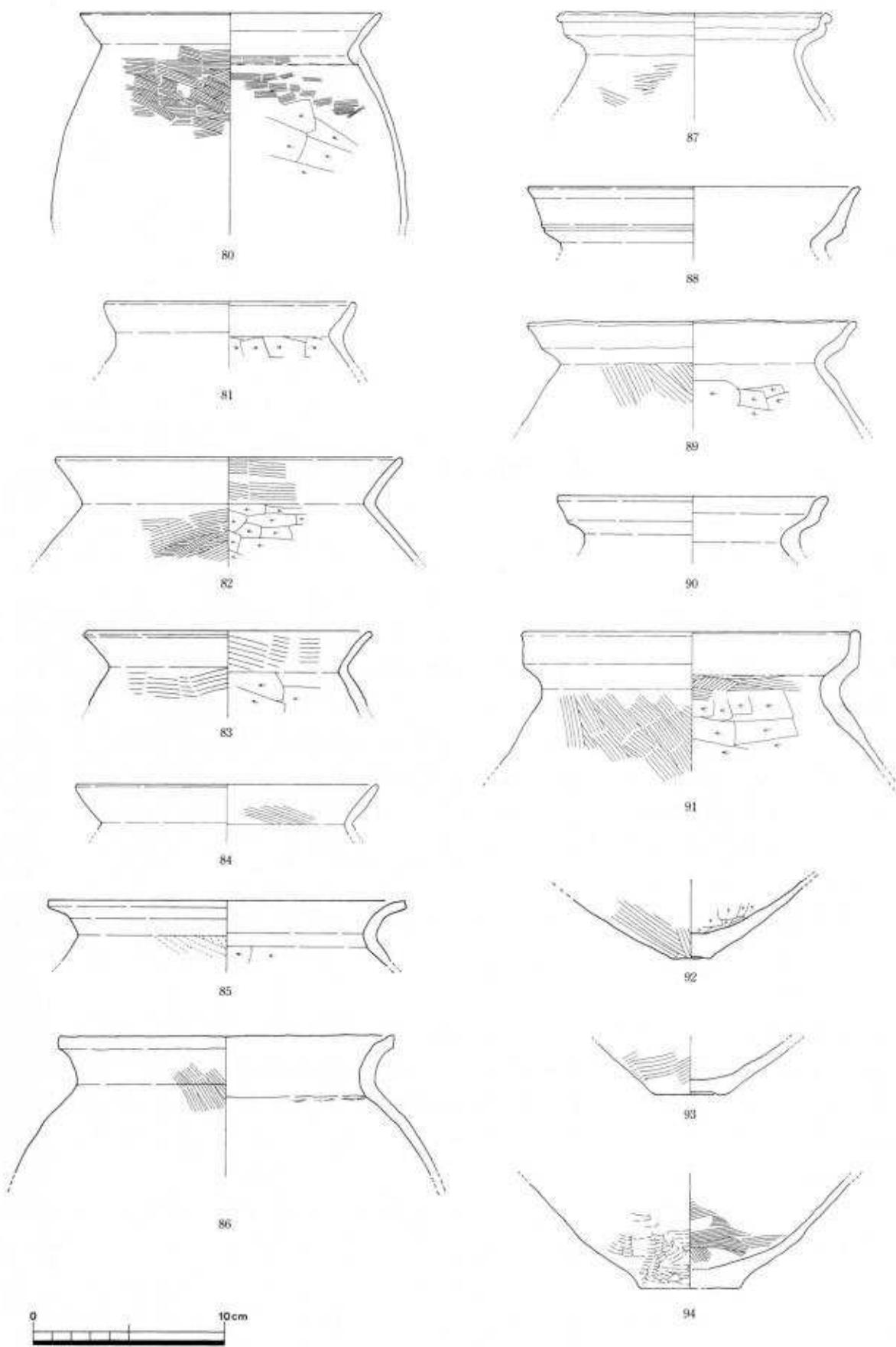
95はハの字状に下方に開く脚部に碗形の坏部が付いた高坏。口縁部のみが欠けた状態で出土した。脚部には円形の穿孔が4箇所ある。坏部内面は著しく摩滅して調整痕がほとんど見えないが、所々でヘラミガキ痕と思われるような痕跡が見られる。96は碗形の坏部に短い脚部が付いたもの。高坏としたが、脚付きの碗形土器といえるかもしれない。

#### <脚部>（97）

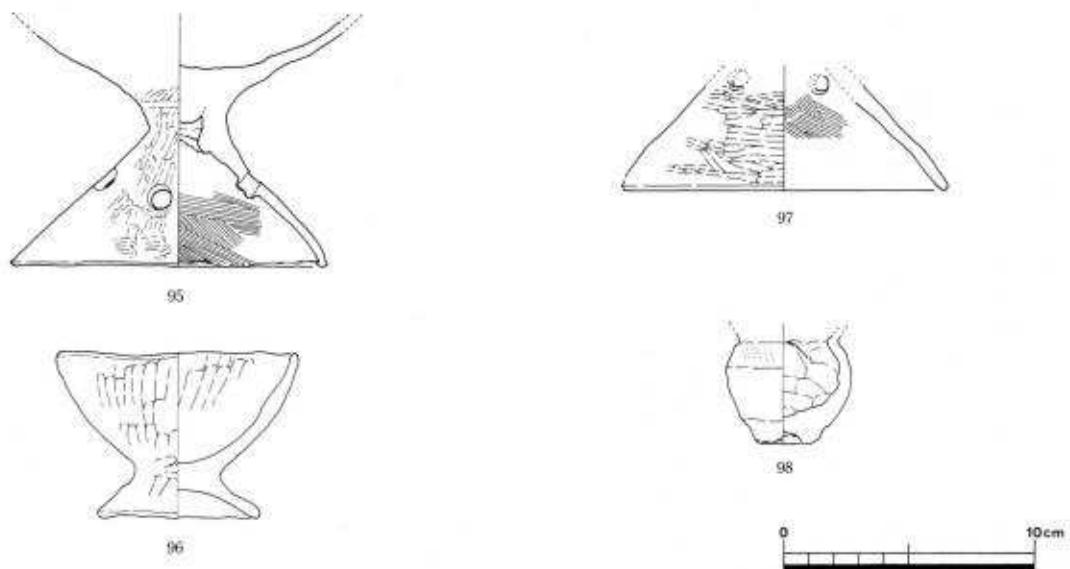
97はハの字状に下方に開く高坏ないしは器台の脚部。残存部が小さく個数は不明であるが、円形の穿孔がある。

#### <小型土器>（98）

98は、断面くの字状の口縁をもつ壺形の小型土器。体部外面は粗いナデ調整が施されているが、そのナデ調整の前に施されたと思われるハケ調整の痕跡が所々に薄く見られる。



第37図 大溝C層出土土器(その1) (S=1/3)



第38図 大溝C層出土土器（その2）（S=1/3）

【木製品】（第39図～第41図）

＜鞘＞（99・100）

99と100の鞘は2点で1つのセットをなす。いずれも鞘口の内面には、平面形が三角形状の彫り込みが見られる。剣鞘とも考えられたが、槍の鞘である可能性が高い（（財）石川県埋蔵文化財センターの林 大智氏のご教示による）。なお、この2点の鞘の外面には、白っぽくなつたスジ状の部分が見られた。99・100の各図の下に掲載してあるスクリントンの部分がその白っぽい部分であり、第39図の右に掲載してあるように、99と100とを組み合わせると、その白っぽい部分がラセンを描くようになつた。この点から、布ないしは紐状のものを全体に巻きつけて、これらの鞘は組み合せられていたのではないかと考えられる。いずれもC層の上部からほぼ完形で出土した。

＜剣形木製品＞（101）

101の剣形木製品は、C層でも床面に近い部分から出土した。図の下端部は、加工具により粗く切断されている。

＜環頭柄＞（102）

102は、棒の先端に環状のものが付いたもので、何かの柄の頭ではないかと考えられたことから、環頭柄と名づけた。C層の床面に近い部分から出土した。図の下の部分は欠損しており、何の柄かは不明であるが、祭祀的なものの柄ではないかと思われる。環状の部分を把頭とした、刀剣把装具である可能性も考えられる。

＜四方転びの箱＞（103）

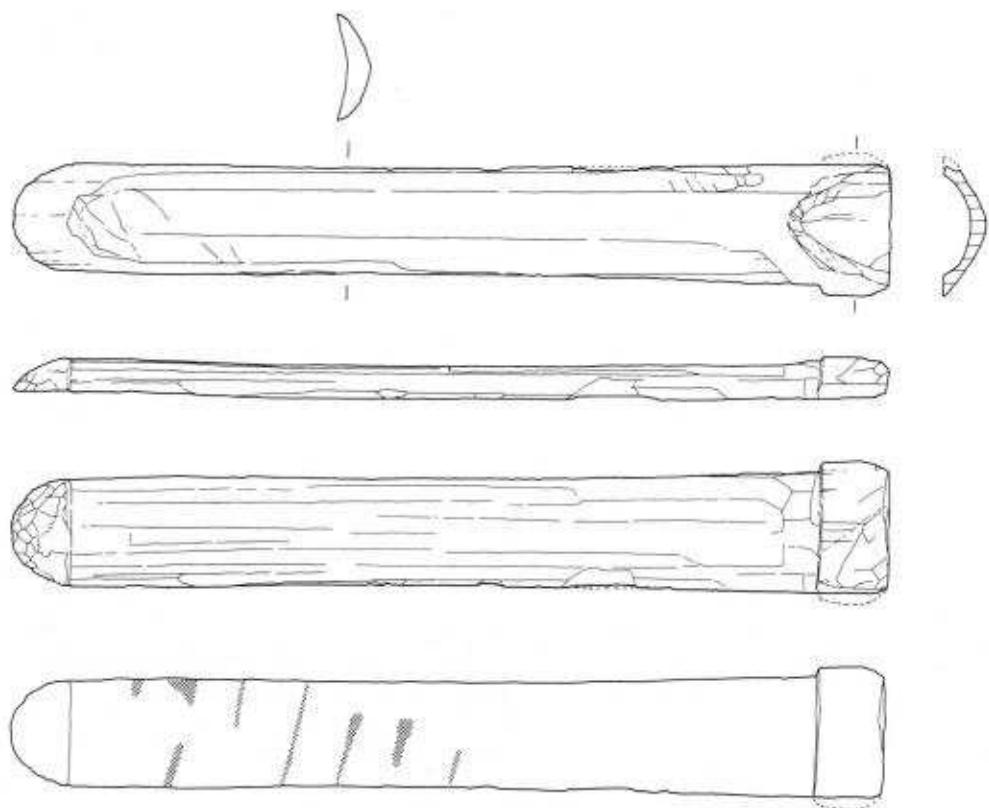
103は、四方転びの箱の側板である。片側の面（上の図の面）のみ削り加工痕が明瞭に見られ、反対側の面（下の図の面）では削り加工痕は見られない。

＜容器の把手＞（104）

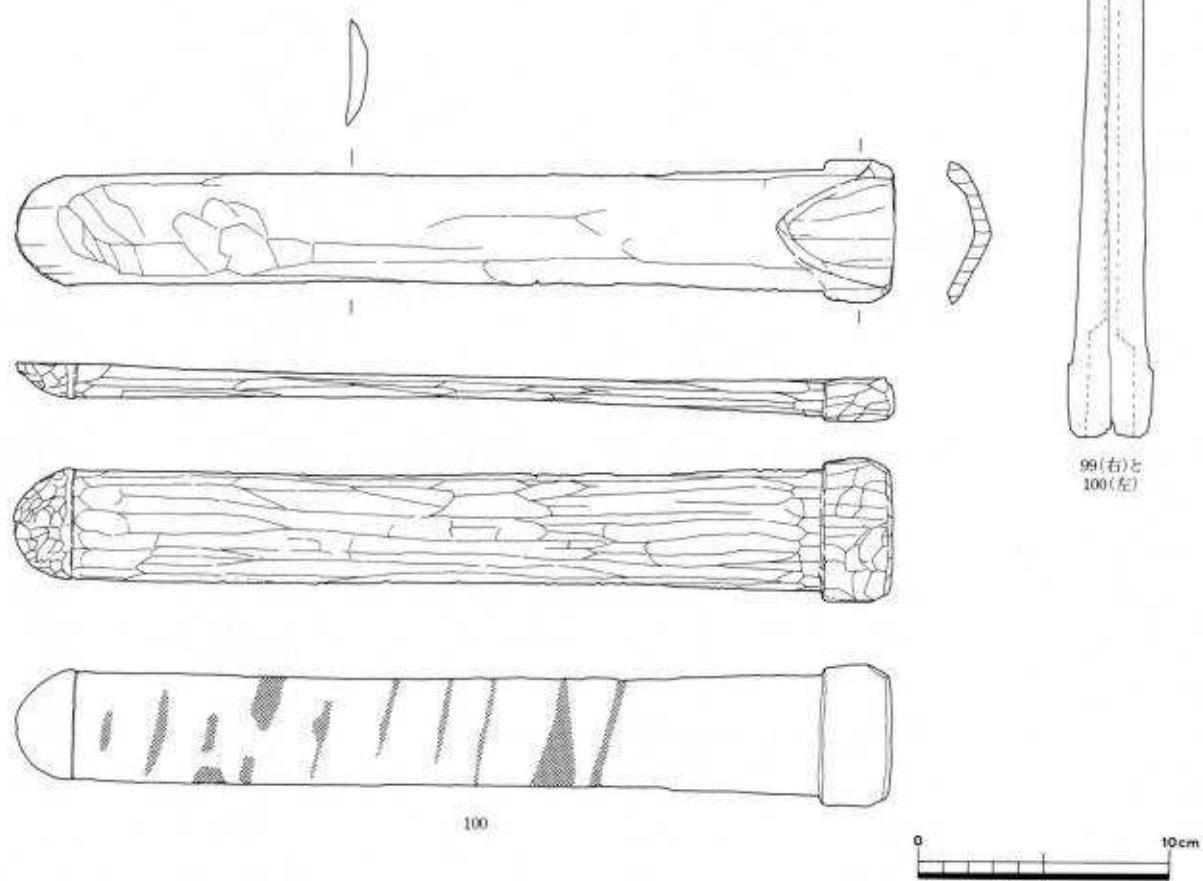
104は、ジョッキ形の容器の把手ではないかと思われるものである。

＜アカ取り＞（105）

105は、側面の立ち上がりが低く、やや疑問が残るが、アカ取りと考えられるものである。図の下



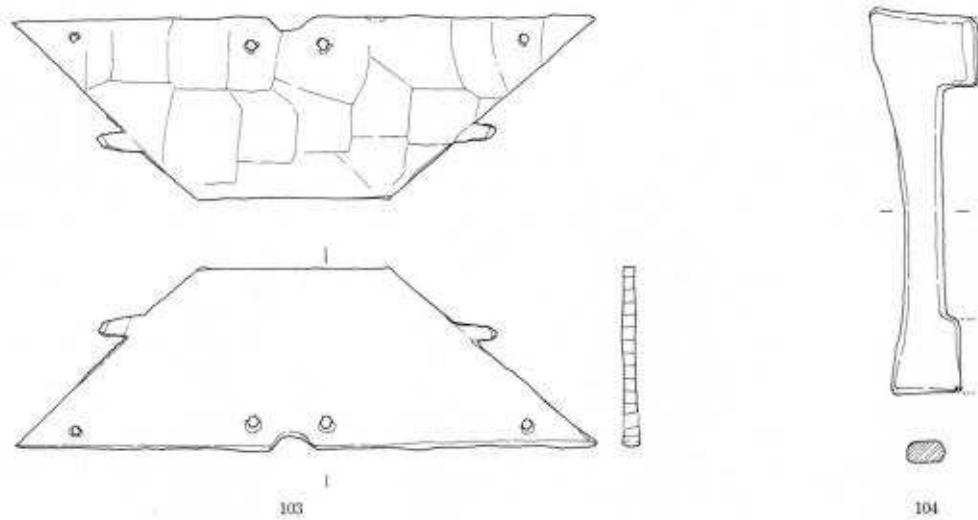
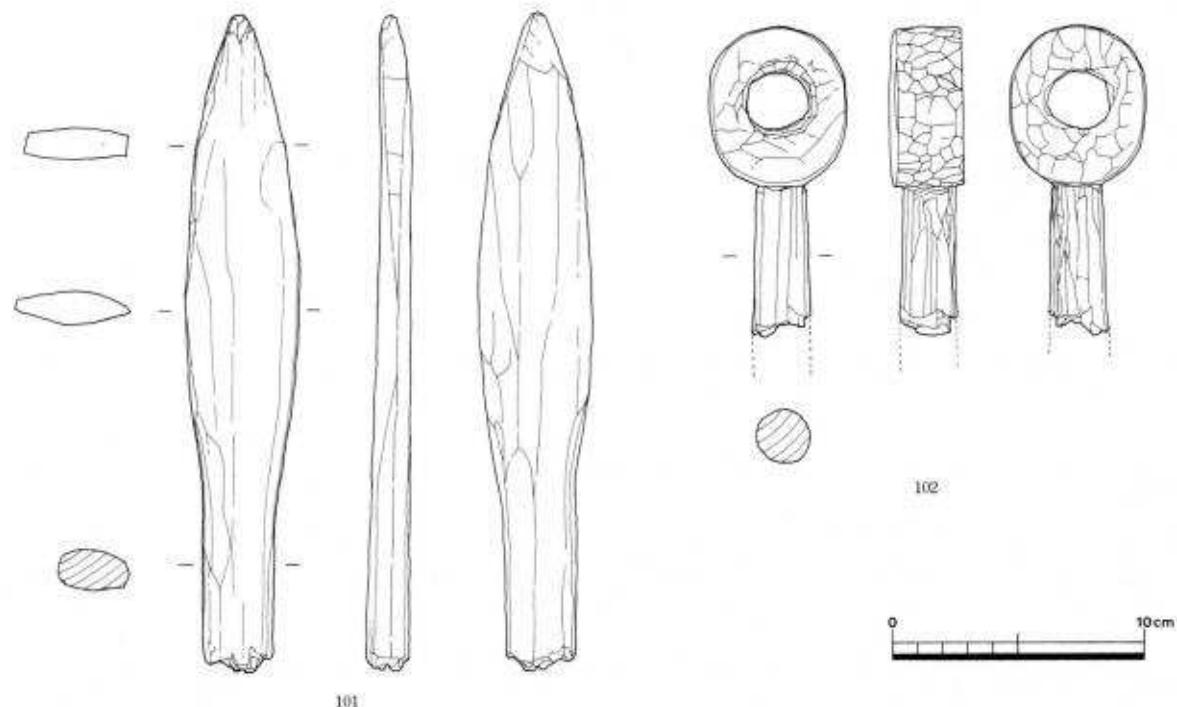
99

99(右)と  
100(左)

100



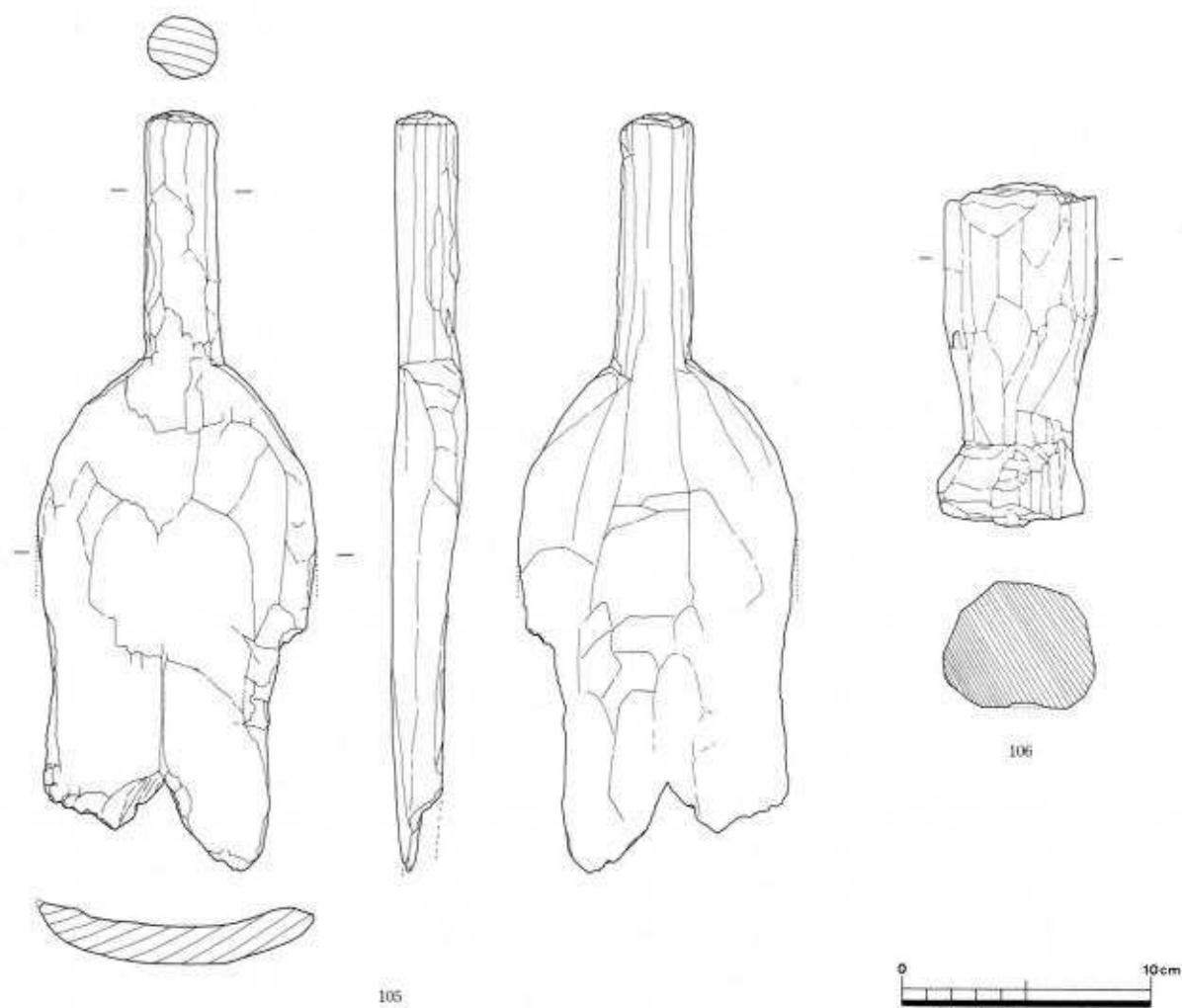
第39図 大溝C層出土木製品（その1）（S=1/3）（スクリントンは外面の白っぽい部分）



第40図 大溝C層出土木製品（その2）(S=1/3)

の部分は欠損しており、上端は、加工工具によって粗く切断されている。全体的に炭化が著しい。  
<用途不明品> (106)

106は、断面が略円形状を呈し、横から見た形が、台付きのコップ（グラス）のような形をしたものである。図の上下両端は加工工具によって粗く削り取られている。何かの未製品である可能性も考えられる。



第41図 大溝C層出土木製品（その3）(S=1/3)

#### 大溝C・D層出土遺物（第42図上段）

##### 【土器】

<甕>（107～110）

107・108は、断面くの字状の甕口縁部。いずれも口縁端部は丸く作られている。107の頸部から肩部にかけての外面は、タテ方向のハケ調整の後、ヨコナデされており、ヨコナデで消されたハケ調整痕が所々で薄く見られる。また、肩部外面は、タテ方向のハケ調整の後、概ねヨコ方向のハケ調整が施されている。また、頸部内面には指頭痕が所々に見られる。108の口縁部内外面には、ヨコナデで消されたハケ調整痕が薄く見られる。

109は受口状口縁の甕口縁部、110は有段口縁で口縁帶外面に擬凹線が施された甕口縁部である。110の口縁部は外反気味となっており、端部は先細りしている。また、口縁部内面の上半には、ヨコナデで消されたハケ調整痕が薄く見られ、指頭痕ではないかと思わせるような、非常に緩やかな凹凸もある。

<壺>（111）

111は東海系壺の口縁部。口縁部外面にある棒状浮文は3本1組で3箇所ある。頸部外面にある突帯

の端部と口縁端部外面には、ハケ状具で施された連続刻みが入れられている。また、口縁部内面のやや下がったところでは、連続羽状文が見られる。

#### 大溝D層出土遺物（第42図下段・第43図）

以下の「大溝D層出土遺物」としたものは、大溝C層の床面より出土したものとして把握していただきたい。

##### 【土器】（第42図下段）

###### <甕>（112・113）

112は断面くの字状の甕口縁部。口縁部は比較的短く、外反ぎみとなっており、口縁端部は先細りぎみである。頸部外面には、頸部下のハケ調整によってできた粘土の盛り上がりが見られ、それを消すかのように、ヘラ削り痕が一部で見られる。口縁部内外面には、ヨコナデで消されたハケ調整痕が薄く残っている。

113は有段口縁状の甕口縁部。口縁部内面には段がなく、口縁帶外面下端を膨らませて段を作ったような形をしている。口縁端部は丸い。

###### <高坏>（114・115）

114は、小さな碗形の坏部に八の字状に開く脚部が付いた小型高坏である。脚部には円形の穿孔が4箇所ある。115は、八の字状に開く脚部をもつ高坏の脚基部である。碗形を呈する坏部が付くものと思われる。脚部には円形の穿孔が3箇所ある。

###### <器台>（116・117）

116は古墳時代前期に見られる小型器台である。外面と受部内面は入念にヘラミガキされている。脚部には円形の穿孔が4箇所ある。117も小型器台で、その脚基部である。脚部には円形の穿孔が3箇所ある。

##### 【木製品】（第43図）

###### <組合せ鋤の柄>（118）

118は組合せ鋤の柄と考えられるもので、図の上部にある断面半円形状の部分に鋤身が装着されていたものと思われる。断面半円形状の部分で割れて出土し、図の下の部分は欠損していた。

###### <火きり臼>（119）

119は火きり臼である。図の上下両端は欠損している。

###### <木錘>（120）

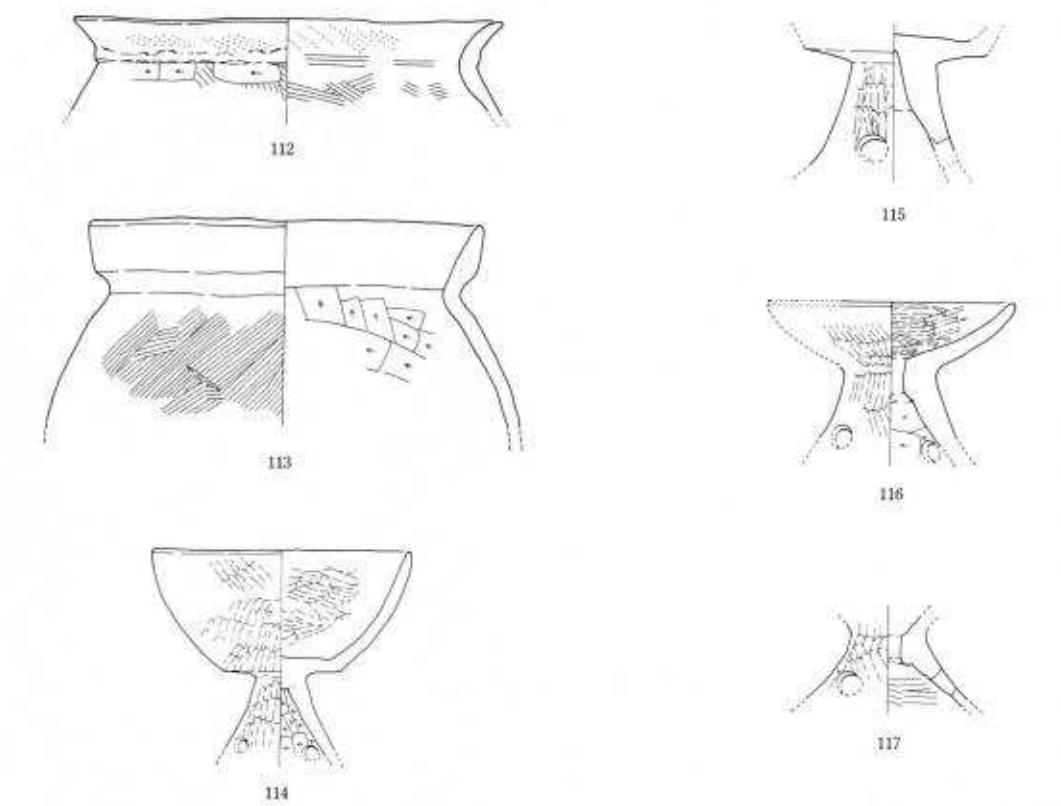
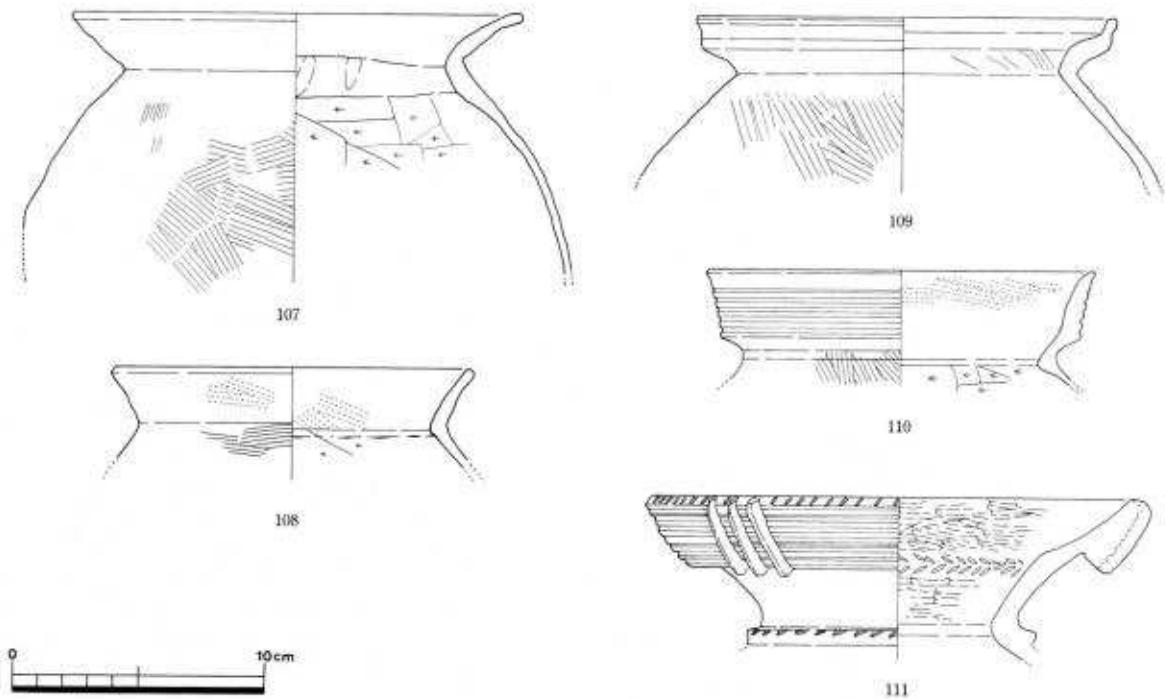
120は木錘である。完形となって出土した。中央にめぐる細い溝の部分と図の上下両端は粗く削り取られている。図に示したスクリントンの部分には樹皮が付着していた。

###### <用途不明品>（121・122）

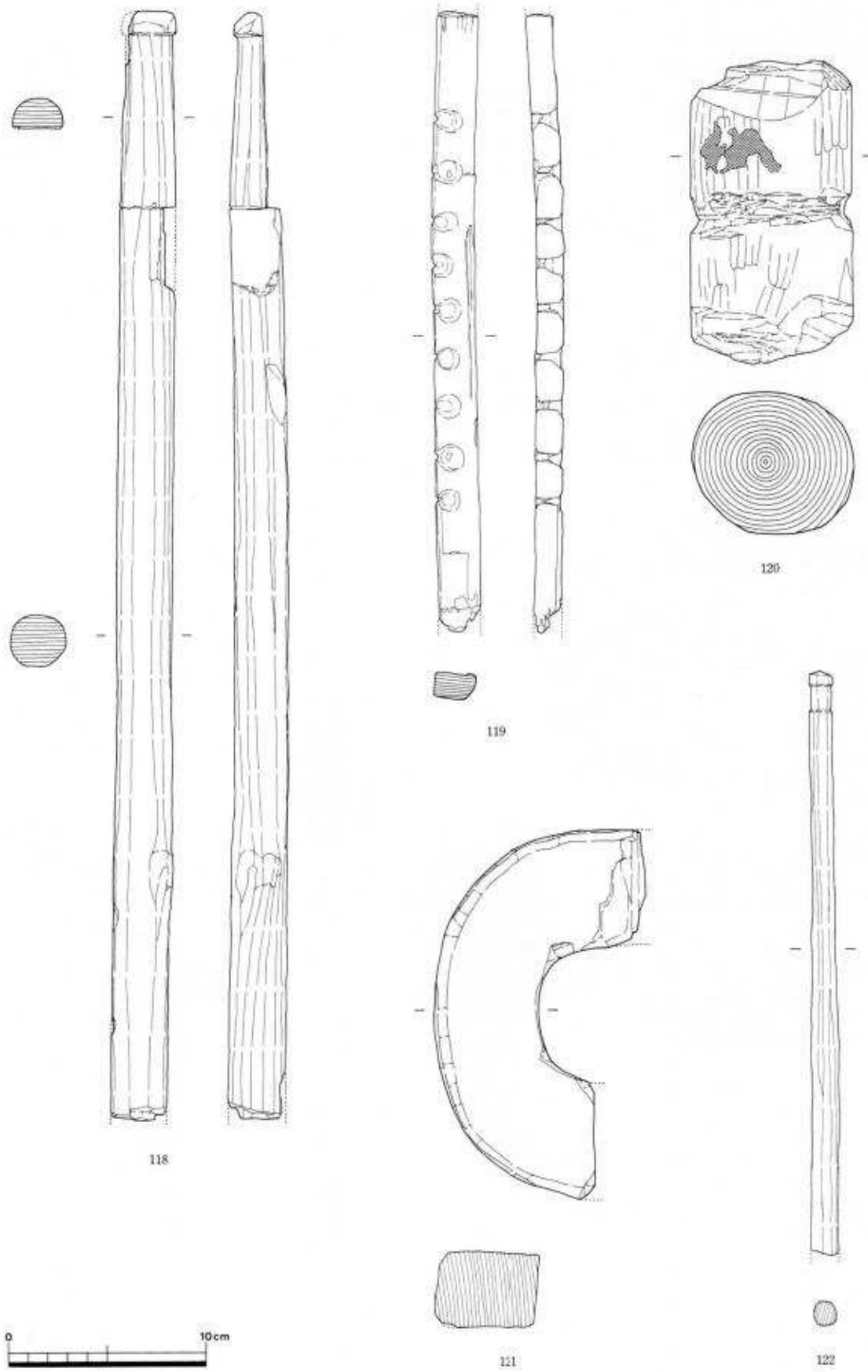
121は、環状の形を呈し、断面が四角形状のもので、半分が欠損しているものである。122は、断面円形状の棒で、先端付近（図の上の部分）の側面に凹みを入れて、有頭棒状にしたものである。図の下の部分は欠損している。

##### 【石製品】

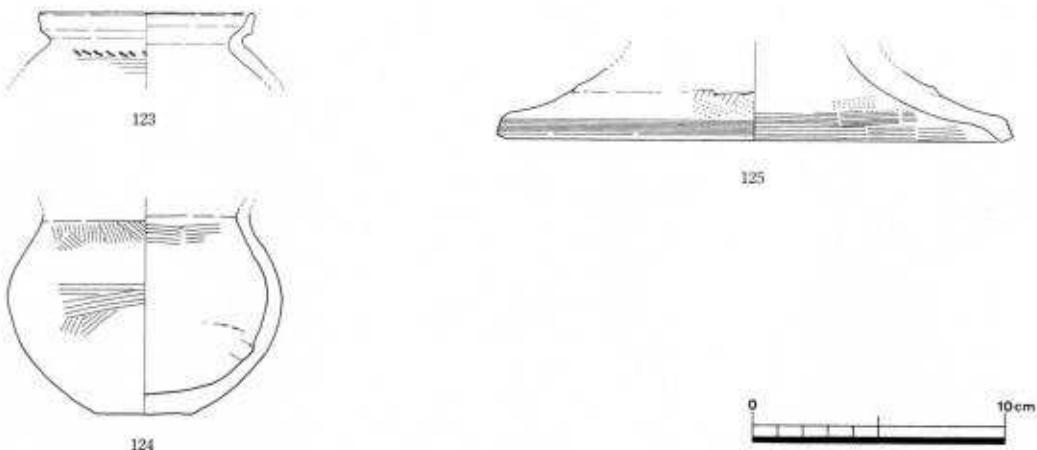
土器・木製品以外に第48図掲載した砥石2点（135・136）が出土した。



第42図 大溝C・D層（上段）およびD層（下段）出土土器（S=1/3）



第43図 大溝D層出土木製品 ( $S = 1/3$ )



第44図 大溝E層出土土器 (S=1/3)

#### 大溝E層出土遺物（第44図）

##### 【土器】

<小型壺>（123・124）

123は、有段口縁状の小型壺の口縁部。肩部にはハケ状具による連続斜行刻みが見られる。124は、平底をもつ小型壺の体部。体部下半外面は、ハケ調整の後、不整方向のナデ調整が施されている。外底面はハケ調整されている。

<脚部>（125）

125は、高坏ないしは器台の脚端部である。脚端部外面の面には擬凹線が施されている。また、脚部外面に接合痕が見られるが、その接合痕より下にあるハケ調整痕を覆い被せるようにして、接合痕より上にある粘土が付いている。

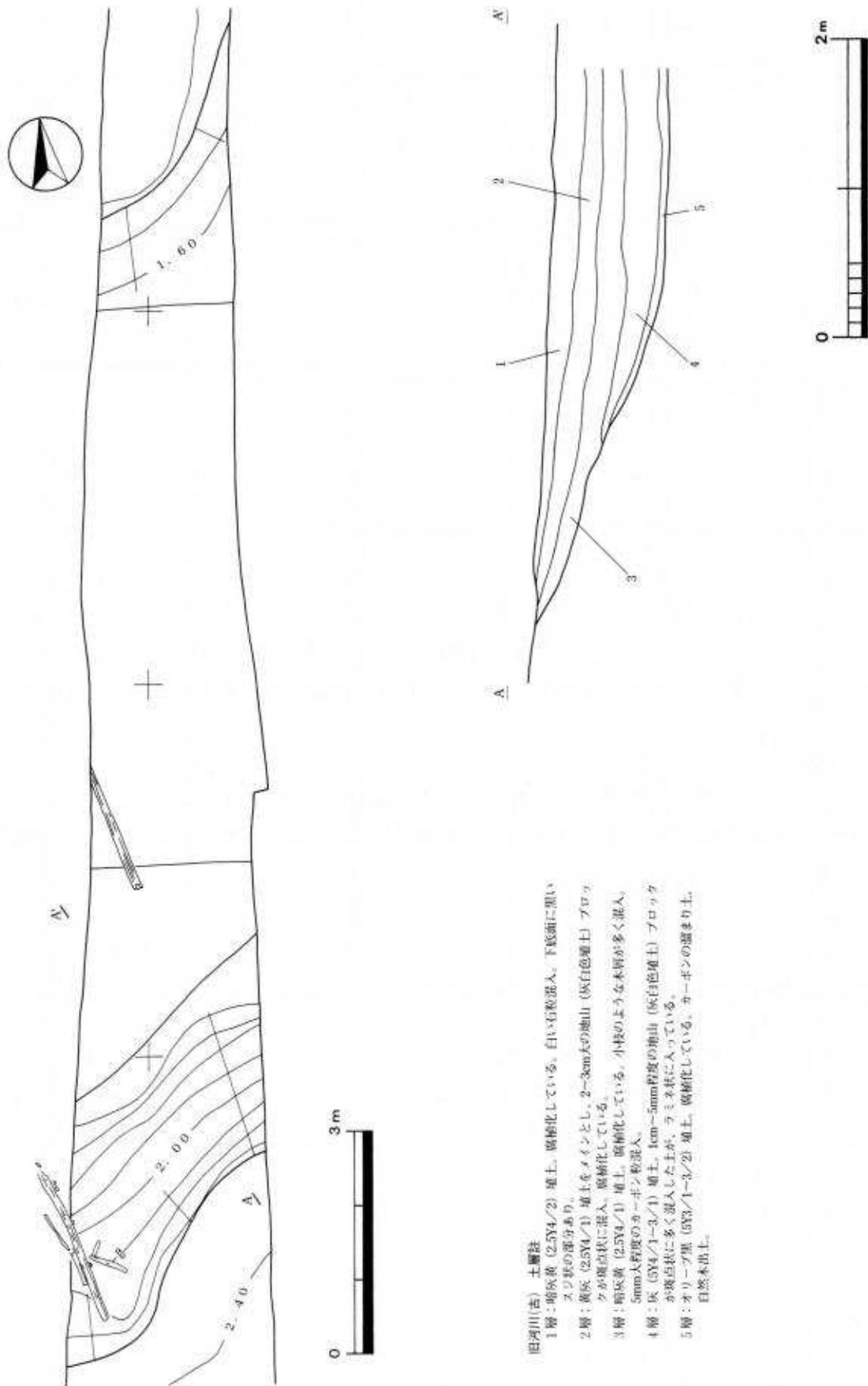
以上、大溝の出土遺物について見てきたが、各層の時期について見てみると、E層は、出土土器が少なく、明確な時期については不明、D層は無遺物層である。B層・C層については、層間接合できる土器があり、この2つの層は時期的に1つにまとめることができる。B層・C層の時期については、B層・C層・D層（C層床面）出土土器から判断することとなるが、これらの土器は1つの時期にまとめられるような一括資料としての性格は弱い。混入品と判断されるような比較的古い時期に位置付けられるものを除けば、B層・C層・D層（C層床面）出土土器は、概ね漆町編年6群期～8群期頃と時期幅をもっている。無遺物層であるD層が堆積した後、比較的長い期間にわたって、この大溝への土器・木製品などの投・廃棄が継続的に行なわれていたと思われる。

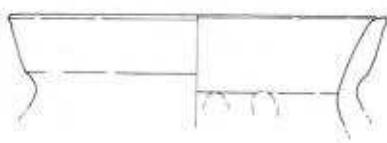
#### 第6節 旧河川

##### 旧河川（古）（第45図・第46図（126・127））

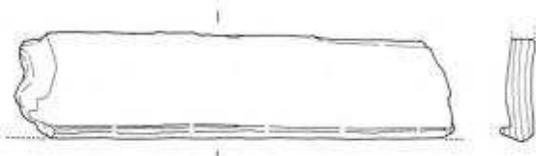
第40～第43グリッドに位置。概ね北東から南西方向に流れる。調査区域の幅が約5mと狭く、深く掘削して完掘するのは危険であったため、この河川跡の中央部の完掘は断念している。よって、下底面までの深さは不明であるが、検出面から80cm以上の深さはあった。幅については、北側の部分が旧河

第45図 旧河川(古) 平面図 ( $S = 1 / 80$ )・土層断面図 ( $S = 1 / 40$ ) ( $H = 2.500\text{m}$ )





126



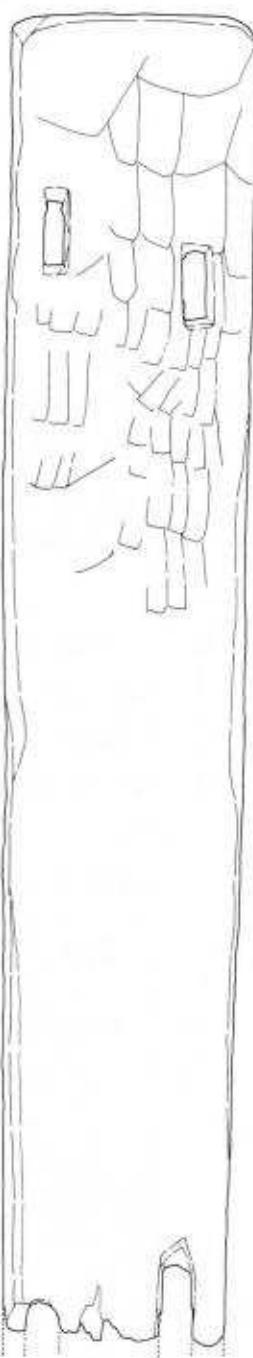
127



128



129



130

第46図 旧河川（古）（126・127）・旧河川（新）（128～130）出土遺物（S=1/3）

川（新）に切られており、明確な幅は不明であるが、12m以上はある。

土層断面については、第45図に掲載した南側肩部の土層断面図、第10図下から1段目および第11図上から1・2段目にある調査区域東側壁面の土層断面図を参照していただきたい。調査区域東側壁面の土層断面図における26～29層が旧河川（古）の覆土であり、26層が第45図にある土層断面図の1層、27層が2層、28層が5層に対比する。

遺物は、土器片と木製品がごく少量、磨製石斧片1点が出土するのみであった。遺物のはほとんどは、第45図の1層（調査区域東側壁面の土層断面図にある26層）から出土しており、それより下の層では、遺物がほとんど出土しないという状況であった。

126は、断面くの字状の甕口縁部。頸部内面に指頭痕がある。127の木製品は、用途不明品の木片で、図の下側の部分が断面L字状をなす。磨製石斧片については、第47図（134）に掲載してある。

旧河川（古）の時期については、出土遺物が少なく、不明である。

#### 旧河川（新）（第46図（128～130））

第29～第40グリッドに位置。概ね東西方向に流れていたものと思われる。平面図については、第6図に掲載した全体平面図を参照していただきたい。南北両側の立ち上がりは明確でなく、非常に緩やかな落ち込みのようになっていた。土層断面については、第10図に掲載した調査区域東側壁面の土層断面図を参照していただきたいが、その図にある25-1層と25-2層がこの河川跡の覆土である。第10図下から1段目にある土層断面図にあるように、この旧河川（新）の覆土が旧河川（古）の覆土（26層・28層）を切っており、その名のとおり、旧河川（新）は旧河川（古）より新しいことが確認された。なお、旧河川（新）の深さと幅は、土層断面図から判断して、深いところで約50cmの深さがあり、約40mほどの幅がある。

遺物については、ごく少量の土器片と木製品が出土したのみである。128は高壙の壙底部である。内外面が入念にヘラミガキされている。129・130は木製品で、129は、断面円形状の棒で、図の上端が凸形となっているものである。図の下の部分は欠損している。用途不明品である。130は、板状のもので、図の上部と下端部（下の部分は欠損している）に長方形形状の孔が2箇所ずつある。両面には削り加工痕が見られる。部材の一部と考えられる。

旧河川（新）の時期については、出土遺物が少なく、不明である。

### 第7節 土器・木製品以外の出土遺物

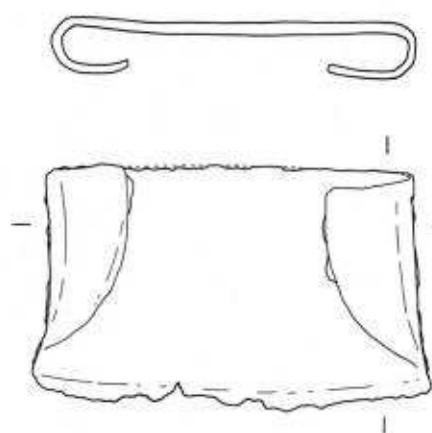
第2節～第6節で掲載すべきであったが、図版の縮尺等の都合から、別に節を設けて、土器・木製品以外の出土遺物について見ていくこととした。

#### 【鉄製の鋤・鋤先】（第47図131）

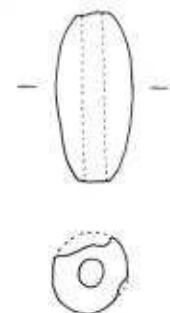
大溝のB層より出土。略完形で出土しており、刃部では刃こぼれが多数認められる。中央部の厚みは約3mmと比較的厚めで、折り曲げた箇所や端のほうでは厚みが減少している。袋部整形の際に叩き延ばしを行なっていた可能性が考えられる。

#### 【土錘】（第47図132）

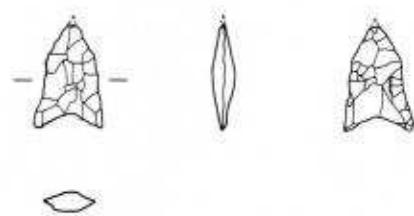
ミゾ10より出土した。長さ約4.5cm、最大幅が約2cmある。山本直人氏による土錘の分類（山本1986）においてIc類（側縁部が膨らむ形態で、長さが幅の2倍より長く、3倍より短いもの）に分類され、古代のものではないかと考えられる。



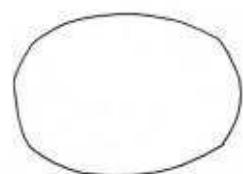
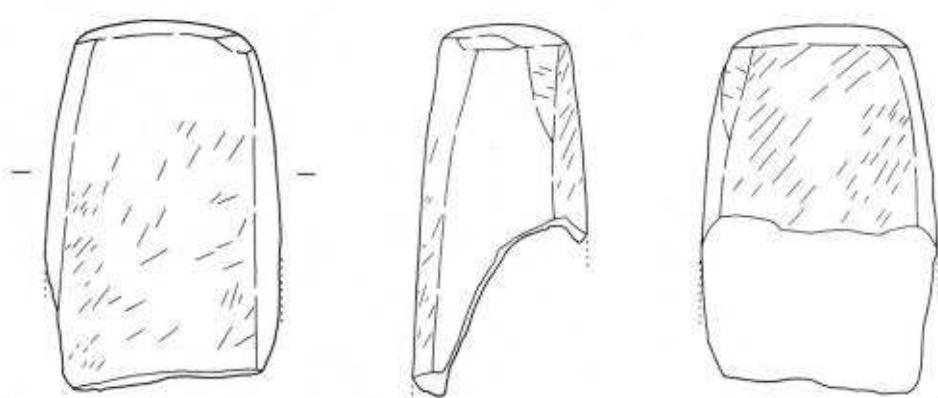
131



132

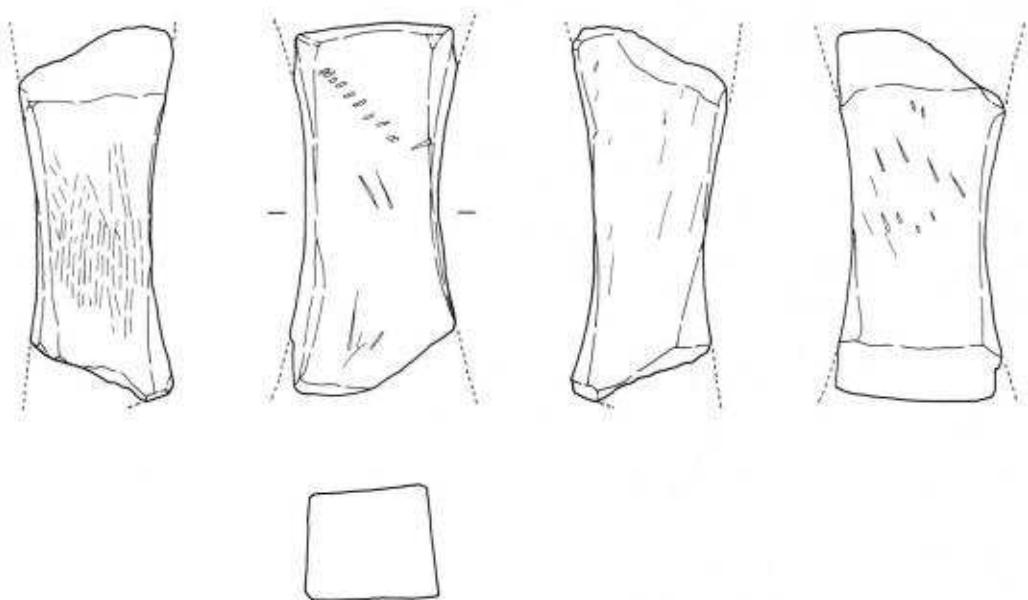


133

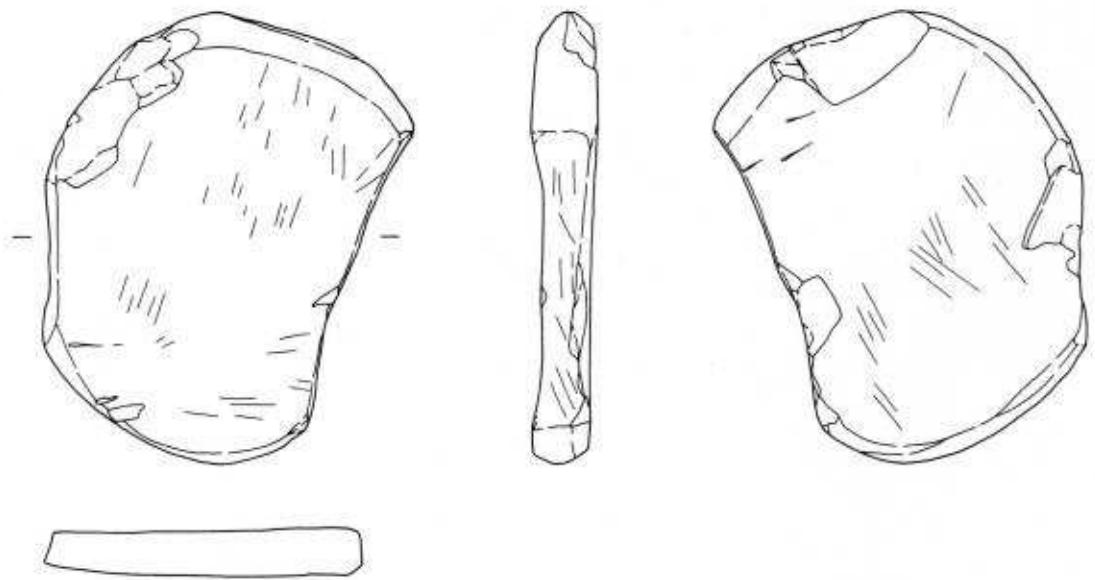


134

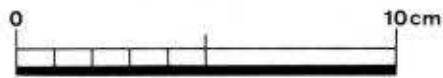
第47図 土器・木製品以外の出土遺物（その1）(S=1/2)



135



136



第48図 土器・木製品以外の出土遺物（その2）(S=1/2)

**【石鎌】(第47図133)**

ミゾ1より出土。略完形で出土したが、先端部は欠損している。左右両辺が平行するような五角形状の平面形を呈したもので、先端部角は約60°ある。

**【磨製石斧】(第47図134)**

旧河川(古)より出土。磨製石斧の基部と思われるもので、刃部は欠損している。

**【砥石】(第48図135・136)**

いずれも大溝のC層床面から出土した(第5節で「大溝D層出土遺物」としたもの)。135は断面四角形の棒状のもので、中央部が細くなった形を呈するものである。図の上下両端は欠損している。すべての側面において使用痕が認められる。136は板状のもので、両面に使用痕が認められ、さらに、左の図における右側の側面(中央の図の面)にも使用痕が認められる。

**引用参考文献**

- 田嶋明人 1986 「IV考察—漆町遺跡出土土器の編年的考察—」『漆町遺跡I』 石川県立埋蔵文化財センター  
山本直人 1986 「石川県における古代中世の網漁業の展開」『石川考古学研究会々誌』第29号 石川考古学研究会  
奈良国立文化財研究所 1993 「木器集成図録 近畿原始篇」

## 第5章 出土木製品の樹種同定結果

今回の調査で出土した木製品の一部については、平成13年度・14年度において、(株)東都文化財保存研究所に委託して樹種同定を行なった。本章は、その樹種同定結果を報告するものである。

樹種同定を行なった木製品は、第4表・第5表に掲げたもので、平成13年度・14年度とも7点ずつ、計14点の樹種同定を行なった。ただし、平成13年度に樹種同定を実施した試料番号6の鍬（第31図59）については、身、柄、泥除け具の各部があり、それぞれについて樹種同定を行なった。よって、樹種同定を行なった合計点数は16点である。

第4表 平成13年度 樹種同定実施の木製品

試料番号	遺物名	出土遺構名	本書掲載図版	本書遺物番号
1	剣形木製品	大溝C層	第40図	101
2	四方転びの箱の側板	大溝C層	第40図	103
3	環頭柄	大溝C層	第40図	102
4	アカ取り	大溝C層	第41図	105
5	鞘	大溝C層	第39図	99・100
6	鍬	大溝B層	第31図	59
7	泥除け具	大溝B層	第32図	61

第5表 平成14年度 樹種同定実施の木製品

試料番号	遺物名	出土遺構名	本書掲載図版	本書遺物番号
1	火きり臼（1）	大溝D層（C層床面）	第43図	119
2	火きり臼（2）	大溝B層	第32図	62
3	木錘	大溝D層（C層床面）	第43図	120
4	鍬	大溝B層	第32図	60
5	組合せ鍬の柄	大溝D層（C層床面）	第43図	118
6	堅杵先端転用品	大溝B層	第33図	63
7	容器の把手	大溝C層	第40図	104

樹種同定の方法については、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作成してガム・クローラル（抱水クローラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製。作製したプレパラートを生物顕微鏡で観察・同定した。

樹種同定の結果は、第6表・第7表に示したとおりで、針葉樹2種類（スギ・ヒノキ）と広葉樹4種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属アカガシ亜属・トリネコ属・シキミ）に同定された。

主な解剖学的特徴を以下に記す。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は、仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材

第6表 平成13年度 樹種同定結果

試料番号	遺物名	本書掲載図版・遺物番号	樹種	顕微鏡写真
1	剣形木製品	第40図101	スギ	
2	四方転びの箱の側板	第40図103	スギ	
3	環頭柄	第40図102	ヒノキ	
4	アカ取り	第41図105	スギ	写真図版1-1
5	鞘	第39図99・100	ヒノキ	写真図版1-2
6	鍬	第31図59	コナラ属アカガシ亜属	
	身	◆	トリネコ属	写真図版2-5
	柄	◆	コナラ属アカガシ亜属	写真図版2-4
7	泥除け具	第32図61	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	写真図版1-3

(注) 平成13年度に樹種同定を行なった本製品の顕微鏡写真については、卷末の写真図版1および2に掲載してある。

第7表 平成14年度 樹種同定結果

試料番号	遺物名	本書掲載図版・遺物番号	樹種	顕微鏡写真
1	火きり臼(1)	第43図119	スギ	
2	火きり臼(2)	第32図62	スギ	写真図版3-1
3	木錘	第43図120	シキミ	写真図版3-3
4	鍬	第32図60	コナラ属アカガシ亜属	写真図版3-2
5	組合せ鍬の柄	第43図118	スギ	
6	堅杵先端転用品	第33図63	コナラ属アカガシ亜属	
7	容器の把手	第40図104	スギ	

(注) 平成14年度に樹種同定を行なった木製品の顕微鏡写真については、卷末の写真図版3に掲載してある。

部の幅は比較的広い。樹脂細胞は晩材部を中心に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

#### ・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は、仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型~トウヒ型で、1分野に1~3個。放射組織は単列、1~15細胞高。

#### ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら単独で放射状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は单穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織がある。

・トリネコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

環孔材で、孔圈部は2～3列、孔圈外でやや急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または2個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は单穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1～4細胞幅、1～40細胞高。

・シキミ (*Illicium anisatum* L.) シキミ科シキミ属

試料は柾目面が作成できなかった。散孔材で管壁厚は中庸～薄く、横断面では多角形、単独または2～4個が複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性Ⅱ～Ⅰ型、1～2細胞幅、1～20細胞高。

## 第6章 まとめ

今回の調査は、幅約5m、長さ約280mという、いわばトレンチ（溝）状の調査区域を調査したもので、今回の調査結果のみによって、千代・能美遺跡全体の評価を行なうのは限界がある。よって、遺跡全体の評価については、今回の調査地の隣接地で9,000m<sup>2</sup>の調査を行なった（財）石川県埋蔵文化財センターによる報告を待つこととし、ここでは、今回の調査で検出された大溝における遺物の出土状況について、ある点が考えられたので、その点に触れて、まとめとしたい。

大溝における層ごとの遺物の出土状況については、第4章第5節で述べたが、B層（19-1層）・C層（19-2～5層）から大溝出土遺物のほとんどが出土、D層（20～22層）は無遺物層、E層からはごく少量の土器片が出土するのみであった。B層・C層は、層間接合できる遺物がある点から時期的に1つにまとめられ、漆町編年6～8群期頃と時期幅をもつ。D層が堆積した後、比較的長い期間にわたって、大溝に土器・木製品などが継続的に投・廃棄されていたのではないかと考えられた。

平面的な遺物の出土状況については、第26図（本書41ページ）の遺物出土状況図にあるとおりである。なお、出土遺物のほとんどはB層・C層出土遺物であるので、この図はB層・C層における遺物出土状況図として把握していただきたい。

その遺物出土状況図について見ると、大溝の中央部から南側の肩部では、主だった遺物として、組合せ鋤の柄（118）・豎杵先端転用品（63）・泥除け具（61）・容器の蓋（64）・鍬（59）・鉄製の鍬・鋤先（131）が出土し、大溝の北側の肩部では、アカ取り（105）・剣形木製品（101）・環頭柄（102）・木錘（120）・火きり臼（119）が出土している。また、出土状況図には記載されていないが、調査担当者の話によれば、北側の肩部に土器片が集中していたとのことである。

この平面的な出土状況から、ある点が見出されると考えられる。大溝の中央部から南側の肩部においては、概ね農具類が出土しているが、これに対し北側の肩部では、農具類は見られず、出土した遺物のなかに、祭祀具である剣形木製品、祭祀具とは断定できないが、その可能性が考えられる環頭柄が出土している。また、北側の肩部においては、土器片が集中しており、これは、5世紀後半以前における水辺の祭祀形態（川岸の斜面や溝・川底に多量の遺物が見られる祭祀形態で、祭祀遺物は少なく、土師器や須恵器が多く使われる・出原1990）を示す可能性が考えられる。すなわち、大溝の北側肩部においては、祭祀的色彩が見られるのではないかと考えられるのである。

ここで注目すべき点は、大溝の北側肩部が、（財）石川県埋蔵文化財センターの調査において首長居館の西区画とされた区域に接しているという点である。つまり、祭祀的色彩が考えられる大溝の北側肩部に接した西区画は、祭祀的な要素をもつ区画ではないかと考えられるのである。（財）石川県埋蔵文化財センターの報告を待たずして西区画の性格を結論付けるのは、早急すぎる感もあるが、西区画の性格を論ずる際の一視点としていただきたい。

以上で、今回の千代・能美遺跡発掘調査の報告を終わることとするが、この報告において検討不十分な点もあるかと思う。厳しいご指摘・ご教示を賜れば幸いに存じる。最後に、今回の発掘調査・出土品整理・報告書作成に際し、ご協力いただいた多くの方々に深く感謝申し上げ、終わることとする。

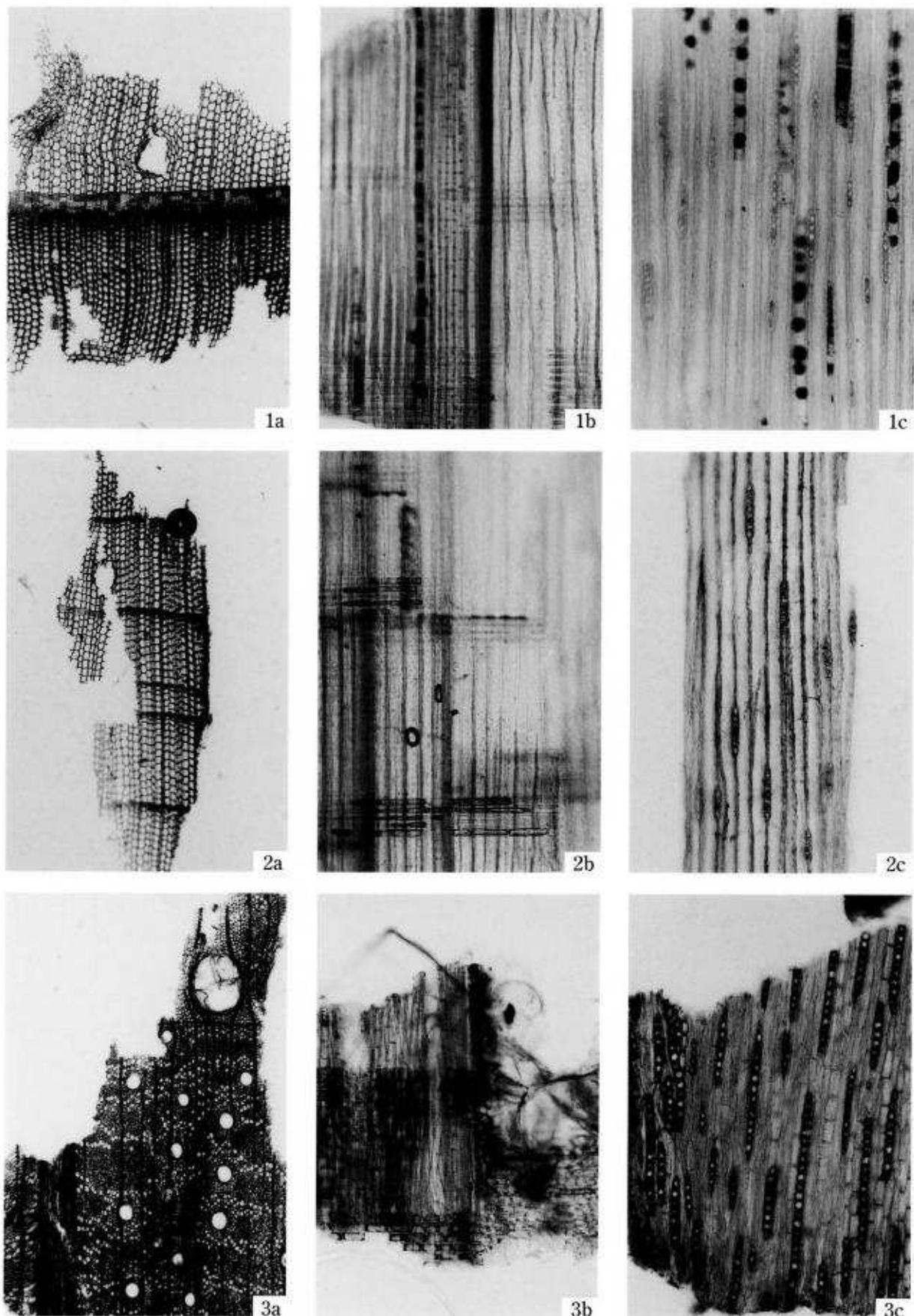
### 引用参考文献

- 出原恵三 1990 「祭祀発展の諸段階—古墳時代における水辺の祭祀—」『考古学研究』第36巻4号 考古学研究会  
林 大智 2002 「千代・能美遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第7号 （財）石川県埋蔵文化財センター

## 報告書抄録

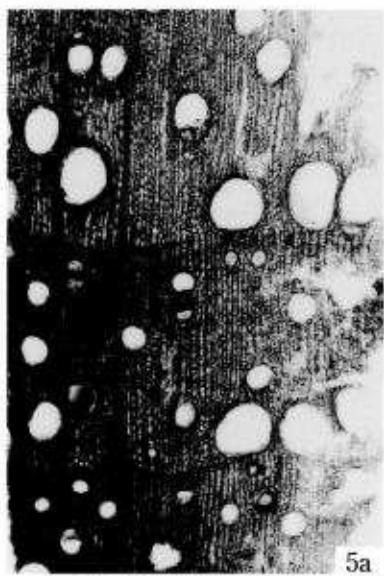
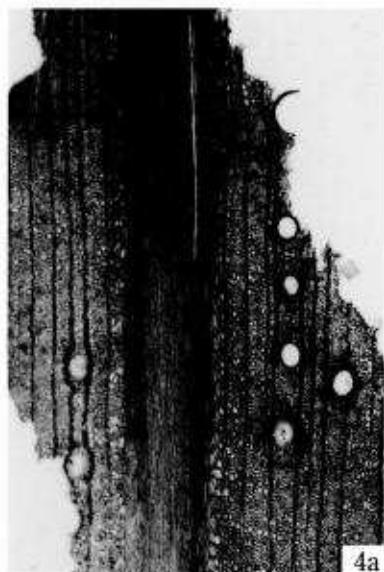
ふりがな	せんだい・のみいせき					
書名	千代・能美遺跡					
副書名	市道能美小杉線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
卷次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	津田隆志					
編集機関	小松市教育委員会					
所在地	〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地					
発行年月日	平成15(2003)年3月31日					
所取遺跡名	所在地	コ一ド		北緯	東経	調査面積
		市町村	遺跡番号			
千代・能美遺跡	石川県小松市能美 町ハ127ほか	17203	03164	36° 24' 25"	136° 29' 20"	約1,400m <sup>2</sup>
調査期間				調査原因		
平成13(2001)年10月2日～平成14(2002)年1月29日				市道能美小杉線改良工事		
所取遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
千代・能美遺跡	集落跡	弥生時代後期～ 中世	平地式建物跡1棟 掘立柱建物跡1棟 ミゾ10本 大溝1本 旧河川2本	土師器 弥生土器 木製品(輪・劍形 木製品など) 鉄製の鍬・鋤先	古墳時代前期 頃の首長居館 の一部。	

写真図版 1 千代・能美遺跡の木材 (1)



1. スギ (試料番号 4)  
2. ヒノキ (試料番号 5)  
3. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (試料番号 7)  
a: 木口, b: 柄目, c: 板目

— 200  $\mu\text{m}$ :a  
— 200  $\mu\text{m}$ :b,c

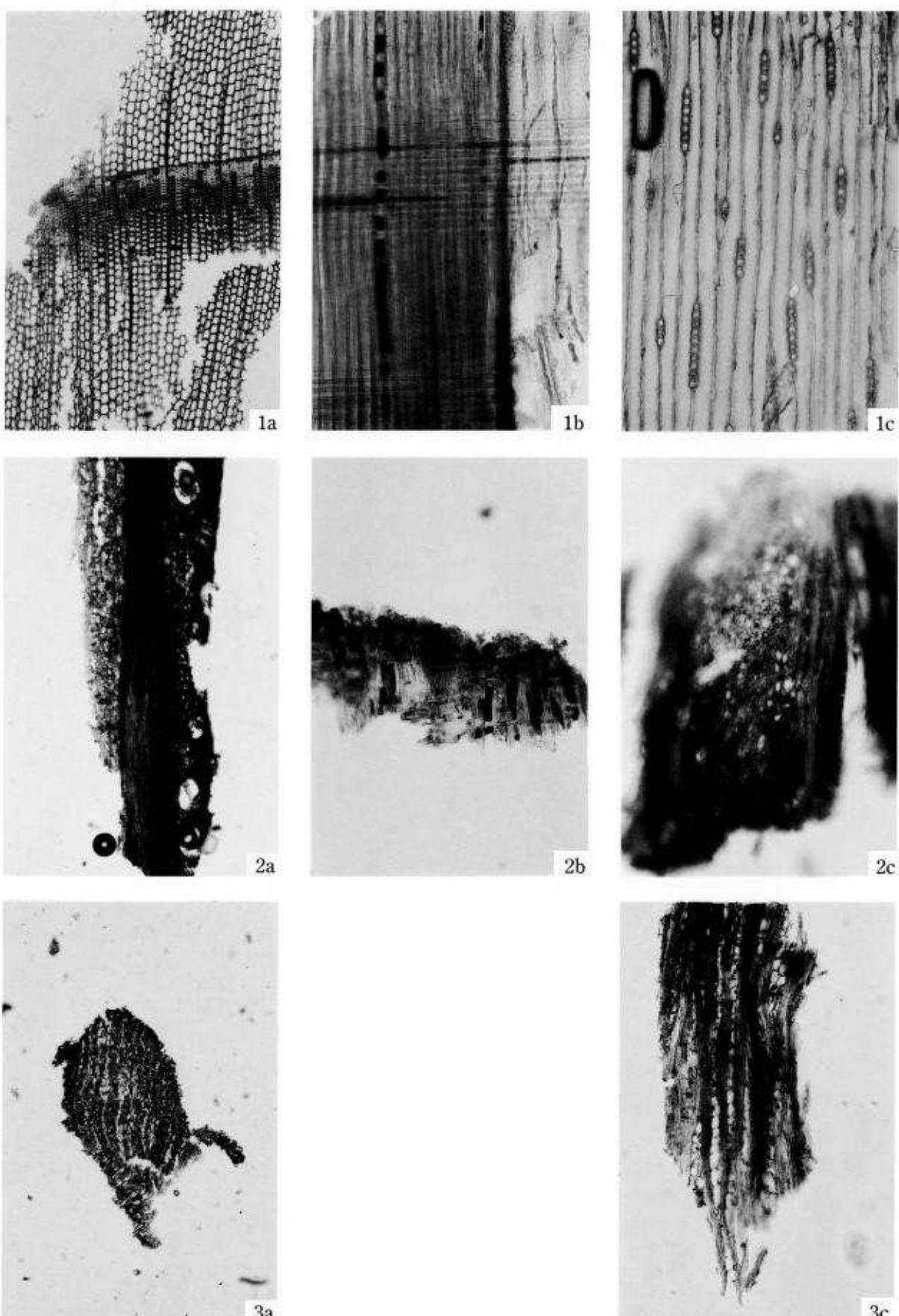


4. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号6 混除け)

5. トネリコ属 (試料番号6 柄)

a: 木口, b: 樋目, c: 板目

— 200  $\mu$  m:a  
— 200  $\mu$  m:b,c



1. スギ (試料番号 2)  
 2. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号 4)  
 3. シキミ (試料番号 3)  
 a: 木口, b: 柱目, c: 板目

— 200  $\mu$  m:a  
 — 200  $\mu$  m:b,c



平地式建物跡（南東から）



平地式建物跡 P 2 遺物出土状況



掘立柱建物跡（北東から）



ミゾ 1（南西から）



ミゾ 5 遺物出土状況（南から）



ミゾ 5 完掘（杭の状況）（南から）



ミゾ 5 完掘（杭の状況）（西から）



ミゾ 6 土層断面



大溝 調査風景



大溝 完堀（北西から）



大溝 柄付き鋤（59）出土状況



大溝 木製蓋（64）出土状況



大溝 剣形木製品（101）出土状況



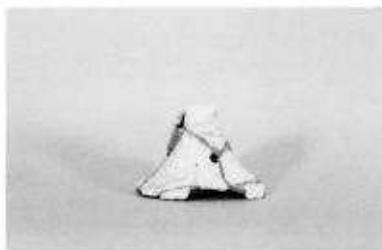
大溝 環頭柄（102）出土状況



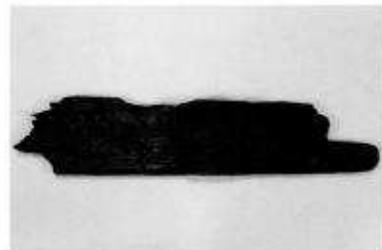
大溝 鉄製の鋤・鋤先（131）出土状況



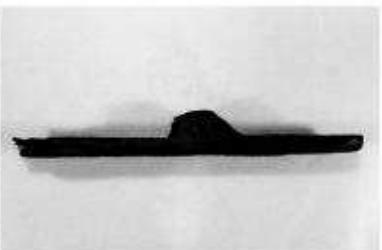
旧河川（古） 南側肩部の土層断面



19 図 8



20 図 10



28 図 20



28 図 27



28 図 35



29 図 47



30 図 53



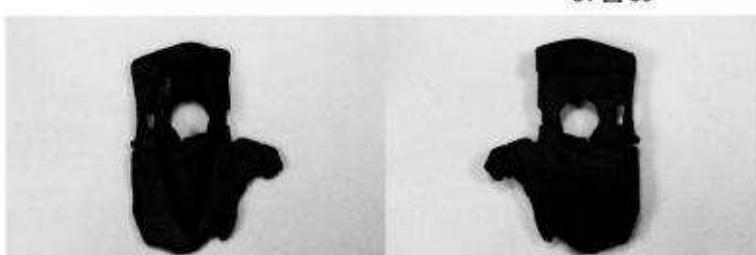
30 図 58



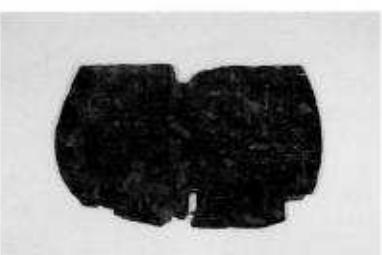
31 図 59



32 図 60



32 図 61



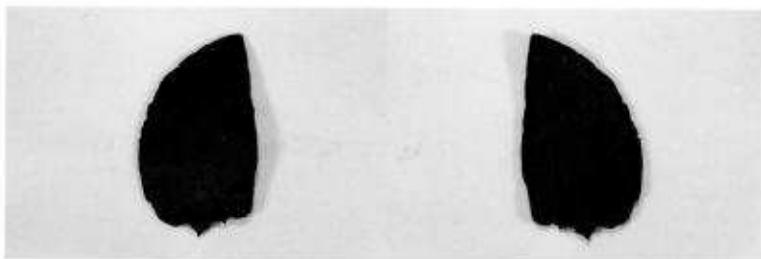
32 図 62



33 図 63



33 図 66



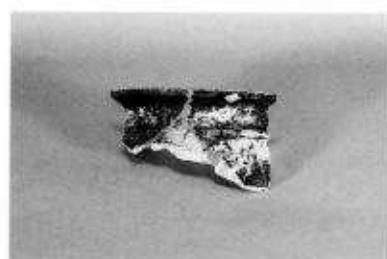
33 図 64



36 図 77



36 図 78



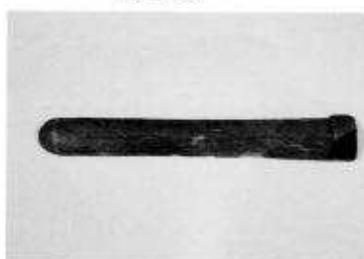
37 図 86



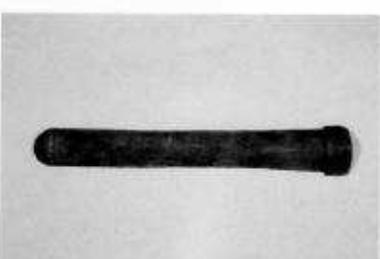
38 図 95



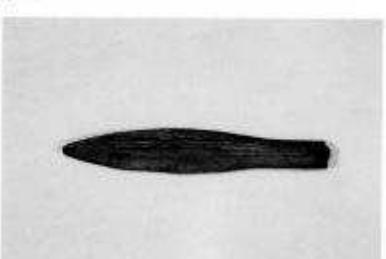
38 図 96



39 図 99



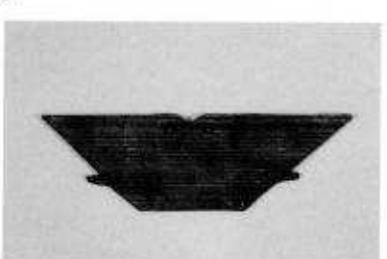
39 図 100



40 図 101



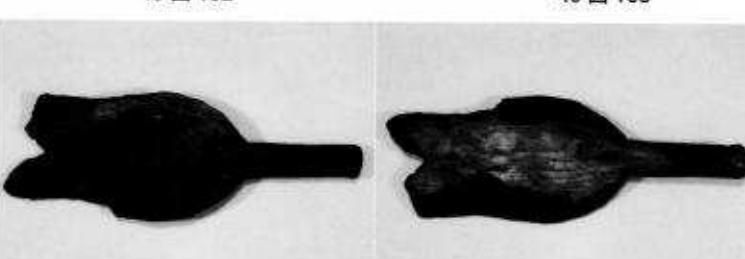
40 図 102



40 図 103



40 図 104



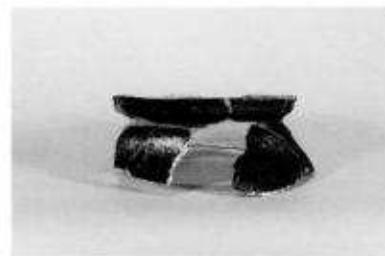
41 図 105



41 図 106



42 図 107



42 図 109



42 図 111



42 図 114



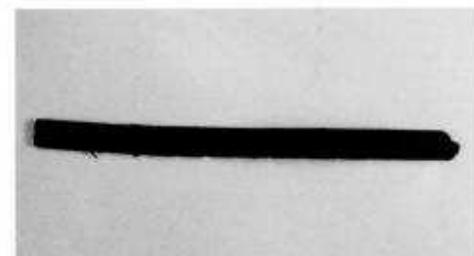
42 図 116



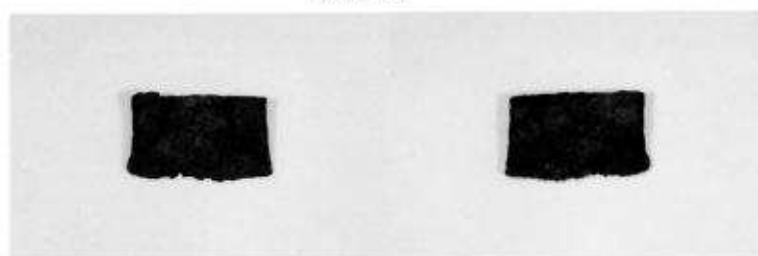
43 図 120



43 図 118



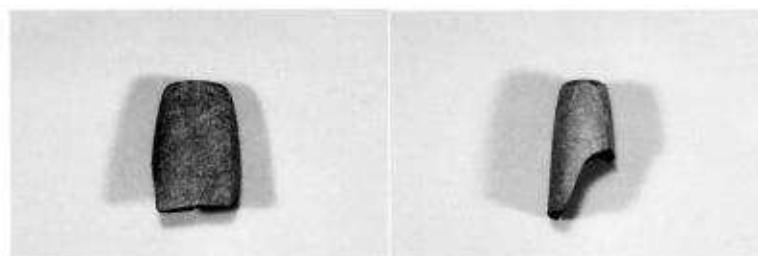
43 図 119



47 図 131



47 図 132



47 図 134

# 千代・能美遺跡

-市道能美小杉線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

平成 15 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 石川県小松市教育委員会  
印 刷 英文堂印刷（株）